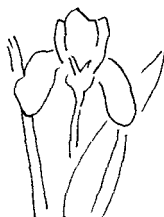


ゲーンズ先生物語

小田切 快三 編



正誤表

一六一頁九行目

小清堀子

・
・

誤

↓

小堀清子

・
・

正

「外側にはふれたけれど、
内側にはまだ手をつけていない」

ナニ・ビ・ゲーンズ



ナニ・ベット・ゲーンズ
(Nannie Bett Gaines)

目

次

附 録	第 四 部	第 三 部	第 二 部	第 一 部	序
年 譜 概 略	あ と が き ……… 一〇〇	2 永 生 ……… 一八九	1 勝 利 ……… 一五九	冬 2 宣 教 ……… 一四八	1 建 設 ……… 一一一
		秋 3 試 練 ……… 一〇〇	2 広島英和女学校 ……… 七五	1 出 発 ……… 五三	
			夏 3 撰 理 ……… 三五	2 若 き 日 ……… 一六	1 お い た ち ……… 一
				春	

序

明治十九年の秋、広島市に最初の女学校が生まれた。その背後には多くの熱心な同志の貢献があった。しかし、その中でも、八十年という遠い昔、若い米人女教師がその全生涯を日本の女子教育にささげる覚悟で、はるばる海を渡って単身この地に赴任したと云う事は、広島島の教育史上に記録されるべきことであろうと思う。その人こそ、元広島英和女学校、現在の広島女学院の初代校長ゲーンズ先生である。

不慣れた風土によく耐え、異国の習慣に自分をよく順応させるだけでも、並大抵でなかった。しかも、安芸門徒で有名な広島の地に、当時、異端視され勝ちであったキリスト教を標榜^{めいぼう}して、四十五年間の長期にわたって、人格教育に尽瘁^{すい}しようとした信念と、勇気と、幾千の教え子達に深く及ぼした感化とは、人種、国境、宗教の相異を超越する愛に徹し得た人のみが持つ力である。

ゲーンズ先生はいつとはなしに、広島市民の中のゲーンズ先生であり、道端で遊ぶ子供達の友であり、あらゆる階層の人々の間に識見と人徳のある女性教育者として敬愛される

人となった。今や、比治山の広島市民墓地に永久に眠る我らの恩師ゲーンズ先生は、広島女学院の校母として、我らに無言の語りかけをされていると感じる。創立八十周年を迎えるにあたり、先生の在りし日の物語を記し、女学院の歩みの中に常に絶大な力となった先生をしのぶと共に、先生の遺業とその理想とを継ぐ者になりたいと願う。

この伝記を執筆された小田切快三氏は、若き日よりゲーンズ先生のもとで教鞭をとり始め、今日まで長年にわたって広島女学院精神を身につけてきた教師であって、ゲーンズ先生を語るに最もふさわしい人である。同氏の労に対し心からの感謝の意を表わすと共に、この書をおして、ゲーンズ先生の生涯が、いつまでも、私共に何ものかを訴えるものであることを祈る。

一九六六年七月

広島女学院長 広瀬ハマコ

第一部 春

1 おいたち

誕生

アメリカ合衆国ケンタッキー州の西北端に、ユニオン郡というところがある。インディアナ州とイリノイ州とに境を接している南部の片田舎である。玉蜀黍・豆・棉の畑が、どこまでも広がり続いているこの土地に、まばらに建っている田舎家の一つ、ゲーンズ(Gaines)家に、かわいい女の子が生まれた。

命名

万延元年(一八六〇年)四月二十三日のことである――。

赤ん坊はアン・エリザベス(Ann Elizabeth)と洗礼名をつけられた。そこで通称ナニ・ベット(Nannie Bett)と呼ばれ、それが彼女の呼び名となった。

南北戦争

ナニが生まれた年の十月、同じケンタッキー出身のアブラハム・リンカーンが大統領に選ばれた。続いて翌年から四年間、国内には、南北戦争のあらしが吹き荒れた。

内戦の間とそれに続く敗戦後の生活は、南部ではことのほかきびしくつらかったが、ナ

ニは、彼女を目に入れても痛くないほど愛した父グスタバス (Gustavus C.) と、愛情こまやかな母キャサリン (Catherin M.) との慈愛にいつまれて、健やかに成長した。

ゲーンズ家は古い家柄であった。その祖は、十七世紀の中頃、新大陸に自由の天地を求めて大西洋を渡り、バジニア植民地に居を定めていた。この初代のアメリカ人ゲーンズ以来、一家は代々その分を尽して新国家の建設に奉仕していた。

ダニエル・ゲーンズ大尉 (Captain Daniel Gaines) は、現在バジニア州エセックス郡となっている以前のラパハノック (Rappahanock) という地方で、その軍司令官と執政官とを兼ねた重要な地位についていた。また、ナニの祖父バーナード・ゲーンズ (Bernard Gaines) は、ジョージ・ワシントンに任命されたアメリカ合衆国陸軍の将校であった。

しかし、父親のグスタバスは、先に一家をあげてバジニアからケンタッキーに移り住むと同時に、先祖以来続いていた軍人の家の伝統をたち切った。彼は剣を鋤すにかえて農場を経営した。一方、法律面での深い学識をいかして地域の人たちに奉仕し、そのために重んじられていたのである。

母方の先祖クロムエルもまた同様、進取の気性に富んだ開拓者の一人であった。寛文十年（一六七〇年）に小さな帆船に身を託して大西洋の荒波を渡り、イギリスからやってきたウィリアム・クロムエル（William Cromwell）は、そのすぐれた識見と勇氣とによって、バルチモア卿（Lord Baltimore）に属するメリーランド（Maryland）の立法会議の有力な議員の一人となっていた。クロムエル家は、やがて、メリーランドから西に進んでバジニアへ入ったのだが、独立戦争の時には、ゲーンズ家同様、新国家建設のために勇敢に戦った米軍の将校を出している。

開拓者精神

クロムエル家が、更に西に移って東部ケンタッキーへとやってきたころには、既にゲーンズ家もそこへ入っていた。開拓者精神にあふれていた彼らは、幌馬車隊に加わって更に西に向い、イリノイ州に近い西部ケンタッキーまで進んで、そこに居をすえ、新しい土地の開発に努力しつづけたのであった。

これら両家の先祖たちは活動的な実践家たちであった。その上更に、将来を見通し、幻をえがき、偉大なものの呼び声にも耳を傾けたが、その呼び声に招かれた時には、ためらうことなくそれに答えた行動の人たちであった。これらのすぐれた先祖たちの血が、幼いナ

ニの中にも脈々と流れていた。そして後にそれが花開いた時、はるか遠く太平洋の彼方、日本の瀬戸内海の一隅に、日本女性のためのキリスト教主義学校が生まれることになったのである。

ナニの生まれた年に、一家は、ユニオン郡のすぐ東隣に新しく出来たウエブスタ郡の中心デイクソン (Dixon) の郊外に移り住んだ。

ナニは両親のいつくしみにつつまれ、一人の兄と妹弟とも仲むつまじく成長した。彼女は身体はどちらかといえばきゃしゃな方で、性格もひかえ目な、おとなしい少女であった。

当時の南部の相当な家庭の例にもれず、両家とも黒人の奴隷を所有していたが、その主従関係はまことに恩情にあふれた典型的なものであった。

クロムエル家で、ある時まとまった金が必要となり、それを得るために奴隷の一人を売るようにと人から勧められた時、クロムエルは、こぶしを震わせて立腹した。このようなことは、家族の一人と別れるのと同じで、彼にはとても考えられないことなのであった。

一方、ナニの家では、妹レイチェル (Rachel) のほかに弟が一人生まれたが、父は間もなく病死した。母キャサリンは、夫の死後、一家をささえてゆくことと、子供たちの養育とで、手一杯の忙しさとなった。だが彼女はその上に、黒人召使らの面倒をも小まめによく見てやっていた。だから、奴隷解放が伝えられた時「解放されるのは奴隷たちよりもむしろ、私自身の方ですよ!」と、思わず口にしてしまうほどであった。

ゲーンズ家の老召使の一人にウイリアムという黒人がいた。キャサリンは、このウイリアムをも自由にしてやるようにといわれていたが、彼の性格を思うと、果してそれが彼のために仕合わせになることかとその行く末が案じられて、なかなか決心がつかなかった。案の定、彼が後に酒におぼれて哀れな死に方をしてしまったので、恩がかえって仇となったことをあととまで後悔した。このウイリアムは、ある日、民主党が選挙で勝てばまた奴隷制度が復活するぞ、と冗談におどかされると、「そりゃ何よりありがてえというもんでさ、ほしたら又、キヤス奥さまのところへもどれます」と、澄ましてうそぶいたということである。

もう一人、ボップ (Bob) という忠実な黒人がいたことにもふれておかなければならな

い。彼はナニを愛して、まめやかによく仕えた。

ひっそりした昼すぎの農場で、幼いナニがただひとり、ペランダのぶらんこいすでぶらぶら前後に揺られながら、ぼんやりしているような時、どこからともなくポップは現われてきた。父親を早く失った幼い主人の寂しそうな姿を見ると、彼の単純な心もおしきでいっぱいになるのであった。

「お嬢さま、お元気でございますか」

と、ポップは人の良さそうな黒い顔に白い歯を見せてあいさつした。

「ハーイ、ポップ。元気よ、お前は？」

「わたしはいつも元気でございますよ、お嬢さま」

「今日はどんなお話をしてくれるの？ ポップ」

「そうですね、何の話をしましょうか。——そうだ、ヨナの話をご存じですか？」

「ヨナ？ ええ、一寸ね。日曜学校で聞いたわ。でももう一度聞きたいわ、お話してよ、ポップ」

そこでポップはポーチの階段に腰をおろして、飛び出た唇を一層とがらせながら、しわ

がれ声でゆっくりと物語を始めるのであった。

こうして、ボップは聖書の物語をはじめ、古くから南部に伝わっている面白い昔話をもよく語り聞かせた。それが幼いナニの想像力を多少とも豊かにしたことは否定出来ないようである。

ボップはまた、その広い背中にナニを背負って、両側に玉蜀黍畑がどこまでも海のように広がっている田舎道を学校へと送り迎えし、護衛の役目もよろこんで果たした。

こんなわけで、父が早く亡くなっていたとはいえ、もし戦後の窮乏がナニらの住んでいた地域にまで押し寄せてこず、又それに加えて農場での随分きびしい生活を彼女が経験していなかったとすれば、このように大切にかばわれ守られていたナニは、結構甘えっ子のお嬢さまになってしまっていたかもしれない。しかし、母が雑多な仕事で多忙であったこともかえって幸いして、彼女は幼い時から、自分でよく考えてひとりで物事を処理する自主的な精神を身につけることが出来た。

「…………それはあなたが自分で考えてきめることでしょう、ナニ……………」

と、賢明な母はよく励ましてくれた。

同時に又「人に仕えられる」ということも、終生ナニから離れないものとなっていたようである。彼女にはお嬢さまぶった見せかけは、一かけらもなかったし、特別な好意を示されることを人に求めるようなことも少しもなかった。それなのに彼女のためには何かをしてあげたいと、多くの人に思わせるようなものが、特に後年のナニ・ビ・ゲーンズには備わっているように思われた。他人に対する思いやりが深かった彼女は、周囲の者が特別の心遣いを示すと、いつも、「そんな無駄なことをしてはいけない」とたしなめた。ところが、人々はたしなめられながらもいっそう彼女へは好意を寄せるのであった。だから後年、ゲーンズ先生と旅行をする者は、日本国内であろうと、朝鮮、満州、中国、台湾あるいはアメリカ本国であろうと、誠にたのしい旅行が出来ることを喜んだ。旅行のさきざきで、先生の知人や友人が、遠いところからでもはせつけて、先生が気持よく旅が出来るように、いろいろと心を配ってくれたからである。

いま一つ、早くからナニの身についていたものは宗教であった。彼女は宗教的な家庭の血を受け継いでいた。ゲーンズ家もクロムエル家も、共に、代々英国国教会の熱心な信徒

であり、一族の中からは教会の監督 (Bishop) となった人物も出ていた。しかし、彼らが新大陸に渡り、ケンタッキーの田舎に居を定めた時、そこまではまだ監督教会は入っていなかった。だが、メソヂスト派は既に最初の開拓者たちと共に西進してきていた。そこで、ナニの祖父の監督教会員リチャード・クロムエル大尉 (Captain Richard Cromwell) がレイチェル・マヤーズ (Rachel Meyers) と結婚した時、リチャードは結局、妻の属していたメソヂスト派の会員となった。彼の孫娘が後に、メソヂスト教会の宣教師になったことを思う時、ここにも既に神のみ手が働いていたことを思わないではいられない。

そんなわけで、この孫娘は豊かな宗教的遺産を受け継いでいたといえる。それは英国監督教会の古い伝統と堅実さに加えて、メソヂスト派の熱心さをも合わせ持っている立派な遺産であった。だから、ナニの家庭の中には、控え目ではあったがほんものの敬虔な^{けん}霧^{きん}囲気が豊かにただよっていたのだ。そのために、西部の開拓地によく見られた宗教的感情過剰にもならず、又新世界に移り住んだお歴々の間で、しばしば信仰と思い違いされていた因襲的形式主義や、むやみに体面ばかりを気にするごう慢さなどにも陥らないですむことになった。

あとのことになるが、ナニ・ビ・ゲーンズはその長い宣教師生活の間、他宗派の人たちとも大様に分けへだてなく親しい交わりを結んだ。それらの人たちの中にはセブンスディアドベンチストの信者もいたし、仏教の僧侶すらもいたが、主イエスがそうであられたように、宗派にとらわれた狭い感情を彼女は少しも示さなかった。広島女学校の校長となった時には、仏教僧侶の娘にも、牧師の娘に与えられていると同じように、月謝免除の特権を与えるようにとまで、彼女は主張した。

ナニ・ビ・ゲーンズが持っていたこの宗教的に大らかな精神は、先に述べたように、その家庭の中で宗教経験の異なった二つの要素が誠によい工合に混ざり合っていたからであろうが、更に、彼女が少女時代を過ごしたケンタッキー州ウェブスタ郡での若い友だちとの交わりによっても一層強められたようである。

これらの若い仲間たちはほとんどが農場暮らしであった。そこでは激しい労働の明け暮れに、生活が粗野になり勝ちなこともやむを得なかった。娯楽といってもない人々には、隣人を訪問して終日をすごすことや、ディクソン (Dixon) プロビデンス (Providence) ケイシイビル (Caseyville) モーガンフィールド (Morganfield) などの町々へ時々出か

けて行くこと、あるいは、もう少し足を延ばして、ヘンダーソン (Henderson) エバンズビル (Evansville) ルイジール (Louisville) などへ都会見物に出かけることが、大事件のように思われていた。景気のよいバーベキューが付きものの毎年の野外パーティーは、村のおとなたちにも子供たちにも、どれほど、指折り数えて待たれる特別な日になっていたことであろう。

このような田舎では、教会行きも一つの大切な行事であった。近くのクレイ (Clay) にはメソヂスト派の教会も長老派の集会所もあった。若い人たちは、教派にこだわらずそれらの教会に出かけたのだ。そこで精神的な満足が得られるばかりでなく、社交的な満足までも得られるとなると彼らの行動が超教派的となったのも無理からぬことであろう。

既に可愛らしい少女に成長していたナニは、日曜日の朝になると、木綿ながらさっぱりした晴れ着に麦わらの飾り帽子をかぶって、近所の同年輩の友だちと誘いあわせて出かけるのであった。彼らは午前には長老教会の日曜学校に集り、午後には又、一団となってメソヂスト教会へ出かけてゆくのが常であった。集会が開かれる時には、朝の礼拝にも夕拝にも欠かさずによく出席した。この土地にも教派心がないではなかったのであろうが、ナニ

はあまりその偏狭な影響は受けなかったようである。

このように、ナニがその幼時と少女時代を都会の騒がしさを離れたケンタッキーの農場で過ごしたことは、後に宣教師教育者として、母国を遠く離れた異国で、不便の多い生活環境と戦いつつ困難な学校経営をやりぬく上で、どれほど大きな力となったことであろう。クレイやディクソンにある田舎の学校は、知識の面ではそれほど大きなものを彼女に与えることは出来なかったかも知れない。けれども、農村の、自然にかこまれた簡素な朝夕の生活では、その自然の美しさを愛する心情と共にいろいろな場合に忍耐力もひとりでに養われた。純朴な村人たちとの交わりの中で身につけることになったこまやかな人情や質素な生活振るも、都会生活ではたやすくは得られない賜ものであったにちがいない。

その上、ナニにとって仕合わせであったことは、田舎の学校が与えてくれた以上のものを、自分の家庭で得られたことである。

賢明な母キャサリンは都会から離れた農場の中に家を構えながらも、故郷バージニアの古い伝統をしのばせる文化的な空気を、家庭の中に出来るだけただよわせて置こうと心をくだいていた。田舎屋には珍しい立派な書斎を持っていたのもその一つの現われであっ

た。そこには、祖父や父が残してくれた多くの蔵書が、古い皮とちの背を見せてどっしりと並んでいた。父や祖父たちの威厳にみちた肖像も掛けてあった。その中には曾祖母クック（Cook）のものも無論あった。開拓時代の女丈夫の一人である彼女は、夫の死後も、荒々しい西部で、小さな子供たちの養育を女手一つに引き受けて屈しなかったのだ。鞍の前子供、後ろには食料の粉袋をくくりつけて、未開の西部をめざして幌馬車隊と行動を共にしたこのひいおばさんについての話を、ナニは幾度聞いてもあきなかった。クロムエル流に顎を上げて毅然として立っているその古い肖像の前に立つと、ナニはいつも身内が引きしまり、自分の顎もひとりでに上がるのであった。

ナニはこの書齋が好きであった。彼女はこの部屋で古いおとぎ話や童話の世界に我を忘れた。が、間もなくそんな軽いものでは物足りなくなった。何気なく開いたもっとむつかしいものの方が、いつからか彼女の心を捕えるようになっていた。こうして、歴史・伝記・旅行記・探險記・随筆・詩と読みあさりながら、彼女は何時間もこの部屋ですごくこになった。村の子供たちの荒っぽい遊びに加わるよりも、ここで好きな本を読んでいる方がナニにはずっと楽しかったし、その間は寂しさも忘れることが出来たのだ。

そんなわけで、学校で歴史や地理を学ぶようになった時には、それらの学科は既に彼女にはやさしすぎるものになっていた。当時の教授法もずい分退屈なものであったようである。

「私は子供のころ、学校で学んだより以上のことを、母や兄から学びました」と後に述懐しているように、むしろ、家庭での勉強の方が彼女には役立ったらしい。

こうして次第に広い知識を身につけてゆくにつれて、少女ナニの知的欲求は一層高まっていた。彼女の興味は段々と一般社会の生活や、もっと広い世界の動きなどにまで広げられていったが、そのことを助けたのは定期刊行の雑誌類であった。そのうちでもルイビル・キュリア・ジャーナル (the Louisville Courier Journal) やクリスチャン・アドバケイト (the Christian Advocate) を彼女はよく手にした。そのほかに、ユースコンパニオン (the Youth's Companion) や禁酒新聞なども読んだ。それらの連載物語は小説のように面白かった。当時はまだ清教徒的な考えがゆきわたっていて、小説に読みふけるなどということは、もっての外と思われていたのだ。だから、内心では残念に思いながらも、彼女は小説類は読んでいなかった。しかし、歴史物のロマンス物語だけは、良心にちょっぴり痛みを感じ

じながらも読まないではいらなかったらしい。彼女も又多感な乙女に成長しつつあったのであろう。

母キャサリンは、経済的な理由もあって、当時、ウェブスタ郡で小さな学校を開いていた。ナニはやがて母の学校を終えると、高等学校へ進みたいと思った。

「ね、お母さま、お願いがあるんですけど」

とナニはある日遠慮勝ちに母に切り出した。

「なんすでか、ナニ」

「私、もっと勉強したいんですけど……」

「それは結構なことじゃありませんか、ナニ。出来る時にうんと勉強して置くことは大切なことですよ」

「うれしいわ、お母さまが賛成して下さい。で、私、高等学校に進んでいろんなことをもっと学びたいんですが、いかして下さいますか、お母さま」

と彼女は自分の希望を熱心に述べた。

ナニのこの希望は家族にとっては予期されないことではなかったのだが、その希望をか

なえるためには家族は少なからぬ犠牲を払わねばならなかった。結局、モーガンフィールドにある学校が選ばれた。それは彼女の生れ故郷のユニオン郡にあったし、その町には親戚も住んでいて、何かにつけて都合がよかったからである。校長は有能なオースチン大佐 (Col. J. S. Austin) で、学校もなかなか評判がよかった。ここで、田舎出の恥かしがり屋の娘ナニは、代数、ラテン語、その他いろいろな学科を勉強した。そればかりでなく、町の若い男女のしぐさも習いおぼえ、彼らとも結構仲良くつき合ってゆくすべも身につけることが出来た。

2 若 き 日

大学進学

モーガンフィールドで高等学校の課程を終えた時、ナニは更に高い知識と教養とを求めた。その結果、家では「ベルトの穴がもう一つ引き締められる」ことになり、兄はとうとう大学をあきらめて働きについた。

フランクリン女子大学

こうしてナニが入学したのは、ケンタッキー州フランクリンにあるフランクリン・フィーマル・カレッジ (Franklin Female College) であった。それは恩師オースチン大佐が学

長となっていた小さな女子大学であったが、小さな大学が持っている多くの良いものがそこにはあった。オースチン学長をはじめ教授たちとの親しい個人的接触を通して、ナニは多くの尊い感化を受けた。学寮での学友たちとの交わりも、無論親密で楽しいものであった。小さな町全体が、大学を中心にした一つの理想境であるようにすら彼女には思えた。ナニの言葉を借りて言えば「そこには貧しい者も金持もおらず、ちがった教派に属する人たちも親戚同志のように親しくしていた。町の人たちは皆、心を一つにして大学に関心を持ち、休暇になると、遠方から来ている学生らは引っぱりだこで町の家々に招かれ、まるで家族の者が帰って来たかのように歓待される」のであった。

学友らも皆よい娘たちばかりで、彼らは「知能や成績の点では特にすぐれているというのではなかったが、皆熱心で、簡素な生活をし、清教徒的な理想に燃え、責任をもって人生に乗り出し、経験を生かして役立ってゆこうとする心の用意が出来ていた。」この大学で結ばれた学友たちとの友情は、互いの文通によって年と共に深められ、その結果は後に、日本に於けるナニの仕事の上で非常な助けになった。

このようなよい環境の中で、ナニはその宗教的感化をも素直に受け入れた。在学中、彼

女はついに心くだけた悔悟者となって信仰を告白し、教会の正会員となった。ナニのこの回心は、妹レイチェルにとっては一つの驚きであつたらしい。ざんげするほどの罪を姉が持っているなどとは、この妹にはとても考えられなかったからであらう。

とにかく、このように恵まれたよい環境の中でナニはのびのびと勉強をし、学友らとも互いにこまやかな友情をつちかい合い、高い理想をめざしながら宗教的品性を養いつつ、四か年の恵まれた大学生活をすごした。卒業したのは十八才の春であつた。

ナニがもし、大学に進まずに田舎で家庭に留まっているか、又進学するにしても女子大学以外の共学大学に進んでいたならば、恐らく、誰かこのましい若者と結婚していたかもしれない。ナニは澄んだ眼をした美しい娘であつた。また世間一般の娘たちと同じように若者たちともごく普通の親しい交際もしていたのである。彼らとの楽しい思い出も皆無ではなかつたであらう。けれども、結婚の問題を真剣に考えるまでにはならなかつたようである。ナニにとっては、そんなことよりもまず、家族へ果たさなければならぬ義務があつた。近所の娘たちのように、結婚生活のことだけをのん気に夢見ている訳にはいかなかつたのである。とにかく、彼女は落着いて身をかためるという気にはなれなかつた。どこか

ははっきりわからなかったが、自分を招いている何か不思議な強い力が自分の中に動いていることを、無意識の中にも彼女は感じていたようである。

当時、結婚を考えていない娘たちに開かれていた唯一の門戸は、学校の教師になることであつた。そこで、ナニも、教師になろうと決心した。

その決心を実行しようとしたが、ナニは病氣になつてしまった。生来、あまり丈夫なほうではなかつた彼女には、大学生活の最後の年のさまざまな無理や緊張がたたつたようであつた。

卒業式の晴れ姿に母が涙ぐんで喜んでくれたのも束の間、家に帰ってからの彼女は一向に元気がなかつた。

ある日曜日、教会の礼拝から帰ると、自分の部屋へはいったきり、昼食にも姿を見せなかつた。レイチエルが心配して部屋へ行ってみると、青ざめた顔でベッドに横たわつてた。

「どうしたの？ ナンシイ、気分でも悪いの？」

「ええ、レイチエル、何だか変なのよ、胸が苦しくって」

と答える声も弱々しかった。

やっと夕方になって来てくれた医者が、「疲れが出たのでしょう。しばらくゆっくり休めばよくなりますよ」と言って帰ったが、一週間経ってもよくならなかった。彼女は食欲もなく、日毎に弱ってゆくばかりであった。

毎日訪ねてくれる医者がとうとう眉を寄せて首をかしげるのを見て、家族の心は不安に戦いた。ドアの開けしめにも気が配られ、話をするにも声がひそめられた。家の中に重苦しい空気がよどむ幾日かがつづいた。△せっかく大学を出たのに……▽と思うと、母のキヤサリンはつい涙ぐみそうになる自分を叱った。△馬鹿な、そんなことがあってよいものか、お医者さまのおっしゃるとおり疲労が重なったのだ。そのうちきつとよくなってくれる▽と自分に言いきかせてはみるものの、不安は去らなかった。

ところがある朝、やっとベッドに半身を起こして軽い流動食をとれるようになったナニの顔に、やつれてはいたが、あのクロムエル流の堅く顎^{あご}を張る強い表情が現われているのを目ざとく見つけた母は、△もう大丈夫▽と思った。それは確信のようなものであった。

母が思ったとおり、それからのナニは日増しに元氣を取りもどしていった。

一見ひ弱そうに見えるナニの中には意外に強い頑張りの精神があって、それがこの時の病氣との戦いにもとうとう勝利を得たようである。

教師就任

秋には、ナニはすっかり健康をとりもどした。間もなく古里ユニオン郡の小さな小学校で、若い一人の教師として子供たちに取り囲まれていた。それが教師としての彼女のスタートであった。

ナニは四年間、公立学校で教えた。学校は家から余り遠く離れていなかったのも、たびたび母や妹たちをも訪ねることが出来た。ところが、その四年目の終り頃、母とも死別しなければならなくなった。

母の死

祈ること、読むこと、書くことから、父に代って知的な世界への道を示してくれた母。子供たちの成長を賢く見守って、自主独立の習慣をつけてくれた母。一たび手がけ始めたことは、最後までやり抜く不屈の精神の大切さを教えてくれた母。隣人を愛する暖かい愛の行為の美しさ、とうとさを身をもって教え示してくれた母。心をくだいて自分たち兄妹をいつくしみ愛してくれた賢くやさしかった母。その母に別れることは、ナニには堪えら

れぬほどの大きな悲しみであったにちがいない。

母亡きあとの家庭をもり立ててゆかなければならなくなったナニは、より大きい働き場へと乗り出してゆくことになった。

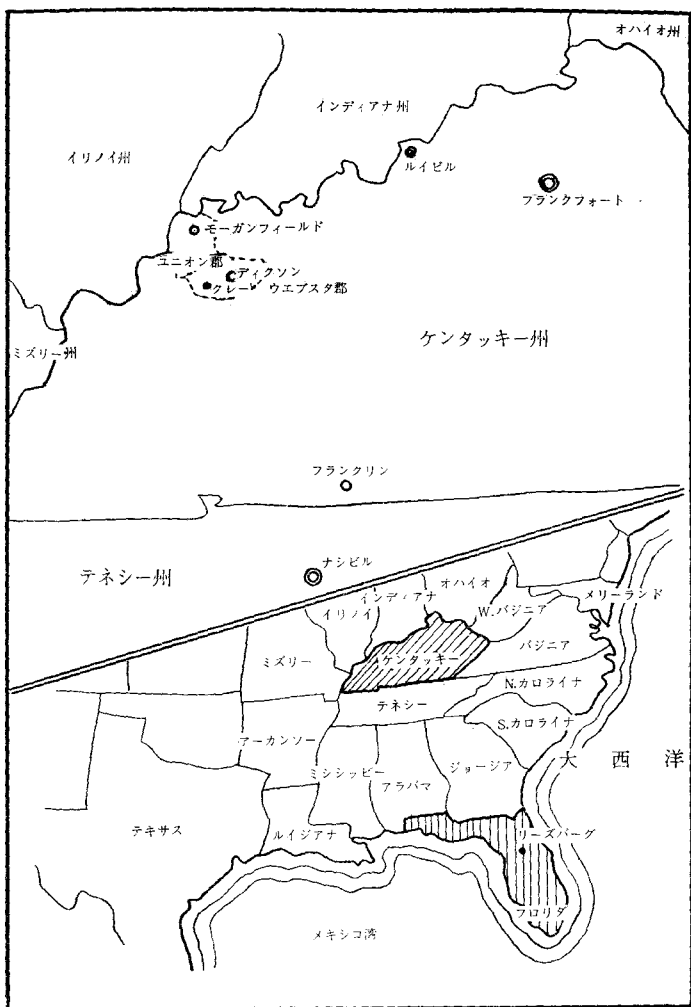
フロリダへ

弟が、二、三年前からフロリダ州のリーズバーク (Leesburg) へ出かけていたのが手づらとなって、ナニはその町の公立学校に勤めることになった。当時のフロリダは駅馬車が唯一の交通機関である新らしい開拓地であった。リーズバークは州の中ほどにあって、湖水に近い小さな町であった。

研
修

ここでの新しい職場は、ナニの才能を一層練り働らせることに役立ったらしい。彼女は、自分で選んだ教職に関係のある勉強のために、あらゆる機会をとらえて努力した。忠実に出席した大学の夏季講座では、教育原理や児童心理学の新しい学説について学ぶことも出来た。それらは彼女にとって誠に興味深い新しい知識の世界であった。彼女は持ち前の熱情を傾けて、これらの知識を出来得る限り身につけることに努めた。

実際、すぐれた教授法を進んで取り入れようとするナニのたゆまぬ努力は、この時から引きつづき半世紀後の彼女の最後の日まで続けられることになった。事実、ナニが後に広



(ケンタッキー州と関係地略図)

島で女学校を開き、その校長をつとめた長い年月の間も、彼女は教室で教えることをやめたことはなく、進歩した教授法や教育理論を彼女はたびたび教師たちに伝達したのである。昭和二年、イギリスの有名な英語教育家ハロルド・E・パーマー (Harold E. Palmer) が日本に来ていた時、彼を学校に招いて、英語教授研究会を開き、自校の教師たちのみならず広島英語教育界のために尽したこともその一つの現われといえる。

クック郡師範学校のフランシス・W・パーカー大佐 (Col. Francis W. Parker) のことを仲間の教師から耳にして、早速その教えを受けに出かけたのもこの頃であった。大佐は親切にナニを指導し、後に彼女が日本に渡ってから、自分の著書や学校の刊行物を生涯彼女に送り続け、誠によい忠言者となり、激励者の一人となってくれた。

熱心なナニには自然と良い友人が与えられた。コロンビア師範大学のパティ・スミス・ヒル (Patty Smith Hill, Teachers' College, Columbia University) やシカゴのナシヨナル・キンダガートン・カレッジのエリザベス・ハリソン (Elizabeth Harison, National Kindergarten College, Chicago) などとは、仕事を離れて、親しい友人関係を結んだ。これらの友人たちとの長年にわたる文通によって、ナニは後に日本に渡ってから絶えず

母国の教育界の新しい動向に通じていることが出来たのである。

パティ・ヒルは後に、「このように偉大な人物」の計報に接した時、遺族に送ったその悔み状の中で次のように述べている。

「御承知のように、彼女と私とは四十年以上も親友の間柄でした。お互いにたびたび会う機会には恵まれませんでした。が、距離が互の愛情のきづなを妨げたことはございません。彼女は人柄は無論のこと、教師としても、誠にすぐれた人物でございました。」

リーズバーグで教えながら、自分でもたゆまずに学んで過した数年間は、ナニにとって、将来の大切な仕事につくための誠に貴重な準備の時となった。

大学に就任

しかしナニは、まさか近い将来に太平洋を渡って未知の国へまで出かけてゆくようになろうとは、夢にも思っていなかった。そこで明治十九年（一八八六年）、その地に新設せられたばかりのフロリダ・カンファレンス・カレッジ (Florida Conference College) で教えてくれるようにとの招きを受けた時、これを承諾した。友だちや親戚せきの者は無論彼女がこの新しい地位を得たことをひどく喜んでくれた。ケンタッキーの田舎出の教師にとって、たしかにそれは一つの成功にちがいなかったからである。

けれども、フロリダの小さな大学でいつまでも教師を続けているには、ナニ・ビ・ゲインズの受け継いでいた開拓者魂は余りに大きすぎたらしい。周囲の事情で、彼女はしばらくはそこにいたのであるが、いつの日にかは西に向って進むことになっていたのだ。果たしてその時は、年が明けぬ前に意外に早くやって来た。その時、この清教徒開拓者の孫娘は、興奮した顔にひとみを輝かせて、サンフランシスコ湾の入口ゴールデン・ゲイトを通り、夕陽に真向って航海して行ったのであった。

このように述べてくると、宣教師になる決心が、ナニに突如として起ったように思えるが、こうした場合の例にもれず、それまでにはやはり幾年かの間に少しづつその氣運が積まれてきていたのである。

その最初の一つと思われるものとして、ナニのフランクリン女子大学在学中の出来ごとを述べなければならない。

当時、ナニはまだ十七才の夢多い乙女であった。

ある日、同室の友人が一通の手紙を見せてくれた。その友人はテネシー州ナシビル

(Nashville, Tennessee) からきている牧師の娘で、手紙はその母親からのものであった。

「ナニ、素晴らしいニュースがあるわ」とその友は明るい顔で呼びかけてきた。

「どうしたの、うれしそうにしてキャロル、何のニュース？」

「あなた、ドクタ・ランバス (Dr. Lambuth) のことご存知？」

「ドクタ・ランバス？ いいえ知らないわ」

「ナシビルの近くのウッドバイン教会 (Woodbine Methodist Church) の牧師さんよ。おとうさまは中国への宣教師で、彼も上海生まれなの。大学は無論こちらで、医学を専攻なさったのよ。でもおとうさま同様牧師になるためにバンダビルト (Vanderbilt University) の神学部を出られたのよ。私がここへ来る時はまだ神学生だったけど」

「それがどうしたの？」

「その方がこの夏、デイジイ・ケリー (Daisy Kelley) と結婚されるんですって」

「デイジイ・ケリーって誰なの？ お友だち？」

「ええ、親しいというほどでもないけど、よく知っているの、ナシビルでね。私より二つ上ということだから、多分十九の筈よ。黒い髪、とても美しい人よ」

「まあ素敵ね」

「デイジイのおとうさまも、ドクタ・ランバスのおとうさまと一緒に中国へ行ってもらったことがあるのよ。それで、ドクタ・ランバスが両親と別れて、パンダビルトで勉強中からケリー家へはよく出入りしてらっしゃったし、ひところは下宿してらしたこともあるらしいわ」

「そこでロマンスが生まれたって訳けね。素敵じゃないこと！」

「でしょ。それだけじゃないのよ。ナニ。あの人たちが結婚すると十月には一緒に中国へ出かけるんですって」

「えっ、中国へ一緒に……」

「ええ、ドクタ・ランバスはおとうさま同様、中国伝道に使命を感じてらっしゃるらしいわ。でもデイジイも偉いと思わない、ナニ。何もかも置いてそんな遠い東洋へ出かけてゆくんですもの。勇敢だわ。でも愛する夫と一緒になら、楽しいでしょうね」

「そらね。でも本当に素晴らしいことだね、キャロル」

とナニは答えて、素晴らしいことだと本気で思った。自分とあまり年もちがわないその

デイジイという若い人妻が、すべてのものをあとにして夫に従い、太平洋を渡って遠い東洋にある彼の任地へ出かけてゆき、ただ福音を伝えるということのために労苦をいとわず励むのかと思うと、ナニは深い感動を覚えたのである。

それから少し後に、マービン監督 (Bishop Marvin) やその同志ヘンドリックス博士 (Dr. Hendrix) の東洋から出した手紙がナニの手に入ったことから東洋への関心を彼女は一層強く抱くようになった。中国からきたこれら監督たちの手紙は、単にロマンティックな想像以上に深い何物かを彼女の心に沸き立たせたい。そのころから、ランバスという名前が、魔法にでもかかったかのようにナニの心に浮かび続けた。最初は英雄的な大胆さと結びついていたこの名前は、彼女の心の中で次第に、もっと崇高なもの、例えば宣教師の犠牲と苦闘、不屈の信仰と忍耐、などを示すものとなっていった。

大洋が大洋に呼びかけるように、一人の開拓者の精神が空間を超えて彼女の魂に呼びかけたのであろうか。ナニ・ビ・ゲーンズは、今までにかつて、宣教師大会に出席したこともなく、宣教師養成機関のあることすら聞いたこともなかったのに、宣教への呼び掛けがきた時には、直ちに応じられるような準備を無意識のうちに整えていたのであった。

先に述べたような事情で、フロリダで教師生活をしていたナニは、ある日何気なくクリスチャン・アトバケットを取り上げて、そこに出ている宣教師教師求人の記事を見た。それはナシビルの南メソヂスト監督教会伝道局主事アイ・ジ・ジョン博士(Dr. I. G. John)が載せたもので、日本で開かれたばかりのある教会関係の女学校で教師を求めているという記事であった。「日本」という名前は確かに魅力的ではあったが、中国、ブラジル、アフリカほどには彼女にはまだびんとこなかった。ところが、その記事を読んでゆくうちに、その助けを求めている声は、あのドクタ・ランバスからのものであることがわかった。ランバス——それはフランクリン女子大学在学中に、その妻デイジイの名前と共にナニの心に想像の焰を燃えさせたあの若い宣教師の名前ではないか——。

△ドクタ・ランバスが……▽ナニは、かかえていた書物を夢中で机の上に置くと、その記事をむさばるように読んだ。

それには日本のヒロシマという瀬戸内海沿いの古い町に、福音の種がまかれ始めていること、その町のキモノを着た婦人たちや若い娘たちが、^{かわ}渴いた者が水を求めるように新

しい知識と共にキリストの救いを必要としていることなどが、かなり詳しく書かれていた。

△あのランバス夫妻が日本に来ていたのか。そして自分が、ひょっとしたら、彼らとも親しくなり、その素晴らしい仕事を分担して働くことも可能なのであろうか：▽ナニはその記事の呼びかけが自分に向ってされているような気がした。自分がそんな大それた立場に立てるなどと思うことは、馬鹿げた考えだ、と一方では否定しながらも、一たび心に焼きついたその思いはなかなか消えなかった。

ナニはその仕事と結びつけて自分のことを考えてみた。

△それは恐らく骨の折れる、責任の重い、困難な仕事にちがいない。自分に果してそんな大切な仕事につく充分な資格があるだろうか。伝道局が果して、自分のような身体の不健全でない者を外国へ派遣するであろうか：▽と、そんなことをあれこれ思うと、結局自分には資格が無さそうなことに気付くのであった。

△ああ、矢っ張り駄目だわ……▽と思うとナニは悲しかった。が、△これは結局忘れなければならぬことだ▽と自分にいいきかせた。

二、三日がこのようにして過ぎていった。

だが、ひとたび心にえがき出された奉仕への幻だけは、いくら払い除けようとしてもはらいのけることは出来なかった。

ついにある朝、何か見えないものの手で導かれるかのように、ナニの足は牧師館の方へ向っていた。△伝道局は恐らくは受け入れてはくれないかもしれない。でも、手紙を書いてそれを確かめてみる分には何も差支^{つか}えなからう▽と、彼女は舗道を見つめて歩きながら自分自身に言い訳をした。

いつものナニらしくなく、うつむき加減にやってくる姿をカーテンを通して窓越しにみるとめた牧師は、戸口まで出て迎えてくれた。

「やあお早う、ナニ。元気ですか」

「お早うございます、先生。おかげさまで元気ですが、ちょっとご相談したくてまいりました」

「さあさあお入り、ナニ。あなたはあの記事を読みましたか？ 読まれるようにと、ひそかに祈っていたんですよ」

と、迎え入れながら牧師はやさしく言ってくれた。

「ありがとうございます、先生。そのことなのですが、わたくしあの記事を読んでからずいぶん考えてみました」

「なるほど、それで？」

「それでもし伝道局がいろいろ資格のことを要求するなら、例えば神学士や、宣教師の資格などとか。私にはそんな資格はありません。また健康についても、むづかしい規格に合っていないといけないのなら、先生、私は不適格かもしれません。そんなに頑丈な方ではないのです。そんなことを思うと、結局、残念ながら駄目かなと思われまして一時はもうあきらめていました」

「なるほど……」

「でも、私は教えることは好きですし、不便な外国の生活にも不平を言わずに充分耐えてゆけると思っています。それに、日本の娘たちに主のご愛を伝え知らせる仕事に自分を役立たせることが出来るなら、それは何よりの特権であり、喜びだと思っています。そんなことを思いますと、せめて自分の希望だけでも伝道局に伝えておきたいと思うようになります」

した。先生、手紙を書くだけなら差支えなかうと思うのですが、こんな考えだけでは不
充分でしょうか」

と、ナニは自分の心の中を牧師に打ち明けた。しばらく話し合った末に、ナニの決心が
意外に堅いことを知った牧師は、その場で推薦状を書いてくれた。しかしこのことについ
てはほかの誰れにも知らせないで置くことを二人は約束した。

だが、返事はなかなかこなかった。ナニが牧師館からの帰途、祈るような気持で手紙と推
薦状とをポストに入れてからもう二週間以上もたっていた。決定に日にかかるとも当
然のことだと、はじめは勝手な慰めをしていたナニと牧師は、ナシビルの伝道局本部から
の返事がいつまでたってもこないの、矢張り駄目だったのか、ほかに誰かが選ばれたの
にちがいないと、がっかりしながらも思いあきらめるほかなかった。

その夏、ナニは勉強のためシカゴに出かけ、それが終わると久々に故郷ケンタッキーを
訪ねる計画を立てた。フロリダでの、いやアメリカでの彼女の仕事、事実その夏で終わ
りになるなどとはその時は夢にも思っていなかったからである。

3 撮 理

広島では、その前年、明治十九年（一八八六年）十月二十五日の朝早く、砂本貞吉は己斐村の丘の上にある自宅でもより早く目をさました。床を出るとすぐ、窓を開けて空を見上げた。空はよく晴れて美しい朝であった。目の下には広島町が、まだ朝もやの中に、ねむっているように横たわっていた。右手の方には広島湾が、鏡のように静かに、朝の光の中にひろがっている。似島がその中にぼっかり浮かび、厳島の黒い島影も遠く絵のようにながめられた。それは子供の時から見た眺めであるのに、その朝の彼には、特別の景色のように感じられた。その日の午後、ドクタ・ランパスの父J・W・ランパス博士一行が宇品に到着することになっていたのである。

朝食をすますと、貞吉は落着いてその時の来るのが待ってられないほどそわそわして、時間の経つのがもどかしかった。

正午がくると昼食もそこそこにして、彼は宇品の港へと出迎えに出かけた。宇品へは前年の六月に、やっと大手町九丁目から千田町、御幸橋、御幸通りを経ての道路が出来たば

かりで、むろん電車はまだ走っていないかった。乗合馬車が広島から廿日市や、可部、海田などに通うようになったのも翌二十年のことであるから、人力車が当時は唯一の乗物であった。タイヤもまだ出来ていなかったのも車にはうすい鉄の輪がはめてあった。それを、まんじゅ笠に、腹掛けをし、手甲、脚絆に草鞋ばきの車夫が、半纏のすそを風にひるがえしながら威勢よくがらがらと引っ張って走るのであった。

鷹野橋まで歩いて出た貞吉は、そこから人力車を雇って、埃っぽい路を宇品へと急がせた。赤蜻蛉が飛びまわる道を汗をふきふきひた走りに走る車夫の、風をはらんでゆれる黒い法被の背中を見下ろしながら、貞吉は、その前の月、神戸で初めて会ったばかりの老ランバス博士の温顔を思い浮べた。愛する母にこの伝道者の声を直接聞かせたいものと願って、それから祈りつづけて来た貞吉であった。いま意外に早くその念願がかなえられようとして、間もなく博士の暖い手を再び握ることが出来るのかと思うと、胸がはずみ、一生懸命に走っている車夫の足ももどかしく思えるほどであった。

宇品の海岸通りの中ほどに船の待合所があった。船はまだはいってはず、到着が少し遅れるようだというので、貞吉は待つ間の所在なさに海岸へ出てみた。

はるか沖合には、秋の陽にきらきらと光る穏やかな波間に、似島が大きく浮んでいる。

「安芸富士」と言われているその美しい島山の姿をながめているうちに、貞吉はこの港から出て行った日のことが、まるで昨日のことにように思い出された。

砂本貞吉はまだ幼い頃に父に死別していた。そのためでもなかったのであろうが、彼は母思いの元気のよい少年であった。丘の上の家から、朝夕に広島湾を見おろしながら成長した貞吉は、いつの頃からか海の彼方へのあこがれを心に強く持つようになっていた。思い立つとじっとしておれない性格の彼は、ついに母を残して古里を出ることになった。苦勞の多い幾年月かの後に、とうとう彼の念願のかなえられる時が来た。北海道の函館からサンフランシスコに向って出帆する蒸気船ベンジャミン号 (the Benjamin) の乗組船員となることが出来たのである。それは明治十三年 (一八八〇年)、彼が十七才の時であった。その時の彼の目的はサンフランシスコからニューヨークに回り、そこからロンドンに出て航海術を学ぶことであった。アメリカへのその航海中、一寸したことから上級船員の一人と争い、逆上の末危く相手を殺そうとしたほど、彼は血氣盛んな若者であった。

サンフランシスコに無事上陸した貞吉は、しばらくこの港町に滞在している間に、ふと

したことから導かれて、オーティス・ギブソン (Otis Gibson) の開いていた伝道集会に出席するようになった。それは誠に不思議な神の導きであるといえる。なぜなら、貞吉がこの時ギブソンの集会に導かれたことが、その数年の後に広島に広島女学校が生まれ、メソヂスト教会が出来る一つの大きなきっかけとなったからである。

集会に出席しているうちに、血の気の多いこの若者の心は、いつしか主キリストにとらえられていった。その昔、ガリラヤ湖畔の熱血漢をとらえた主のみ言葉が、東洋から来たこの海の若者の心をもしっかりとつかんでしまったのである。

貞吉はついに信仰を告白し、ギブソンから洗礼を受けて主の僕となった。明治十四年（一八八一年）五月七日のことであった。

生まれかわったようになった貞吉の人生の目的は、百八十度の転換をした。万一、再び海への郷愁に伝道の決心がにぶるようなことがあってはならないと、船員免許状も焼き捨ててしまつて、あらゆる機会をとらえて彼は熱心にキリストの教えを学んだ。やがてある集会の席上「私には学問も富もありませんが、キリストが共にいて下さいます。キリストは私の心に、頭に、身体じゅうに宿っていて下さいます。私はそのキリストを述べ伝えな

ければなりません」と叫ぶほど熱心な主の証人になっていた。

新生の喜びを得た貞吉の心に浮んで離れない一つの面影は、広島にいる母のそれであった。人母とこの喜びを分か合いたい、この願いは貞吉の心から片時も離れない一つの悲願となった。

在米六年の後、貞吉は広島に帰って母や親戚の者に福音を知らせようと決心した。八日本にも誰れか宣教師が来ている筈である。是非その力もかりて広島に福音の種まきをした。い、そう願った貞吉は、メソヂスト監督教会のハリス監督 (Bishop W. L. Harris) から紹介状をもらって、明治十九年の九月、横浜に帰って来た。

マクレイ

母国の土を踏んだ貞吉はすぐに米国メソヂスト監督教会の宣教師ロバート・サムエル・マクレイ (Rev. Robert Samuel Maclay) を訪ねて広島来援を依頼した。しかし明治六年 (一八七三年) 横浜に上陸以来、主として関東地方をその伝道区として活躍していたマクレイは、当時東京英和学校 (後の青山学院) 創設後の要務もあり、多忙でとても広島まで西下する暇がなかった。そこで、丁度その頃神戸に到着したばかりの米国南メソヂスト教会宣教師ジェームス・ウィリアム・ランバス博士 (Dr. James William Lambuth) への紹

介状を書いてくれた。貞吉は大喜びで西下し、神戸にランバス博士を訪ねて熱心に事情を訴え、援助を頼んだのである。

ここで一寸ランバス博士らのことにふれて置かなければならない。

J・W・ランバス

J・W・ランバス博士は天保二年（一八三〇年）三月二日米国アラバマ州に於て牧師ジョン・ラッセル・ランバス（Rev. John Russell Lambuth）の子として生まれた。ミシシッピ大学で医学を修めたが、祖父ウィリアムの代から伝道者の血を受け継いでいた彼は二十四才の時、中国への医療宣教師になろうという召命を感じ、妻メリー・イサベラ（Mary Isabella）と共に帆船エリアル号（the Ariel）に身を託して中国上海に渡った。安政元年（一八五四年）のことである。

それ以来三十年余、多くの困難と危険をも冒して中国伝道に専念してきたのであった。先にナニがフランクリン女子大学在学中に、始めてその名前を知ったあのドクター・ランバスは実にその息子で、名前はウォルター・ラッセル・ランバス（Walter Russell Lambuth）と言った。彼らは一家をあげて中国伝道に励んでいたのである。

ランバス一家は明治十八年（一八八五年）にある事情のためにその中国伝道を辞して、

一まず母国に引き揚げようとしていたのであった。

丁度その頃、正確には明治十八年五月六日、南メソヂスト監督教会伝道局の第三九回年会に於て、記憶されなければならない一つの重要な決議がなされた。それはJ・C・キーナー監督 (Bishop J. C. Keener) によって提出された動議で、「日本に宣教部を設け、三千弗を用いて、その費用に当てよう」というのであった。

南メソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church, South) が日本宣教を最初に決議したのは、実はこの時より更に二十五年も前の万延元年で、ナニの生まれた年のことである。この時、J・T・サリバン (J. T. Sullivan) が日本派遣宣教師として、既に任命まで受けていたのであった。ところが、折り悪しく始まった南北戦争のために、止むなくこの壮挙は中止しなければならなかった。その間に、メソヂスト監督教会が日本宣教を開始し、明治六年 (一八七三年) 切支丹禁止令の解けた年、前述の R・S・マクレイを横浜に送り、主として関東地方に伝道を始めていたのである。

このように少しおくれて再度日本宣教に乗り出した南メソヂスト監督教会は、その開拓伝道を成功させるためにも当然経験ある有能な宣教師の派遣を必要としていた。ではどこ

にそのような有能な士が見出されたであらうか。こうした時に、ランバス博士一家がまさに母国へ引き揚げようとしていたのである。それは誠に不思議な神の摂理であった。

このような事情で、J・W・ランバス博士夫妻、その息、W・R・ランバス博士夫妻、並びに中国での彼らの同志O・A・デュークス博士 (Dr. Oscar A. Dukes) の五名が、明治十九年（一八八六年）四月二十日、監督マクテア (Bishop McTyeire) から日本派遣宣教師としての任命を受けたのである。この時、日本宣教部総理として任命を受けたのは、当時三十二才の若ランバスの方であった。老練な老ランバスを差し置いて、その息子にこの大任をゆだねることについては、当時の困難な開拓伝道の諸事情や、中国で苦難多い働きをして、引退してもよい年令となっていた老ランバスの年令、健康などにつき、マクテア監督らが慎重に考慮した上のことであった。「不平を言うすべを知らぬ」といわれていたランバス一家は、無論この決定にも何の異議なく従い、「全能の神の御手に頼り、新しい仕事に聖霊の導きと祝福とを祈り」つつ、使命の達成に励むことを心に誓ったのである。

若ランバスは、夫人の病気のため出発を少しおくらさなければならなかったので、老ラ

ンバス夫妻とデュークスは先発して、同年七月二十五日に神戸に上陸した。彼らは海岸で立ったまま日本における最初の夕食をとり、その夜は机をベッド代わりにして眠ったといわれている。「キリスト・イエスにある救の福音を述べ伝えるために、神が自分らをこの島国に召し給うたことをこの上なく喜んでいた」ので、この勇敢な開拓宣教師たちにとっては、それ位の不便は物の数ではなかったのである。

老ランバスらは神戸居留地四七番地（今の丸の内向い辺）に居を定めて、そこを本拠とするようになった。

若ランバスが病妻を北京に残して、一とまず单身横浜に到着したのは同年九月十三日であった。当時、丁度東京ではメソヂスト監督教会の年会が開かれていたので彼はそれに出席し、伝道区域の選定などについてマクレイらと協議した上、神戸に西下して先着の老ランバスらに加わった。

中国に向う途中日本に立寄った A・W・ウイルソン監督 (Bishop A. W. Wilson) 及びコリンズ・デニイ博士 (Dr. Collins Denny) を迎えて、九月十七日、ウイルソン監督司式の下に日本宣教部開始式が開かれ、若ランバスは正式に総理となった。

神戸を本拠として、大阪、京都、姫路、岡山、広島、岩国、防府、徳山、下関、大分、宇和島、松山、八幡浜、多度津、淡路など、瀬戸内海をめぐる各地に、南メソヂスト教会によって福音の種がまかれる切っ掛けが、このようにして始まったのである。

砂本貞吉が老ランバスを神戸に訪ねて、広島来援を熱望したのは丁度こうした宣教部発足直後の、誠にあわただしい時のことであつた。

新しい使命をおびて来日したばかりの老ランバスらは、日本人の信者で英語のわかるこの熱心な若者の来訪に驚喜した。へまきにこれはマケドニアン・コール（マケドニア人の招き）（使徒行伝一六・九）である／＼と思つた。しかし貞吉が希望するように、すぐに彼に同伴して広島に向うことは事情がゆるさなかつたので、後から必ず訪ねると約束して、一まず貞吉を広島に帰らせたのである。

砂本の帰広

久し振りに母や親戚のもとに帰つて来た貞吉には、家を出てからの数々の思い出話の種は尽きなかつた。が、彼はも早以前の彼ではなかつた。話の合間には自分の救われたあかしや、主イエスの話をするのを忘れなかつた。貞吉の話は母の八重らには最初よくわからなかつたし、仏教信者の彼らを少なからず戸惑わせたが、人が変わったように、す

っかりやさしく親切になっている貞吉の様子はひどく母を驚かせた。何か余ほど素晴らし
いことが貞吉の上に起ったにちがいない。その敬虔な朝夕の祈りの姿も、ひどく母の心を
打った。貞吉の信じている神はほんものに違いないと、彼らも感じないではいられなかつ
た。

広島に帰って半月ほどたった頃、貞吉は老ランバスに手紙を書いて、家族の者がキリス
ト教に関心を持ち始めたことを知らせた。その手紙を受け取ってから幾日もたたないの
に、今度は電報で「母は祈りつつあり、おいで待つ」との招きを受けた老ランバスは、こ
れ以上待たせるわけにはゆかないと感じた。そこで老ランバスはデュークスを伴い、十月
初旬の第一回四季会（メソヂスト教会の年四回の会議）の際洗礼を受けて日本宣教部の初穂と
なった鈴木愿太をも連れて、広島への不便な旅に出発した。

神戸から姫路までの鉄道を敷設するために山陽鉄道会社が設立されたのが、その年の十
二月のことであるから、西下するにも汽車はまだなかった。陸路の旅はかどらぬ上に疲
労が多く、費用も高くつくので、海路を、内海通いの船に頼ることにしたのである。

こうして、老ランバス博士の一行は三日目の夕方、ようやく宇品に着くことが出来た。

大喜びで一行を出迎えた貞吉は、三人を人力車に乗せて、足袋屋をしている弟の家に連れて行った。窓格子のはまった薄暗いその家の天井の低い二階座敷で、ランバス博士らは広島での最初の夜をすごした。当時、外国人を個人の家にとめることは厳しく禁じられていた。それを知らずに犯した貞吉は警察に呼び出されたが、翌日は必ず旅館に泊らせることを誓ったので、ようやく釈放されるという一幕もあった。

翌日は約束通り鳥屋町（今の大手町一、二丁目）の野口旅館に宿所が移され、そこが又集会の場所となった。数日滞在の後、一行が神戸へ帰ってゆく時には、貞吉の母八重、弟、叔父、従弟ら四人の求道者が出来ていた。

老ランバスの来援で励まされた貞吉は引き続き集会を開いて、母や親戚の者の救いのために祈りつづけた。彼は最初、翌年の春にはハワイに渡る計画を立てていたので、それ迄の間に出来れば彼らを導きたいと願ったのであった。老ランバスも折を見ては神戸から時々応援に来てくれた。集会を開くために西大工町（今の堺町二丁目榎町附近）に親戚の三戸蔵之助所有の一軒があいていたのを借り受け、畳を板の間に改造してしょうぎを並べた。貞

吉の集会にはさんび歌が唱われ聖書が読まれたのは無論のことであるが、話の中にはたびたび珍しい外国のことなども出てくるので、知り合いの若い娘たちも二人三人と加わってくるようになった。

貞吉の妻は、横浜の北メソヂスト聖書学校の出身で、英語の知識もあるところから、集会に来る娘たちを中心に、「ABC」の手ほどきをするクラスがつくられることになった。ところが彼女らには英語の知識より以上に必要なものがあつた。日本語の読み書きである。当時は既に小学校もあつたが、尋常科は四か年で終り、高等科へ進む女子は限られた少数にすぎなかつた。貞吉はこうした娘たちのために読み書きを教えると共に、聖書の教えを説き聞かせることの必要さを痛感した。そこで小さな教室が自然とささやかな塾じゅくになっていったのである。

その頃、細工町（今の大手町一丁目）の西蓮寺という寺の前に文武館といわれていた古い建物があつた。そこで以前は有志の若者たちに二階で法律を教え、階下では柔剣道を教えていたのであるが、丁度その建物があき家になっていたのを借り受けることになり、二階を教室とし、階下を集会所に当てた。それが最初の教室になった。

翌明治二十年（一八八七年）の春が来た時、老ランバス夫人も神戸からわざわざ出かけて来て、貞吉のこの教室の働きを援助した。貞吉は初めの予定を変更してハワイへ渡るところを延期し、専心広島での伝道とこの塾の働きに当ることになった。

五月八日、貞吉の母八重は老ランバスから洗礼を受けた。この時、三戸蔵之助、同とき、篠村幹一、松本益吉（後の関西学院副院長）ら合計十二名が洗礼を受けたが、式後、砂本貞吉、三戸久次を加えて十四名の者が広島美以教会を組織した。現在の広島流川教会がこうして発足したのである。

砂本の開いた教室では西洋人から英語が習え、西洋流の行儀作法も教えてもらえるというので、娘たちばかりでなく良家の夫人や官公史の夫人たちもこの教室に喜んで出入りするようになった。当時、東京では鹿鳴館ろくめいかんで舞踏会が開かれていた頃で、一般に西欧熱が盛んであり、出席する裁判官の若夫人らの中には流行の洋装でさっそうとやって来る人もあったが、大部分は桃割れの娘たちや丸まげや束髪の夫人たちであった。無論出席も不規則でまた自由なものであった。

一般の女子教育が男子のそれに比べて顧みられなかった当時の広島にも、女子教育の必

要を感じていた先覚者はいた。先にアメリカ留学から帰朝した組合教会派の沢山保羅は、政府が月給百五十円の高給で迎えようとしたのを断って、月給七円で大阪の浪花教会の牧師となった気骨ある人物であったが、彼が明治十一年（一八七八年）大阪に開いた梅花女学校の卒業生杉江タヅは、医師をしていた父の援助で明治十八年に市内薬研堀の自宅に小さな英語塾を開いていた。又木原秀三郎（適処）という人物が男子のために英語学校を運営していたが、少人数ながら女子部を石見屋町に持っていた。彼はキリスト教に興味を持ち、明治二十年の春、老ランバスが来広した時、彼を訪ね、自分の学校で聖書の話をしてくれるように依頼し、又場合によってはその女子部をはっきりとキリスト教主義のものにしてもよいとすら意志表示していた。

小さな私塾ではあったが、これら三つの教室は、この古い城下町にも女子教育の必要が痛感された結果生れたものであるといえる。だが、出席者がまだ極めて限られた小人数であり、又そこでキリスト教が説かれるために、仏教の盛んな広島ではまだまだ人気も無かったのは当然であろう。従って同じような目的のものを三つも別々に開いているよりも一つに合わせた方が賢明ではなからうかということになり、合同の相談がまとまった。アメ

リカで進んだ女子教育の実情を見聞して帰朝したばかりの砂本貞吉は、これらの三つの塾が合同した上は、出来れば女子のためのしっかりしたよいものになりたいと願った。老ランバスは伝道のため各地を訪ねる時は、その地の官民の有力者にも進んで面会してあいさつしていたので、当時の広島県知事千田貞暁とも面識を得ていた。そこで県学務課の好意ある指導を受ける便宜も得られて、女学校認可の運びとなった。かくしてその名も広島英和女学校と付けられ、砂本貞吉がその校主となったのである。

だが、女学校として新しく発足したこの学校を運営してゆくことは、熱血の伝道者砂本貞吉にも無理であったし、ランバス一家は神戸を本拠としての伝道に教育活動に多忙であった。そこで専心して、この生まれたばかりの女学校を育て、その経営に当る人物が必要となっていたのである。

ランバス一家は「燃ゆる伝導者たち」と言われていたが、同時に彼らはすぐれた教育者たちでもあった。老ランバスが中国に最初に着任した翌年には夫人は既に小さな学校を開き、八人の中国少女らと起居を共にして彼女らの教育に当たっている。夫人は神戸に宣教部が開かれた翌明治二十年の八月、住居が居留地四七番から居留地山二番（今の中山手六丁目）

に移ると共に、家庭を開放して若い婦人たちのために、英語、聖書、編物を教えはじめた。この家塾が後にランバス記念伝道女学校となり、それが更に発展して現在西宮市にある聖和女子大学に成長したのである。このようにランバス夫人もまた偉大な女子教育の先駆者であったと言わねばならない。ランバスらは日本に来た二か月後、即ち十一月二十七日には、神戸に「読書室」を聞き、青少年たちのための教育活動を始めた。これは若ランバスが夫人を伴って北京を引き揚げ、神戸に到着した二日後のことである。この日夕刻から開かれたその開所式には、砂本貞吉も出席し、集まった青少年に対して、「米国視察談」と題して一場の講話を述べている。

この「読書室」はミズリー州スプリングフィールドの牧師W・B・パルモア (Rev. W. B. Palmore) の興味を引き、彼からの書籍寄贈や運営資金の援助を受けて順調に発展し、翌二十年一月にはその名も「パルモア学院」(Palmore Institute) と称えられることになった。それ以来今日まで、代々宣教師たちによってその活動がつづけられ、数多くの勤労青少年や学生たちの知識と魂の古里として、神戸地方では最も有名な英語夜学校となった。若ランバスは更に明治二十二年(一八八九年)、神戸市外原田村(今の上筒井東)に一万

坪の広大な土地を購入し、そこに普通部と神学部を持つ男子学校を開いたが、それが今日の関西学院大学となっていることは余りにも有名な話である。

このようにランバス一家は福音伝道のかたわら教育のためにも尊い働きをしていたのであるが、神戸をあくまでその本拠にしていたので、自分らに代って砂本を助け、生まれたばかりの広島英和女学校を育てあげるために、これに専念出来る婦人宣教師を是非とも必要としたのであった。そこで日本宣教部の責任者として、若ランバスは母国の伝道局本部へ宣教師派遣の要請をしたのである。

二十七才のナニ・ビ・ゲーンズが、フロリダのリーズバークで見たクリスチャン・アドバケイトの記事はこのような事情の下に書かれたのであったが、こうしたことにも、やはり、神の不思議な御手が働いていたのであらう。

第二部 夏

1 出 発

ケンタッキー
での休暇

明治二十年（一八八七年）の八月も半ばのころであった。ナニはその夏シカゴで出席した夏季学校での勉強をすませて、リーズバークへ帰る途中を古里ケンタッキーに立ち寄った。少しも変っていない古里の自然や農場のたたずまいは、そこで過ごした少女の日の思い出を彼女の心によみがえらせてくれて、どこへ行ってもなつかしかった。久々に会う親戚も幼な友だちも、彼女の帰郷を殊の外喜び迎えてくれて、古里での休暇を心ゆくばかり楽しむことが出来た。

ある日、一マイルほど先に住んでいる知り合いの家を訪ねた時、結婚して近所の町に住んでいるその家の長女マアサも丁度子供を連れて実家に帰っていて、二人は互いに抱き合って再会を喜び合った。二人は子供のころから学校へ行くのも日曜学校へも、いつも一緒に仲良しであった。十八の秋に結婚して家庭を持ったマアサは、もう三人の子供の母親で、

物腰も落着いた主婦振りであつた。広い芝生の庭では子供たちがぎゅっぎゅっと賑かにかけ廻っていた。

「幸福そうね、マアサ」

とナニは幼な友だちの手をとつたままいった。

「ええありがとう、ナニ、とても幸福よ」

とマアサは子供たちの方に一寸目をやりながら答えた。

「息子のサムもおかげで学校でもよくやってくれるのよ」

「結構ね、で一番下の娘さんはいくつ？」

「二つ半よ、この子がまだ一寸手がかかるんだけど、でも姉娘のドラが割とよく面倒を見てくれるんで少しは助かるわ、夫のディックも子供好きで、家に帰るとよく遊んでくれるんで助かるのよ」

「なかなか子供を育てるのお上手ね。で御主人はご商売？」

「ええ、ディクソンの下町で小さな家具の店を開いているの、おかげで割と忙しいのよ。今も商用でルイビルへ出かけてるの。それで私一寸息ぬきに帰って来たのよ」

「まあよいわね、マアサ」

「ところでナニ、あなた立派になったわ、貫録もついて」

「貫録だなんて、マアサ、わたし相変らずよ、嫌な人」

ナニは改まったマアサの目で見られたことに面はゆさを感じた。

「でもナニ、あなた学校で教えてるんでしょ。今どこにいるの？　やはりフロリダなの」

「ええリーズバークなの。妹たちとも一緒に居るのよ。昨年からそのフロリダ・カンファレンス・カレッジで教えているのよ。楽しいわ。わたし、このごろ幼児教育に特別に興味を持つようになったのよ、亡くなった母の感化なのでしょうか。子供の教育って大切ね。貴女はお子さんがあるからきっと実感されてることでしょう。わたし、それでこの夏もその方面の勉強にシカゴでサマーコースを済ませて来たばかりなのよ。そうだ、マアサ、貴女明日でもわたしのところへ来ない？　娘さんたちの為めになる絵本など少し持ってるから差し上げましょう。貴女の参考になるリーフレットなどもあるかも知れないわ。と言っても貴女は育児のベテランでしょうけど」

「ベテランならよいんだけど、なかなかむつかしいものね。子供を育てるってこと。三人

目でやっと骨このようなものがわかりかけて来たような気がするわ、わたしって相変わらずのん気者よ。ほ、ほ、ほ、ほ」

とマアサは朗らかに笑ったが、急に真面目な顔になって、

「ときにナニ、あなた、ベティが亡くなったことご存知？」とたづねた。

「えっ？、ベティ？ ベティ・ピアソンが？ いいえ、いつなの、ちっとも知らなかったけど、あの人も結婚してたんじゃないの？」

「ええ、彼女、例のジョージと結婚してクレイでとても幸福に暮らしてたのよ。子供もわたしと同じ三人だったわ、その三人目の男の子を生んで、まだ産褥期じよくが充分過ぎないうちに、元気にまかせて畑仕事で働き回ったのが悪かったらしいのね。農家だから秋の仕事で忙がしかったのでしょうけど。つい無理したのね、かわいそうに。あの元気者だったでしょう。男まさりで、面白い人だったわ。」

「ええ、本当に悪気のない、あっさりした面白いよい人だったのに」

「元気にまかせてつい無理したのね、熱が続いてとうとう亡くなったのよ。一昨年のクリスマス前だったわ……」

「まあ、かわいそうにね。あんなに元気で、良い人だったのに……」

久し振りで会った二人には、一別以来の自分たちのこと、友だちのこと、教会のだけれのこと、町の様子、と話の種は尽きなかったが、やがてナニはマアサに別れを告げた。

帰りの道々、ナニは今別れて来たばかりのマアサのことを思うと、独りでにはほええまれた。三人の子供たちにかこまれて、時どき口やかましく叱ったり、ぐちをこぼしたりしながらも、いかにも幸福そうなこの友の様子を見てみると、一寸うらやましくさえ思えたほどである。それに引きかえ、ベティが死んだとは。なんというかわいそうなことであつただろう。子供を生んだ喜びも束の間、愛する夫や子供たちを残して死んでゆかねばならなかったとは、どれほどつらく悲しいことであつたろうか。それを思うと、人の良い元氣者だつたこの友が哀れでならなかった。八人の一生はわからないものだ。友だちの中でも一番元氣者だつたベティが一番早くこの世を去るなんて、Vと思うと氣持が沈んだ。

「人の歩みは主によって定められる

人はどうして自らその道を明らかにすることができようか」

ふと、箴言しんげんの中のそんな聖句が彼女の頭に浮んだ。

「自分の歩む道はどこへ通じているのであろうか？」と思うと軽い不安が心をよぎった。彼女は歩きながら口の中で主のみ名を唱えた。

迎えに来てくれた従兄の子供たちと途中で出会い、彼らの無邪気な笑顔を見た時、ナニはいつもの明るさを取りもどしていた。子供たちと手をつないだナニは、長いスカートのすそを優雅にひるがえしながら、彼らと歌を口ずさみつつ、まだ明るい夕暮の田舎道を帰って行くのであった。

そんなことがあってから間もなく、ナニもそろそろフロリダに帰る心づもりをしていたある日、とまっていた従兄の家に一通の手紙が配達された。それはリーズバークからナニ宛に回送されて来たものであった。

その封書を部屋へ持ってゆきながらナシビルとあるその消印を見た時、ナニははっとして一瞬身内が引きしまった。興奮を押えて大急ぎで手紙を開き、簡単ではあるが運命的なその内容を一気に読んだ。「……貴女を日本に派遣することに決定したことをお伝えします……」という箇所をもう一度読みかえた時、急に胸が高鳴った。感謝と献身と祈願との短い祈りが口をついて出た。それから彼女は身動きもせず、じっと椅子にすわった。小さ

な部屋の壁が消えて、まだ見ぬ遠い国の幻が夢の中のように浮んだ。それはほんのしばらくのことであつたが、その間は時のきざみも止まり、空間の隔たりもなくなったようであつた。次の瞬間、涙にうるむ目を静かにあげたナニの顔には、顎^{あご}があたり、唇が真一文字に引きしめられていた——主が示し給うた新しい道へ進みゆこうとする、ナニ・ビ・ゲーズのゆるぎない決意を示していたのである。

手にしたままの手紙がナニを現実にもどした。一とたび決意した上は、きわめて實際的に行動するのは彼女の性質であつた。従兄の夫人に事情を話して必要な相談をすると、あとは遠い異国への旅行に必要な最少限の買物と荷造りで、目のまわるような忙しさであつた。

それからかっきり四日の後、ナニは日本に向けサンフランシスコから出帆するために、アメリカ大陸横断の急行列車に身を託していた。

フロリダの小さな町リーズバークでは、ナニの弟妹をはじめ彼女を知る人たちの間に、狼^ろ狽^{ばい}と悲嘆と興奮と感嘆とが起つた。カンザスシティ (Kansas City) からレイチェル宛に

一通の手紙が届いたのである。それはナニからのもので、思いがけなくも彼女が日本に出かける途中であることを知らせていた。

「まあ！日本へだなんて。世界の果てへ、と言った方がましな位だわ」

とレイチエルはあきれつつ嘆いた。

「ああ、もう二度と姉さんには会えないでしょうよ、きっとだわ。それにしても、どうしても出かけなければならぬといっても、せめて、さよなら、ぐらい言いに戻ってもよさうなものなのに」と愚痴をこぼすのも無理もなかった。彼ら弟妹にしても、全く寝耳に水のことだったからである。

無論ナニも、そうした彼らの心の中を察することが出来なかったのでは決してなかった。しかし、「そんなことをすれば、私は気がくじけてしまったことでしょう」と後に彼女は手紙に書いている通りであった。妹たちは彼女にとってはかけがえのない、いとしい家族であつたし、母のいない今、どれ程彼らも自分を頼りにしてくれているかも、知りすぎていた。しかし、彼女は長く続いた軍人の家系の出であつたから、一たび任命を受けた以上、仮にも気のひるむようなことはしたくなかったのであろう。

大陸横断の急行列車は煙をはいて驀進し続けた。ニューメキシコ、アリゾナ、と進むにつれて、荒れ果てた砂漠が何時間走っても左右の車窓を去らなかった。先に、カンザステイでしばらく列車が止まった時、ナニはリーズバークの妹と牧師とに宛てて、気にかかつていた手紙を投函していた。そこからは、同じく東洋に向う宣教師の仲間も乗車したので、一人旅の寂しさからも救われ、気強くなった。

何時間もう一緒に乗り合わせていても、この物静かな若い婦人が、大きな使命のために東洋へ出かけて行くとうしている愛の使者であるということに気づく乗客はほとんどいなかった。それに、ナニはいつもの通りの質素な服装で、ひっそりと控え目にしていた。けれども、その若い心には、乗り合わせた周囲の見知らぬ人たちへも巧まない思いやりが暖く充ちていた。おかげで子供づれの母親たちはどれほど彼女と乗り合わせたことを有難く思ったことであろう。退屈な長旅にむづかる子供たちとも、ナニはすぐにわけ隔てなく仲良しになり、出しゃばりではないが、なにくれとなくよく気をつけて世話をしていたからである。ある寂しい駅に列車がとまった時のこと、そこにたまたまぼつんと一人立っていた黒人が、所在無さそうな目をひょいとナニの乗っていた車の方に向けた時、彼女が「昔風」

の南部流の挨拶をしてくれたのがうれしくて、その後何日もの間それを思い出すたびに彼は氣持が暖められ、ひとりでに唇がほころびるのであった。

列車には無論いろいろの人が乗っていた。流行の先端をゆくような装いのおしゃれ娘が、この宣教師婦人の帽子にちらと輕蔑の目を向けて、つんと澄まして通路を通りすぎてゆくこともあった。すると同乗のおとなしい内気な老婦人たちは、そんな旅慣れた当世風の姿に何か氣おされておずおずしてしまふのであったが、ナニは、出発のあわただしさについて新しい帽子も買いそびれていたことに氣付くだけで、平氣な顔をしていたので、その落着いた様子に老婦人たちもすっかり氣安さをおぼえ、彼女の前に乗り合わせた仕合わせを感じてほっとするのであった。

ひた走りに驀進する列車の振動に身をゆだね、車輪の響きをうつつに聞きながら乗客らがひとしくとうとする時があった。ナニも目をとじて、じっと物思いに沈んでいった。久々に帰ったケンタッキーの古里で、親戚や幼な友だちと楽しい語らいをしたのがつい一週間ばかり前のことだったが、と思うと、今こうしてカリフォルニアへと急ぐ汽車にゆられている自分がまるで夢のように思えた。マアサとおしゃべりをしたあの時は、すっかり日本

行きのことなどあきらめてしまっていたので、まさかこんな風に旅立とうとは夢にも思っていなかったのだ。マアサのところからの帰り、あの田舎道で頭に浮んだ箴言の聖句がいま再び思い出された。△人の歩みは主によって定められる……▽△そうだ、本当にその通りだ……▽とナニは思った。△それにしても一体、日本での仕事はどんなことなのであるうか。

学校を経営する仕事だということだが、言葉も分からぬ異国でそんな大仕事が自分に出来るのであるうか。誰か自分を助けてくれる人がいるのだろうか。日本の娘たちはどんな性質なのだろうか。そんなことも充分確かめないで、ただひたすらに奉仕の気持だけで名のり出たことは無謀ではなかったであろうか……▽などと思ってくると、自分の行動がひょっとして間違っていたのではなからうかとさえ不安に思えてくるのであった。妹たちに別れも告げずに出かけてしまったことも、仕方がなかったとはいえ、それを思うと心が痛んだ。

目を開けて窓の外を見ると、濃くなった夕闇の中に、広漠とした砂漠がまだ流れるようにひろがっていた。△すべては決定してしまったことではないか▽とナニは自分の心にいきかせた。今の自分は刻々とカリフォルニアに近づいているのだ。そこから先に横たわっている大海原。そしてその向うに彼女を待っている日本と、そこにいる異国の娘た

ち。ナニはW・R・ランバス夫人デイジイの手紙の一節を思い出した。それは夫人が実家の父C・D・ケリー博士に宛てたもので「皆さんは一体死んでしまったのですか？ 助け手を求めている私たちの声が聞こえないのですか？」という切実な叫びであったことを



ナニ・ビ・ゲーンズ
(日本へ出発当時 (27才))

ナニも聞かされていたのだ。

△そうだ、そのために私が
今急いでいるのではない
か▽とナニは自分に言い
きかせた。△手をすきにか
けてから、うしろを見る者
は、神の国にふさわしくな
いものだ▽主のみ言葉がナ

ニの弱気を叱りつけるように心に浮んだ。

△主よ、み業^{わざ}に励めますように、わたしにもっと強い心をお与え下さい▽

静かに目を閉じて短かく祈ったナニの唇は真一文字にひきしめられ、顎^{あご}がぐっとあがる

のであった。

便船を待つためにサンフランシスコで数日滞在した後、明治二十年（一八八七年）九月一日、ナニ・ビ・ゲーンズは蒸気船シテイ・オブ・ニューヨーク号（the City of New York）に乗って日本に向った。

当時、米国から日本に向う船はハワイには滅多に立ち寄らなかったのであるが、船の都合で途中ホノルルに寄港した。青い海、青い空。そこではそよ吹く風にも甘い花の香おかりがあった。幼い時に読んだ本で「クック船長の島」としてなじみ深かったこの「太平洋の樂園」でナニはその美しさを心ゆくまで楽しむことが出来た。

九月二十三日、三週間余りの太平洋の船旅も無事に終って、船は横浜に到着した。そこにはランバス博士からの電報が待っていて、彼女に心からの歓迎を述べ、又神戸で宣教部第一回の年会が開かれていることを知らせてくれた。船旅の疲れをいやす暇もなく、ナニは再び沿岸航路の小蒸気船に乗り換えて神戸に向った。

南メソヂスト教会の日本宣教部が開かれてから丁度一年がたっていた。この一年間、ランバス一家とデュークスとは東奔西走の働きをして、既に二十五名の回心者と二百名に近

い求道者とを得ていた。その年の暮れには成人だけで六十四名の信者数の報告が記録されているが、この数字は、ランバスが三十三年にもわたる困難な中国伝道の働きで得たものを上回るものであった。瀬戸内海沿岸の各地から、聖書研究に、説教にと、彼らの援助を願う出る声を引きもぎらなかつた。これらの要求にこたえるためにも何とか手を打たなければならなかつた。だから、その第一回年会には重要な議題が山積していた。額を集めて協議している最中に、本国からの援軍が到着するというニュースが入つたのだ。彼らは議事を一時中止して波止場へかけつけ、遠来の仲間を歓迎した。

ナニは同行の宣教師 C・B・モズリー (Rev. C. B. Moseley) 中国へ出かける W・B・バーク (Rev. W. B. Burke) と共に暖い歓迎をもって迎えられ、改めてこの年会で正式に広島への任命を受けた。そこが彼女の生涯を通じての任地になろうとは、この時はナニ自身も思つてもいないことであつた。

ナニ・ビ・ゲーンズは確かにすぐれたいくつかの特徴を持っていた。若々しい情熱、知識と獨創性、夢を実現するための不屈さ、勇気と決断などである。だがそれらに加えて宣教

師として欠くことの出来ない二つのもの——忍耐と信頼——を、もし欠いていたとすれば、せっかく海を渡ってやってきても、とても大きな仕事をやり遂げることは出来なかったことであろう。だがナニは幸いそれらを持っていたし、また神は、彼女が日本に到着すると早々に、その忍耐と信頼との訓練を更に彼女に与え給うた。

その訓練の第一歩は神戸から広島へ行く旅行許可証を得ることから始まった。

明治の始め、長崎、横浜、函館、新潟、大阪、兵庫、神戸など七つの開港都市が定められた時、外国人はこれらの土地につくられた居留地内に住み、その周囲十里以内であれば自由にどこへでも行くことが出来た。けれども、それ以外の所へは特別の許可をうけなければ出られなかった。だから極く初期のプロテスタント宣教師たちはせっかく日本へ来ても、自由にどこへでも行けるといふ訳ではなかったし、事実まだ攘夷思想にこり固まった侍たちに襲われる危険もあった。そこで、居留地内にとじこもっていなければならなかった彼らは、日本語を学び、辞書を編集し、聖書の翻訳に当り、キリスト教文書による活動をとおして日本人に働きかけたのであった。ローマ字で有名なヘボン (J. C. Hepburn)、聖書翻訳のブラウン (S. R. Brown)、大学南校の教頭となったフルベッキ (G. F. Verbeck) など

どは、こうしてわが国明治初期の文化に大きな貢献をした多くのプロテスタント宣教師たちの代表的人物である。

明治六年（一八七三年）切支丹禁止の高札がはずされ、文明開化の風潮がようやく日本国内にひろまるにつれて、新しい思想や文化に親しもうとする者が最も手軽に近づくことが出来たのは宣教師たちであった。宣教師たちは又、方方で塾を開いた。公立学校でも彼らを英語教師として活用した。医療の方面でも宣教師は指導的な貢献をしている。こうしたことから彼らは民衆との接触の道を開き、そこから少しずつ直接伝道への糸口をつかんで行ったのである。

ランバスらが神戸に宣教部を開いたころには、居住、旅行の制限も余ほどゆるめられてはいたが、それでも、三か月毎に居住特別許可証を受けなければならなかった。

ナニが神戸から広島へ出かける許可証を受けるのに、この時はどうしたわけか三週間もかかった。それは米国から日本へやってくるのにかかったのと同じほどの日数であった。ナニはこのことで、新しい任地での日本人相手の仕事には、何事も辛抱強く待つことがどれほど必要かを思い知らされたのである。

待ちに待っていた許可証がようやく来て、いよいよ出発することになった。まだうら若いナニをただ一人で、始めての任地への不便な旅に出すことを案じて、若ランバス夫妻と一緒に往いてくれることになった。これはナニにとってどれほど心丈夫で喜しいことであつたろうか。夫妻はデビッド (David) とメリー (Mary) の二人の子供をも連れてゆくことにした。それは滞在が長びくことを予想してのことであつた。

当時、まだ古い城下町の面影をとどめていた広島は、市内にも、はすのはえた濠^{はう}がよんだ水をたたえていた。太田川のデルタの上に出来ている市街は、川の最高水位より低いところが多く、水はけが悪いために泥のたまつたどぶ川が市の中心部にもあちこちにあつた。下水工事が充分でないので一寸雨が降ると水があふれ、夏にはひどい蚊やはいが発生した。上水道が出来たのは明治三十一年（一八九八年）のことであるから、そのころはまだ飲み水は必ず沸かさなければならなかつた。こんなわけで伝染病の流行は毎年のものであつた。市内を貫流する太田川の七つの流れは美しかったが、上流の村で伝染病が発生するとそれらは恐ろしい感染路となつた。前年の九月にはコレラが市内に流行したし、明治十二年にはコレラのために二百六十五名の死者が出たことがあつた。

春に広島に来てそうした事情を知っている老ランバス夫人は、二人の孫のことを案じて、神戸に残して置くようにとすすめた。だが若ランバス夫妻は、神のみ手にすべてをゆだねて、子供も連れてゆくことにした。日常のどんなことにも天父の導きを頼ってでなければ行動しない博士夫妻の態度には確信と安らかさがあった。それがナニの心に強い印象を与えた。

午後、神戸の波止場を出た沿岸航路の小蒸気船は、ナニとランバス博士夫妻とその二人の子供をも乗せて、和田岬みさきから舞子の沖を通り、明石海峡へと入っていった。

この船旅は、狭くて混雑した船室の不愉快さ、内海の景色の美しさ、そしてランバス家の人たちと共に旅の出来る喜びなどで、ナニにとっては忘れ難い航海となった。

一等船室、といっても立ったままでは歩けないほど天井の低い、狭い小部屋で、乗客は毛布をひろげて場所を占領しあうのであった。そんな小部屋に、船客たちは「箱詰めのいわしのようにぎっしり」と床に横たわっていた。一等がそんな状態なので、二等、三等の様子はどんなであろうか。ナニは想像するだけで身震いした。その狭い船室に腰をおろし

て目を閉じた時、自分にこれから与えられようとしている仕事の困難さを暗示するかのよう
に、暗い思いがナニの心を曇らせるのであった。

苦しい夜が明けた時、ナニはほっとして、空気のにごった息苦しい船室から逃れて甲板
に出てみた。そこには、彼女が生涯忘れられなかったほど美しい瀬戸内海の景色があっ
た。「まあきれいな！」と思わず叫んで、移りゆく瀬戸の景色に飽かずに見入った。一と月は
ど前に見た太平洋のあの荒々しさと比べて、これは又なんという平和でのどかな眺めであ
ろうか。ナニはランバス一家としばらく甲板に坐って、この美しい景色を楽しんだ。静か
な朝の海を渡ってくるさわやかな空気を胸いっぱい呼吸した時、前夜来の不快さもたちま
ちに消え去り、たとえどのように困難な仕事にでも当てるほどの勇気が身内にわきあがっ
てくるのを感じた。

ランバス家の人たちと一緒にいることもうれしかった。自然の美しさを敏感に感じ取
り、すべてが天父の恵みであることを深く感謝することの出来るこの人たちと共に、この
旅が出来る仕合わせを改めて思った。

十月十二日の午後おそく、船は無事に宇品に着いた。

さん橋もまだ出来ていないころのことなので、少し沖に停とまった船から、底の平たいはしけに乗り移って岸に上がった。そこには、砂本貞吉はじめ教会の二、三の人たちや、噂うわさを聞いて寄って来た人たちが待ち受けていたが、一行はたちまち人々の群れに取りかこまれてしまった。

人々はまず、メリーの金髪を見てびっくりした。

「見んさい、見んさい！金色の髪じゃ、たまげた！」

と彼らは口々にささやき合った。

次に人々がたまげたのはランバス夫人の帽子につけられた美しい鳥の羽毛の飾りであった。夫人は気前よくその帽子をぬいで、そばにいた一人に見せるために手渡した。それは、つぎつぎと人々の手に渡った後、好奇心を充分満足させられた群衆が人力車への道をあけてくれた時、ようやく無事に持ち主の手にかえった。

字品から広島市の内へと人力車を連ねて、途中も人々の好奇の目に見送られながらや々と着いたのは、松本屋と言う古い旅館であった。

玄関の板の間にはいつくばったあるじ夫婦や使用人たちが、口々に何やら述べて出迎え

てくれた。靴を脱いだ足にタタミが柔らかくひやりと感じられた。案内された二階の広間には教会の婦人たちが待っていて、ここでもていねいに、タタミに額をつけるようにしてあいさつされた。言葉はわからなくても表情や動作だけで、どれほど好意をもって迎えられているかがよくわかった。

夕食前に、すすめられるままにとった日本式の入浴は、ナニにとっては誠に印象深い、驚きと、戸惑いと、気持良さとの入りまじった初めての経験であった。

畳の上にすわることはナニには最もつらいことのひとつであった。長年広島に住むようになってからも、彼女はこの習慣にはなじめず、気楽に上手にすわることはとうとう出来なかったと、後で述べているが、その夜はじめて、ナニは、大きな座ぶとんの上にすわって、箸はしを使っての本式の日本料理を味わった。しばらくすると足がしびれてきてこまっていたが、器と料理の美しい色と形の取り合わせと、その味のよさには満足した。塗りの美しい吸い物椀の見事さにも驚いた。それは、食器というよりもむしろ部屋の飾りにしておきたいと思うほど美しかった。

旅館の内儀は、女中らを指図して何くれとなく気をくばってよく世話をしてくれた。に

ここにほえみながら、手真似や身振りで示す彼らの好意もうれしかった。

畳の上で眠ることも珍しい経験であったが、独りになって、清潔なフトンの上に腰をおろすと、ナニは、目まぐるしかった今日までの日々を思い返えさないではいられなかった。あわただしくケンタッキーを出てからのさまざまなが、一瞬のうちに心によみがえって消えていった。いま、ヒロシマに来て日本座敷のタタミの上の柔らかいフトンにすわっている自分を思うと、夢のようであった。ナニは神のみちびきと恵みとに感謝しないではいられなかった。彼女は胸に手をくんで、祈りに深く頭をたれた。

ナニはその夜熟睡した。

翌朝は雨であった。

庇^{ひさし}を打つその雨の音で目をさまし、板張りの黒い天井や紙のフスマが目についた時、
「あつ、ここはヒロシマなのだ」
／＼と思った。身仕たくをして廊下に出てみた。立木の茂った狭い庭の向うに、黒い瓦^{かわち}をのせた低い屋根の小さな家が重なるように立ちならんでいて、それらの上にしようしようとうと秋の雨が降っていた。

朝食をすませたところへ、学校から使いがやって来た。生徒たちが新しい先生のおいで

十月十三日
の朝

を待っている、というのである。ナニは身内がひきしまった。昨日からの珍しい経験の連続に、のん気に驚いてばかりはおられなかったのだ。自分の来るのを待ちかまえている自分の生徒たちがいたのである。だが、八なんと頼りない先生であらう……Vと彼女は思った。生徒たちの話す言葉もわからず、学力は無論、その習慣すらなにも一つ知らない自分であつた。それを思うと、ナニは緊張しないではおれなかった。

2 広島英和女学校

明治二十年（一八八七年）十月十三日のその雨の朝、広島細工町の古い建物の二階にある教室には、なんと三十人近い婦人たちが目白押しに集っていた。彼女らは話し声一つたずに、静かにナニらの来るのを待っていた。それが、砂本貞吉と老ランバス博士夫人とがそれ迄に集めていたこの地方での最初の私立女学校——広島英和女学校の生徒たちであつた。

初期の生徒

彼女らの大部分は県庁のお役人、軍人、勤め人など、主として勤めのためにほかの地方から一時この県庁の所在地に来ている比較的知識階級に属する人たちの夫人や令嬢たちで

あった。その中には、県の一等書記官夫人とその令妹と令嬢、判事や検事の夫人たち、控訴院長令嬢、陸軍主計長の二人の令嬢、芸備日報社長の令嬢などと、この地方の有識者の家庭の夫人令嬢が来て居り、土地の者たちも概して知識階層に属する者が多かったのである。

砂本がランバス夫妻とナニとを、誇らしげに一同に紹介した。

生徒の前に立つ経験は既に充分に持っていたナニである。彼女はにこやかに生徒たちにあいさつした。ところが何ということであろう。反応が少しもないのである。おしだまつたまま、うつむき加減にすわっている丸まげや束髪でキモノ姿のこの日本婦人の生徒たちを前にしては、彼女はすっかり調子がちがって少なからず面くらってしまった。

老ランバス夫人がその年の春から広島に滞在して、短い期間ではあったがこの教室で教えていた間、夫人は西欧文明の最も良い面を代表する者として生徒たちの前に立っていたのである。夫人は実際、生徒であるこれら知識階級の夫人たちが、ヤソ教を信じるアメリカ婦人の婦徳がどのようなものであるかを知る、唯一の「基準」となっていたのである。ナニは今、老ランバス夫人に代わって、その立場を引きつぐことになった。

自分をたえずそのような目で見ながら、自分の生徒となろうとしているこのおし啞のような

婦人たちを導いていかねばならぬことを思うと、ナニは責任の重さと仕事のむつかしさを今更のように感じた。

生徒たちとの初対面は、双方の緊張と当惑とのひと時のうちにどうやら済んで、さっそうと翌日から、教師としてのナニの忙しい生活が始まった。

しばらくの間は、毎日見聞きすることのほとんどが珍しく、時には異様にさえ思える経験にもぶつかるのであった。風俗習慣のまる切り違った環境の中で、おしに話をさせようとするような単調でしかも根気のいる教室での仕事、それからのナニの勤めとなったのである。

午後は日本語の勉強に当て、夜は又男の生徒に英語を教えた。日曜日や祈禱会ろうかいの夕には礼拝や集会に必ず出席したが、何が語られ何が祈られているのかさっぱりわからなかった。当分はそうしたことの繰り返しで、「理想的な宣教師生活」からははるかに遠い毎日であった。

言葉の障害や考えのくい違いから、教室で教えることにも最初は少なからぬ苦勞があった。お互いに意志を通じさせることだけで、神経がひどく疲れた。けれどもそのうちに、

少しずつ生徒たちとの間に心の通いが出来て来た。一とたび心の交流が生まれると不思議なもので、言葉の不便も前ほどにはさまたげにならなくなる。むしろ教室で教えている時が、ナニにとって一番楽しい一ときとなった。

生徒たちと接している間にナニが気付いて内心驚いたことは、彼女らが誠に親切でやさしく、しとやかなうえにいていいで、又礼儀正しいことであつた。服装も清潔で立派であつた。生徒たちがおもによい家庭の夫人や令嬢たちであつたから、これは当然のことであつたともいえるが、日本婦人の持っているこうしたいくつかの優れた面が広島来任の最初から、生徒たちとの接触によってナニの心に素直に印象づけられたことは、仕合わせなことであつたといわなければならぬであらう。

はじめのころは、授業といつても整つたカリキュラムが出来ていたわけではなかつた。英語の初歩と聖書の講義が主で、それに読み方書き方算術編み物や洋裁などが適時に教えられていた。役人の夫人たちは大部分が英語だけを習ひに来ていて、それも出欠常ならぬ状態であつた。

教師としては前述の杉江タヅが私塾時代からの関係で引き続き教えに来ていたが、キリ

スト教にも理解深く、学識もあって立派な教師であつた。木原秀三郎も砂本やランバスを側面からよく援助してくれた。そのほかの教師としては、漢文に神部壬四郎と藤井某。算術は信者の医学生片岡正士が教えていた。そのほか書記兼小使として田中条蔵がいた。杉江の月給は十五円で最高であつたが、田中は一円五十銭であつた。無論、無給の奉仕者も砂本の外にもいた。

当時の教師の中に風変わりな人物が二人混じつていた。一人はいつもよれよれの袴はかまをはいた漢籍担当の藤井某で、月給三円也を受け取ると、きまつて幾日か欠勤した。飲んでしまふのに忙しかつたのである。金がなくなると又ふらりと学校へ出勤するのであつた。そこで一策が考え出されて、出勤の認印によって会計三戸蔵之助からは出勤毎に金十錢也が支給されることになったが、無論長続きのする勤め振りではなかつた。もう一人は裁縫を教えていたある女教師で、彼女は昼間はミッシヨンスクールに勤め、夜は料理屋勤めをしていることがわかつて、これ又学校を去らねばならなかつた。

砂本は校主になつていたが、ナニが来てからは学校のことは彼女にほとんどまかせ切りで、自分はむしろ伝道のためにランバスと共に、山口、宇和島、大分などと忙しくかけ

まわるようになった。

若ランバス夫妻は二か年間広島に滞在してナニを助け、学校の育成に協力したが、この間、夫妻はナニに対しても生徒たちにも大きな感化を与えたようである。

ずっと後、若ランバスが監督となつてから、大正十年（一九二一年）九月二十六日に、横浜の病院で永眠したあとで、その娘、メリー・ランバスにゲーンズ校長が書き送った手紙にゲーンズは次のように述べている。

「あなたの御両親は、主イエスに従う者がどのようなでなければならぬかという誠によいお手本を示して下さい。私がくりかえし申し上げても、どうか煩わしいなどと思わないで下さい。あのように立派な方は本当にめったにおられるものではありません。

少くとも私はほかにあのような方を存じません。私が一緒に住んでいたあの初めのころ私のいろいろなあやまちをどれほど親切に見すごしにして下さったことでしょうか。私はあのころの御家庭での毎日の生活を文章にしてそれを刷り物にまとめたいと思ったこともあるほどでした。とても美しい毎日でしたので、どなたにもそれを知らせて喜んでいただきたいと思ったからです。でも、実際自分で拝見したままをほかの人たちにも見せるように上手に文章にすることは

私の筆の力ではとても出来ないと感じました」

当時又、若ランバス博士夫人デイジイが病氣勝ちの健康にもかかわらず、よく生徒を指導したことに、次のようなことを校長は述べている。

「あまり遠い以前のことではありませんが、広島に転じて来たばかりのある判事夫人を訪問してくれるようにと、わたくしは依頼を受けました。わたくしどもがお互いを認め合った時、面倒な日本流のあいさつはそっちのけになりました。夫人はとたんに、お互いが身振りでしか話し合えなかったあの昔のころの生徒の一人にかえていました。彼女は英語どころか学校で習ったことはほとんど忘れてしまっていました。当時の学校でのなつかしい交わりだけは忘れていませんでした。夫人は当時の友だちの誰れかれ、特に若ランバス夫人のことをなつかしように語りました。西洋流のお裁縫のほか生徒に望まれることで、自分に出来ることはどんなことでも親切に教えようとして下さったことなどを語りつけました。「精神的なことについてのお話や、自分がそれについて考えたことなどは忘れることは出来ません、おかげで現在わたくしはクリスチャンです」と彼女は語るのでした」

実際、ナニはランバス家の人たちから、老ランバス夫妻のみならず若ランバス夫妻やそ



W. R. ランバス博士



砂 本 貞 吉



ディジィ・ランバス

の二人の子供からすらも、深い感化を受けたようである。「どのような場所でも、主キリストから遣わされた者として立派に振舞うことについて私の心が開かれたのもこの人たちのおかげです」と述べ「もしあのころ、この方々と知り合っていなかったとすれば、私の生涯はどのようなものになっていたかわかりません」とすらナニはのちに述懐しているほどである。

ナニが広島に来た翌明治二十一年（一八八八年）の暮、上流川町（今の上幟町）の現在の校地の近くに二階建てのかなり大きい家が見つかり、ナニはそこに移った。学校もそこで開き、生徒との個人的な交わりをも一層深めることが出来るようになった。

こうしてナニは広島の生活にもなじみ、学校を支えてゆくことになった。

当分は万事順調に進んでいるかに思われた。生徒の中にも少人数ではあったが教会や日曜学校に出席しはじめる者も出ていた。洗礼を受けたいと志願する者も一名だけではあったが、申し出ていた。

だが、広島全体がこのミッションスクールの誕生を両手をひろげて歓迎していたわけは決してなかった。それどころか、最初からはげしい反対もあったのである。

「安芸門徒」の名があるとおり、広島は元来仏教の盛んな土地である。貧しうに見える田舎のわら屋にも、立派な仏壇が金ばくを光らせているような真宗の根城である。はじめ、砂本が英和女学校を開いた時、人びとは女子のための学校が出来たことを喜んだようである。だがそれが「ヤソ教の学校」であることがわかると、その存在は「こんなあ、困

ったもんでがんすのう」ということになったのである。

広島で名の聞こえた弁護士の一人に山中正雄という人物がいた。彼は女子の教育にも関心を持ち、自宅に数名の生徒を泊まらせて英和女学校へ通わせるほどであった。ところがしばらくして、学校がキリスト教主義だということを知ると、ある日砂本のところへ訪ねて来て、学校でヤソ教を説くことをやめてくれ、と申し入れた。

「砂本さん、あんたが女学校をつくってつかあさったんで、わしらは、こりゃ、はあ、ありがたいこっちゃ言うて、えっと喜んどったんでがんすかのう」

と、広島弁丸出しで切り出した。

「はいじゃが、あんた方じゃ、ヤソの教えを生徒に説いて聞かせなさるちゆうことを聞いたんじゃが、ほんまでがんすか？」

「そんなおりですよ、山中さん。わたしほうじゃバイブルの教えに立たにあ、本当の人格教育は出来ん思うとります」

と、砂本もお国言葉で応じた。

「そら困ったことになりましたのう。せいじゃまるで、砂糖店が出来た思うて喜んでたら、それが塩店じゃった、言うんと変りまへんてのう」

「なんのこつてしゃ、そりゃ一体？」

「ははは、まあよがすて、じゃがのう砂本さん。冗談はよして、どうでひょうかの、物は相談じゃが、そのヤソの教えはやめて貰えまへんかの。そおすりゃ、市の有力者たちもみな後援するが、言うとりんでがんすがのう。一つ考えてみてつかあさいや」

と、運営資金が豊かでなさそうなのにつけ込んで、懐柔にかろうとするのであった。つけ込まれるのも当然で、理想は高かったが経営は最初から切り詰めたものであった。

実のところ、市の有力者たちの後援はのどから手が出るほどほしいような有様であったのだ。しかしそのために学校の生命である主義を変えることなどは思いもよらないことである。砂本は、甘く見て馬鹿にしている、と腹立たしくは思ったが、昔の彼ではない。言葉を和らげて、

「お気持は誠にありがとうがんすが、山中さん、「汝らは地の塩なり」いうことばがバイブルにもあるとおりでしてのお。こればかりは、はいそおですかと、あっさり承知する

わけにやゆきまへんて。バイブルはこの学校の生命ですけんのう。まあ悪う思わんといつてつかあさい」

と、その場できっぱりとこの申し出を断ったのである。

聖句を引あいに出されての拒絶に山中は煙にまかれ、そのまま帰って行つたが、この時の彼の言葉は当時の広島の一部の人たちの思いを率直に代弁していたと言える。山中が自宅から通わせていた生徒たちは無論来なくなった。

山中はとうとう千田県知事夫人を後援者にかつぎ出して、間もなく天神町のある寺院の中に女学校を開いた。それは明らかに英和女学校に対抗したもので、国粹主義の教育を看板にして仏教徒たちの支持を受けた。これは後に私立山中女学校となつて、ナニの在職中ずっとライバルとしての存在を続けることになった。

明治十八年から二十年頃にかけての誠に盛んな欧化主義の風潮も、鹿鳴館に於ける行き過ぎた仮装舞踏会で世人の批判を浴びたところを契機とするかのように、それは次第に下火となつてゆき、代わつて反動的な国粹主義の風潮が盛んになつて來た。こうしたことも原因してか、せっかく芽を出しかけた女子教育に対しても、極端な無用論さえ飛び出すほど

の、當時は不安定な世相であった。

一方、仏教界は明治初期に行なわれた神仏分離政策後全般的に振わなかったのだが、護法の一手段として、キリスト教を昔ながらの「邪教」ときめつけ、民衆を扇動して反対の火の手をあげる有様であった。

こうした国内の一般的世情に加えて、学校ではいくつかの困った内部的な事情が重なり、事態は一層深刻なものになったのである。

その第一は砂本貞吉が伝道のためにハワイに渡ることになったので、信頼出来る日本人の管理者を失ったことであり、第二は教師が得られなくなったことである。頼りにしていた杉江タツは間もなく、はるかによい地位と待遇が約束された県師範学校へ引き抜かれて行ってしまった。そのほかの教師も、何かの支障でやめてしまうと、後任がなかなか得られないのであった。仏教の町広島に、まま子のような存在のミッションスクールであってみれば、よほどの篤志家か物好きででもなければ教師になり手がなかったのも当然なことであつたのであろう。

あれやこれやの事情が重なって、明治二十二年（一八八九年）四月一日から、広島英和

女学校は、とうとうその門を閉ざしたままになってしまったのである。

失意のうちに、ナニは、若ランバス夫妻と共に神戸に引き揚げる外なかった。

ほかの在日宣教師たちからは無論同情や忠告が寄せられたが、何の力にもならなかった。中には、日本におけるキリスト教女学校の時代は過ぎたのだ、といって忠告してくれる者もあった。日本人に必要ともされず、有難くも思われない女学校の仕事に、貴重な人材や金銭をこれ以上注ぐ必要がどうしてあるのか、そんなお金があるならば、伝道の方面にまわすか、もっと必要が感じられている外国へ送る方がはるかに賢明なことである、とすら主張する者もあった。

神戸まで引き揚げて居留地山二番のランバス家に入ったナニは、失意と、当惑と、今後の方針決定との、むつかしい試練に直面することになったのである。

ナニが日本に来てから早や一年半がたっていた。だがその間は、まだなんといっても、すべてが目新しく、物珍しさに心をうばわれてすごすことが多かった。学校での仕事も、それまでに砂本らが準備して置いてくれたことを忠実に引きつぐことばかりに忙しくて、全体的な情勢判断をしたり評価をしたりする暇もなく、又しいてその必要もなかったので

ある。その間にいつの間にか前述のような渦のなかに巻き込まれてしまっていたのだ。今、やむを得ず、毎日のあわただしさから解放された時、ナニは広島で今日まで夢中で過ごして来た日日のことなどを静かに顧みるのであった。

あんなに一生懸命教室で教えて来たことも、今となっては裏切られたような気もした。せつかく生徒たちとも心の交わりが出来るようになりかかっていたのと思うとたまらなくくやしく悲しかった。日本の女性のために主の福音を証^{あかし}したいと、あれほど気負い込んできていたのに、彼女らの魂の救いのためにほとんど何も出来なかったことが、たまらなく悔いられてつらかった。

このまま敗者としてアメリカに帰ることがどうして出来よう。といってこれからどうすればよいのであろうか――。

ナニは眠られぬ幾夜かを苦しんだ。

「主よ、わが歩むべき道を教えてください。」

わが魂はあなたを仰ぎ望みます。」

詩篇一四三篇の聖句が、そのままにナニの心からの祈りとなった――。

しかし、賢明なナニは徒らに嘆いてばかりいたのではない。ゆっくりと時間をかけて、彼女はいろいろと反省し、又考えたのである。

今までには、日本人の習慣や考え方に対して理解の及ばなかったことも確かにあった。自分の思い違いから起こった失敗にも気付くことが出来た。そうしたにがい思い出のいくつかよりも、更にはっきりと自分の心に印象付けられているものがあることにも、ナニは気付いた。

それは日本婦人の持っているやさしさ、つつましき、しとやかさであり、没我的な親切さと、国家に対する強い忠誠の念などであった。それらは、ナニが広島に来て以来接した多くの女性たちから受けた一般的な印象であった。

最初二か月ほど住んでいたあの松本屋旅館の内儀や女中たち、それに時々下の座敷に呼ばれて来て、三味線や太鼓で賑やかに騒いでいたあの哀れな芸者たちのなかにすら、ナニが気付いて驚いたすぐれた特性であった。実際、こだわりのないナニは、松本屋でしばらく暮らしているうちに、ふとしたことから芸者たちとも顔なじみになり、彼女らと仲良しにすらなったのだ。単純で教養のない彼女らの心には、ナニの親切な気持ちがあるまま素直

に反映して、彼女らもあけすけに自分たちの心をさらけ出してナニに接したのだ。壁のうに白粉をぬり、美々しく着飾った彼女らが、どんなに哀れな身の上の者が多いかを、ナニはその時はじめて知ったのである。いよいよ旅館を出て学校の住いに移る時には、あるじ夫婦や女中たちと別れるのが、まるで家族に別れるようにナニにはつらかった。それほど彼らに情がうつっていた。

教室で接した多くの夫人や娘たちからはまた、女中や芸者たちの持たない上品で奥床しいいくつかの美しい好印象が、ナニの心にくつきりときざみ込まれていたのであった。

こうしたすぐれた特性を持っている日本婦人を教育によって変えてしまおうとしたのであろうか、と反省した時、ナニは、はっと目がさめる思いがした。

／＼このような徳性は無論そのままに延ばしてゆくべきであり、その上に更に、彼女らに欠けている見解の狭さをこそ高め広めてゆく手助けをすべきではなかったろうか。それが出来る時、彼女らはきつと素晴らしい才能を示すようになるであらう。日本人の持っている長いすぐれた伝統の遺産を尊重して、その上に、彼女らの中にまだ眠っている可能性を呼びさましてやるのが、自分のつとめではなかったか。キリスト教的な高い理想も無論教え

示さなければならぬ。だが一とたび示した上は、それを生かしてゆくことは彼女らにまかすべきではなからうか……。V

山二番のランバス家で、自分に与えられている小部屋に独りすわっている時、あるいは、諏訪山公園へ午後の散歩の往き帰りにも、ナニの心からは、広島に残こして来たままの学校のことや娘たちのことがひとときも去らなかつた。

ゲーンズ校長は後に、自分がした仕事は、最初砂本やランバス父子によって引かれた線の上を唯忠実に走ったに過ぎないのだ、と、幾度も繰り返えし言ったものである。最初の時期には確かにその通りの時もあつたであらう。だが、彼女が失意の心を抱いて神戸まで引き揚げた時を境に、その「見習いの時期」は終つたと見るべきであらう。それ以後の学校の歩みは、校長ナニ・ビ・ゲーンズ自身の意志と幻とによつたものであり、それは彼女自身の手で運営された新しい姿の学校であつた、と言わなければならないであらう。

神戸に帰つた若ランバスは、そこを教育活動の中心とすることに計画をたて、関西学院創設の準備を着々と進めていた。彼は中国宣教師時代にかちとつた厚い信用のおかげで、上海香港銀行から無担保で融資を受け、神戸市外原田村に一万坪の校地を購入した。それは

当時の神戸市民たちが目を丸くして驚きあきれたほど無謀な計画のように思われていた。だが、それから四十年後にはその校地すら狭くなり、現在の西宮市上ヶ原に移転するほど関西学院は発展することになったのである。

ともあれ、ナニは、今後もし広島での仕事を続けるならば、それは若ランバスの直接の援助なしでしなければならないことを自分に言いきかせた。事実、若ランバス夫妻は関西学院創立後まもなく、家族の健康上の理由もあって本国に帰り、つづいて彼は母教会伝道局主事の要職につくことになったのであった。

だが、ランバスの直接の援助は得られなくても、新しい味方が無いのではなかった。広島には既に教会が出来ていたので、宣教部は広島巡回区主任教師としてB・W・ウォーターズ夫妻 (Rev. B. W. Waters) を任命していたし、近く又一人、婦人宣教師が広島に送られることになっていたのである。

失意と、反省と、熟考と、祈りとのうちに五月、六月、七月はいつしか過ぎて、八月の蒸し暑い明け暮れにも、ナニは学校の問題と取り組みつづけた。

九月に入り、ようやく朝夕の風も肌にここちよくなり、夜空の星も輝きを増すように思

われたところ、午後の散歩に諏訪山公園路を行くナニのあごはぐっと上がっていた。再び広島に帰って、「日本女性のための女学校」を再開しなければならない、と、彼女の心は強い決心で定まっていたのである。

その月開かれた宣教部年会でナニに与えられた任命は、引き続き、「広島」であった。

明治二十二年（一八八九年）九月、ナニは強い決意をもって広島に帰った。

十月一日、初代校長ナニ・ビ・ゲーンズが再び学校の門を開いた時、広島英和女学校は生まれかわった新しい学校であった。といって、表面上にはその変化は見られなかった。以前と同じ古い建物、同じ顔ぶれの寄せ集めの教師陣、そしてうんと数が減ってしまった生徒たち——しかしゲーンズ校長の胸には新しい幻と計画が秘められていたのである。

こうして再開された広島英和女学校には、外見上にもはっきりした進歩と恒久性を裏付けるものが何か必要であった。一度失った市民たちの信用を取りもどすためにも、それは必要なことであった。

幸い若ランバスは、信仰と先見の明とをもって、先に関西学院の校地を購入したと同じ

大胆さで「将来の学校のために」上流川町に校地を買ってくれていた。△ここにどうしても新しい校舎を建てなければならぬ、それも一日も早く▽とナニは考えた。そこで伝道局本部へ出した要請に対する回答を待ち切れないで、ナニは積極的に資金集めにとりかかった。無論彼女はまっ先に自分の俸給をささげた。ほかの宣教師たちもナニの熱意に動かされたし、母国の友人たちも冷淡ではなかった。

市内の反対者たちは「ミッシェン学校」のこのような動きを哀れみの薄ら笑いをうかべて見ていたが、ある日、一人の僧がゲーンズ校長を訪ねて来た。一度閉ざした学校を再開する愚かさを述べて、「きつと又門をしめねばなりませんぞ」といや味を言うとそのまま帰って行った。そのうちに日が経って、十月もすぎようとしていた。だが新しい校舎建築の影すら見られなかった。するとこの僧は、それ見たことかとうそぶいた。

「それ見んさい、わしが言うたとおりでひょうがの」

これを聞いたゲーンズ校長のあごは、いつもより五センチも高く、ぐつとあがった。二、三日もたたぬうちに建築命令が出された。資金が足る足らぬは、今は問題ではなかったのである。

メリー・バイ
ス

ロウラ・ス
トライダー

新校舎竣工

明治二十三年（一八九〇年）一月下旬、カリフォルニア出身のメリー・バイス（Miss Mary Bice）が神戸に到着、直ちにナニを助けるために広島に来た。続いてバジニア出身のロウラ・ストライダー（Miss Laura Strider）も着任した。

新校舎は翌年七月に竣工した。市民は目を見張って驚き、その驚きは尊敬に変わっていった。秋の学期にはきつと入学者も多く得られる、と期待したナニは、胸を張って宣教師会から帰広した。いよいよ開校の日が来た。だが、新入生は僅かに七名に過ぎなかった。何かが欠けているのだ。信頼出来る日本人教師が居ないことが問題であった。だが幸に若ランバスの世話でよい人物が得られた。

尾藤徳義

尾藤徳義は名古屋師範出身で立派な資格を持っていたが、信仰の故に公立学校を追われたクリスチャンであった。学校経営の実際にも通じ、その判断も正しかった。学校の歩みを確立するには文部省が示す教育課程を取り入れなければならないと彼は確信した。人を信頼してその才能を充分働かせるようにしむけることはゲーンズ校長の優れた一面である。尾藤の進言が入れられ、課程が改善された時、これは父兄たちからも大きな支持を受けた。その年の暮れまでには十名の正科生と、約五十名の特別科生が在籍するようになったが、

これは前年の三倍に近い数であった。

新生した学校でゲーンズ校長が始めた特記すべき学科は音楽であった。音楽は確かに、彼女が広島教育界に紹介した多くのすぐれたもののうちの一つであるといえる。今日、広島音楽界の水準はかなり高いと言われているが、当時の有様の一端は次の笑い話によってもうかがえるであろう。

ある日、一人の紳士が学校へ古いバイオリンを持参した。それが西洋の楽器であることを彼は聞き及んでいたのであるが、どうして鳴らすのかはだれも知らなかったのだ。そこでゲーンズ校長に鳴らし方を教えてもらいたいというのである。鳴らないのも道理、そのバイオリンは弦が全部無くなっていた。

バイオリンにまつわる話をもう一つここで述べておこう。それはずつと後のことであるが、一人の若い白系ロシア軍の将校が革命のため過激派の手からのがれて、男装した妻と共に日本に亡命して来た。彼は音楽を愛し、幼い時からバイオリンを習いおぼえていた。逃亡の際の僅かな持物の中にも愛用のバイオリンは忘れなかった。苦労を重ねた亡命の旅の末、二人は広島にたどりつき、場末の粗末な住いに落着くことになった。売り食いの幾日

かの後にはバイオリンだけが彼らの手元に残った。そのバイオリンをも、とうとう手離さねばならぬ時が来た。暗い胸にそれを抱いて、彼は質屋へと重い足を向けたのである。丁度新天地のある活動写真館（映画館）の前を通っている時、彼の小脇にかかえている黒いケースに目ざとく目を止めたのはその館主であった。彼は道路上でそのうらぶれたロシア人を呼びとめて、「お前さん、これが弾けるのか」と尋ねた。若者の演奏は素晴らしかった。館主は自分の見つけたものに大喜びして、その晩から彼を雇い入れた。こうして、そのロシア人は、「芸が身を助ける」ことになったのである。

セラ・ショウ

セルゲイ・
パルチコフ

困っている人を見つけて助け出すことに積極的なゲーンズ校長は、彼のことを当時の宣教師の一人、セラ・ショウ（Miss Sarah Shaw）（後G・セス・トーマス・ギリ）から聞くと、時期を見て彼を学校のバイオリン講師に採用した。ゲーンズ校長の恩情に感激したセルゲイ・パルチコフ（Sergei Palchikoff）は一層練習に励み、生徒たちのよいバイオリン教師となった。彼は生徒だけの弦楽器のみによる楽団を組織し、秋の運動会やクリスマスには無くてはならぬ名物の楽団に育て上げた。クリスマスのハレルヤコーラスの指揮も素晴らしかったし、年一回は必ず開かれていた音楽教師たちの演奏会でも、元白系

ロシア軍將校としての堂々たる体格ときびきびした動作に加えて、その巧みな演奏が聴衆を魅了したものである。

「ナニ自身は音楽は不得手であったが、例の先見の明によって、ピアノを広島に紹介したのも彼女であった。それも如何にもナニらしく、その購入には自分の渡航仕度金を当てていたのである。このピアノが船で宇品に到着した時、それを荷揚げするのひと騒動があった。一体何が入っているのか、横文字入りの大きな木箱のこのとてつもなく重いしろ物は、力自慢の沖仲仕たちにとっても一寸手に余った。やっさもっさと大騒ぎした末、このでっかい荷物は結局、海の底から水びたしで引き上げられる破目に立ち至ったのであった。宇品の海から引き上げられたこのピアノは幸にウォーターズ夫人の手によって美しいメロディを奏でられた。ミスタ・ウォーターズは声楽の指導に当ることになり、広島英和女学校の音楽部は花々しくデビューした。市民はえりを正してすわりなおし、目を丸くし、耳をそばだててその演奏に聴き入ったのである。音楽ではとても英和にかなわない——演奏会から帰る人々は一様にそのような感銘を心に抱いた。

「英語と音楽——これはほかの学校の及ばない利点を持った教科だ。これを一層強めな

ければならない」と、ゲーンズ校長は思うのであった。

3 試 練

ゲーンズ校長が手がけたもう一つ特記すべき教育活動は幼稚園の設立であった。これも不思議なきっかけから道が開けた。

明治二十四年（一八九一年）の春、市内のある人がゲーンズ校長を訪ねて来て、「あなたのところで幼稚園を開いて下さるんですか」と言った。当時市内に一つしか無かった彼の幼稚園が資金難で閉鎖しなければならなかったというのである。「今すぐ開いて下されば、私共へ来ている七十名ほどの園児を全部でもあなたの方へ回すことが出来ます」というのである。

幼児教育に対する興味と関心とを早くから持っていたゲーンズ校長にとって、それは願ってもない申し出であった。将来の日本で幼児教育がどれほど大切な位地を占めるようになるかを見ぬいていた彼女にとっては、天与の機会であると思えたのである。けれども、その前に解決しなければならないことが、少なくとも二つあった。教師と園舎である。

当時クリスチャン教師を得ることは随分むづかしかったが、クリスチャンの保母を得ることは更にむづかしかった。しかし、神はこのことでもゲーンズ校長の熱意と祈りとに答え給うたようである。誠に立派な主任保母、甲賀ふじを与え給うたからである。

日本の教育制度の中に幼児教育が組み入れられたのは明治五年のことであるが、日本最初の幼稚園が東京女子師範学校附属として開かれたのは明治九年であり、金沢に最初のキリスト教幼稚園が出来たのはやっと明治十九年のことであつた。

このころ、日本の幼児教育に使命を感じて神戸に来ていた組合教会派の宣教師アニ・ハウ (Miss Annie L. Howe) は、明治二十二年 (一八八九年) 頌栄幼稚園と頌栄保母伝習所 (現在の頌栄短期大学) を開設していた。神戸女学院普通科第一回卒業生 (明治十五年) の甲賀ふじは米國留学から帰朝後、明治二十四年一月からこの頌栄保母伝習所に奉職していた。この年七月、この伝習所の第一回卒業生が出ることを知ったゲーンズ校長は、わざわざ神戸まで出かけて行ってその卒業生の一人、松浦品子と共に、この甲賀ふじをも連れて帰ったのである。こうして立派な保母を二人まで確保はしたが、園舎がない。本国伝道局は建築費は出さぬという条件で幼稚園の開設を許可してくれていたので、頼るわけには

いかなかった。ゲーンズ校長は自分の俸給を抵当にして園舎を建てる決心をした。彼女はあとで、「私自身が始めた特別の仕事があるといえるなら、それは幼稚園でしょう」と言ったが、謙遜なその言葉のうちに彼女の当時の熱意のほどが推し量られるのである。

準備は着々と進められ、九月の開園を待つばかりとなった。出来るだけよい幼稚園にしたいという願いから、七十人の園児では多すぎる、精々四十五名止まりにしたい、とゲーンズ校長は思った。建物がいよいよ立ち上がった時、彼女の心はどれほど喜びでふくらんだことであろう。だが、開園の日、四十五人どころか、そこにすわっているのはたった十三人の頼りなげな幼子たちであった。そればかりではない、せっかくのその園舎は、二、三日後の台風ですっかり倒壊してしまった。

園児が集らなかったわけはあとでわかった。当時の第五師団長野津道貫夫人は熱心な仏教徒であったが、公立幼稚園の開鎖を見てとるといち早く幼稚園をつくり、師団長閣下夫人の威光で陸軍関係の後援者をかり立てて園児を吸収してしまったのであった。それはそれでよいとして、せっかくの園舎が、まだ壁も乾かぬうちにペしゃんこになってしまおうとは。この無情なあらしの破壊の現場に立った時ゲーンズ校長の心はどんな思いであったで

あろうか。だが、試験はまだ終ってはいなかった。更に思いがけない災難が起こったのはそれから約一か月後の十月十五日のことである。

真夜中頃「火事だ!」という騒ぎに飛び起きたゲーンズ校長は煙と焰につつまれている校舎を見て色を失った。それは九月に竣工したばかりのあの新校舎であつた。火元は女教師と生徒の宿舎になっていた二階部屋の床と、階下の講堂の天井あたりらしかったが、気付いた時には既に建物一面に火がまわっていて、手の下しようもなかった。教師も生徒も身一つでのがれ出て、怪我^けがなかったのがせめてもの幸であつた。衣類、調度から書物まで何もかも焼けてしまった。唯あのピアノだけは、消火にかけつけてくれた近所の人たちが「ヤソの神棚」と間違えて懸命に運び出してくれたおかげで助かつていた。

不慮の火災で大切な校舎を失ったことは誠に大きな打撃であり、痛手であつた。火事の興奮と跡始末の混雑のうちに、ゲーンズ校長は多忙な日々をすごした。じつくりと考える暇もなかった。だがこの不幸は、市内はもとより国の内外から期せずして多くの同情と関心とを集める結果となつた。母国の教会婦人たちの中には自分の着ている衣類をすら脱いで送ってくれる人たちがあつたし、慰めと励ましとの手紙に添えて、送り得るさまざま

な日用品の見舞が寄せられて来た。ある人はいくばくかのお金を送って来て、「この小切手がなぜ届けられたのかわかりませんが、貴女がお仕事をやめられることを神さまが望んでおられないことだけは確かです」と励ましてくれた。市内の仏教僧侶の中にすら、心ある者は、無償で机や椅子^{いす}を貸そうと申し出てくれる同情者があることを彼女は知ることが出来た。子供を「英和」の幼稚園に通わせようとしていた控訴院判事は、教師と生徒のためにその家庭をすら開放してくれた。こうした多くの暖かい親切に支えられて、ゲーンズ校長は近所に借りた小さな建物の中に、託されている小さな群をもう一ど自分のまわりに集めたのである。

十月二十八日の夕方、ゲーンズ校長は寄宿生を集めて夕拝をしていた。打ち続く災難と共に耐えて来たこのひと群にとっては、それは、互に心を一つに寄せ合うことの出来る、清らかにもたのしい一時であった。最後の讃美歌をうたい、主の祈りに声を合わせて、礼拝が終わったその時、表で「電報」と叫ぶ声がした。持ち込まれたのは小さな桃色の紙片であった。外国電報である。何事であろうか、と一同が息をつめて見守る中でゲーンズ校長はそれをひらいた。発信地はテネシー州ナシビル、そしてただ一言“Rebuild”（再建せ

よ」とあった。夢ではないか。大声に読み上げられたこの紙片は手から手へと回わされた。「讚美しましょう」と叫んだのは、ストライダーであった。一同は声高らかに「Praise God, from whom all blessings flow……」（あめつちこそぞりて、かしこみたたえよ……）というたい出したが、その歌詞は全く新しい意味をもって一同の胸にひびいた。自分たちの生の経験そのままを歌い出た、それは心からの讚美であった。一人の生徒はいつもよりも口数少なく、ただ目だけがやかしていたが、とうとう、静かに低い声で言った。

「私たちがまだお願いしているさい中なのに、神さまはもう祈りに答えて下さった！」
そこに居た誰れの胸にもある、感激の思いであった。

火災の通知を受けた伝道局本部にいたのは、ジョン博士、ウィルソン監督、そしてほんの二、三か月前に帰国して主事になったばかりの若ランバスの三人であった。いずれもゲーンズ校長の友人である。彼らは相談の結果、その年、たまたま持ち合わせていた剰余金を建築費に当てることにしてくれたのであった。

ゲーンズ校長はすぐさま、幼稚園舎、普通教室と講堂、寄宿舎の三つの建物の設計図をつくった。彼女が在任中、建築費にけちけちしなくてもよかったのは、恐らくこの時が最

初で、又最後であったであろう。

こうして、翌年九月、本建築が立派に竣工した時、市民は一層驚嘆の目を見張った。台風が続く火災で全滅した「英和」である。今度こそゲーンズ校長は旗をまいて引き揚げてゆくものときめていたのだ。しかし、出来上った校舎は、当時、この地方で洋風建築のモデルとされたほど立派なもので、県庁からも技師が視察に来るほどであった。それもそのはず、建築を監督したのはクリスチャンの柳原と言う人物で、設計書に寸分違わず正直に監督したので、ずっと後、修繕に来た大工たちは、お寺か神社以外には使われぬほどの良い材木が使われているのには、たまげたということである。

このにがい試練の年が明けた翌年は、校舎設備も格段に新しく立派になり、幼稚園は保母陣、設備共に備わって、明治二十五年（一八九二年）二月開設の認可が与えられた。幼稚園が出来ると、その卒園児が学べる小学校を是非開いてほしいとの声が保護者の間から起こったのも当然かもしれない。こうして出来た小学校は、当初は規準にも合わぬ便宜的なものであったので、これでは正規の小学校にはならないというので、教室も建て増し、尾藤がその主任となって有資格の教師を集め、課程も規準に合わせ、翌二十六年四月から

は正式に小学校として認可を受けることが出来た。

尾藤が去った後に着任した安永寿夫妻は、誠に信仰の篤い人たちで、児童や父兄たちにもよい人格的感化を与えながら、初期の小学校育成に大きな貢献をした。

はじめ父兄の要望で開設されたこの小学校は、生徒数も少ない上に、県市の厳しい監督を受けて、その運営には困難を伴うことが多く、後にはその存続が論議されることもたびたびであった。だが、一たび始めた業^{わざ}である。ゲーンズ校長はその都度人々を説き、最後までこの小さな群を愛しつづけた。

大分あとのことにはなるが、学校給食がまだ今のように行われていなかったころ、この小学校では既に、冬には暖かい給食が行われていた。児童が冬の寒い日に冷たい弁当を食べているのを見て心を痛めたゲーンズ校長が、自分のポケットマネを出して道具を整え、教員室の片隅に備えつけて始めたのがそのきっかけとなったのである。

ゲーンズ校長が広島へ来てから五年間の絶えまない多忙な年月が過ぎて、一年間の賜暇休暇の時が来ていた。思えば試練の連続のような年月であった。信仰に裏付けられた強い

意志と忍耐と努力とがなければ、とても過ごせなかったであろうと思えるほど、それは苦難の多い明け暮れであったのだ。いま、教師陣もどうにか揃い、立派な校舎も与えられ、市民たちからも「流川のミッシェン」と呼ばれ、「英和」といって認められ、生徒の数も倍加し、誠に順調な歩みが続けられ始めたことを思うと、よくもここまで来たものだ、とゲーンズ校長は深い感謝をおぼえずにはいらなかった。

たまたま、明治二十六年（一八九三年）七月にシカゴで開催されることになっていた万国博覧会国際補助会議の婦人部顧問に任命されたし、人々のたつてのすすめもあり、又ガニア・ハラント（Miss Gania Holland）が留守を守る校長代理として来てくれたことにも安心して、ゲーンズ校長は一まず帰国することにした。

明治二十六年の初夏、出帆間ぎわまで一人の生徒の眼病治療のために病院に連れて通っていた彼女は、とうとう神戸出帆の便船には間に合わず、陸路を横浜に急行してやっと乗船することが出来た。

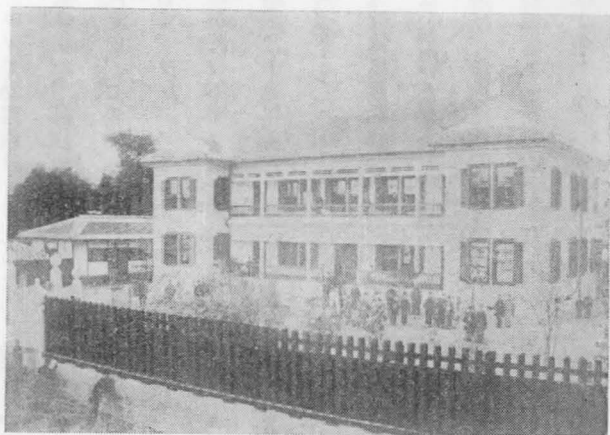
休暇で帰国したとはいえ、ナニにとってはそれは決して単なる休暇ではなかった。むしろ、日本における第二期目の働きのための準備の一年であった。だから彼女はその大部分

をシカゴで幼稚園教育研究のために過ごし、残りの時間はあちこちかけめぐって人さかしに費やした。自分と共に東洋に渡り、ようやく目ざめかけた日本女性の教育に当たってくれる同志を、この機会にどうしても見つけたいと思っていたからである。家族の者をはじめとして、ランバス家の家族や教会員たちも、なぜもっとゆっくり自分たちと一緒にいのかと、不平をもらすほどであった。

明治二十七年（一八九四年）八月二十一日、ナニ・ビ・ゲーンズは、A・D・ブライア
ン (Miss A.D. Bryan) を伴ってタマコ港を出帆し、再び任地日本へと引返した。

九月に広島へ帰って来た時、日本は清国と戦争を始めており、宇品が出征兵士の出発港となっていたため、広島は兵士たちでごったがえる戦時下の街となっていた。学校の仕事以外に、校内に宿営している出征兵士への伝道や奉仕活動の仕事があとからあとからといくらでもあった。ウォーターズ夫妻と、ストライダーが休暇で帰国したので、ゲーンズ校長は人手不足に一層困ることになった。彼女が帰校後母国へ出した第一信は「広島の学校のために、どうか至急教師を送って下さい」と言う依頼状であった。学校がその後堅実に発展してゆくにつれて、有能な宣教師教師の必要は年と共に増し、彼女は在職中ずっと、

この要求を出しつづけることになったのである。



火災のあと、明治25年に再建された校舎

第三部 秋

1 建設

幼子をキリストへ。幼子をとおしてその家庭をキリストへ——。幼稚園が宣教のために、どれほど重要な教育機関であるかを見抜いたゲーンズ校長が、幼稚園保母養成の必要を痛感したことはむしろ当然なことであろう。母国に対してこの方面の専門家派遣を要請したのは無論のことであるが、仕事の必要を感じながら、みすみすむなく時を過ごすゲーンズ校長ではなかった。彼女はまず、既設の幼稚園の外に貧困家庭のために無料の幼稚園を開き、数名の有望な寄宿生を選んで保育の実習をさせた。また自分で彼女らに保育教育の基礎を教え始めたのである。時間は朝食前と放課後、場所はあちこちと、あいた教室、時には彼女の寝室がその教室となった。教室が足りないのである。かくしてここに保母養成科が生まれることになった。明治二十八年（一八九五年）のことである。

当時、ゲーンズ校長がどんなに多忙に活躍したかは、古里ケンタッキーの友人に書き送

保母養成科
を始める

った次の手紙によってもその一端がうかがえるであろう。

「二つの幼稚園を監督するほかに保母養成のクラスを教えていると申し上げれば、私がどれほど多忙であるか少しはおわかり下さるでしょう。学校全体のことを申しますと、十二学級を私は見なければなりません。その上、英語の授業もあります。幼稚園で働いている七人の若い人たちの世話もしなければなりません。それから日曜学校です。市内数か所に部屋借りで開いているほかに、学校の講堂で開いている日曜学校には、今、九十人以上の子供たちが集ります」

児童、生徒をとおしてその家庭へ働きかけることが出来る誠に好い機会があることに気付いたゲーンズ校長は、市内のすべての在学児童生徒の家庭を一軒残らず訪問した。生来の無口で、その上日本語があまり得意でなかった彼女は、口数は少なく、ただにこにこしているだけの場合も多かったが、若くて美しいその端正な容姿には、春の光のように暖かい温情が自然とにじみ出ていて、接したほどの父兄たちには一様に、頼もしさと共に好ましい印象を与えたのであった。放課後の訪問に、散歩に、街をよく歩いたゲーンズ校長は市民たちにも「英和のゲンス先生」「ミッシェンのゲンス先生」として親しみ知られるようになった。「西洋人じゃ！異人じゃ！」と子供たちにわめかれて、うしろからぞろぞ

ろつて歩かれた初めのころに比べると、街を行くのもずっと気楽になっていた。

学校を宣教活動の一つの基盤にしたいと思ったゲーンズ校長は早くから出張日曜学校の組織を考え出していた。それは市内の数か所に、訪問によって親しくなった父兄のうちの篤志家の部屋などを借りて開く日曜学校で、そこへ学校の教師と、主として寄宿生を派遣して近所の子供たちを導く仕組みであった。こうして信者、未信者の区別なく、すべての生徒にキリスト教の奉仕活動を体験させたのである。この出張日曜学校は、学校で開いていた日曜学校と共にその後もずっと続けられ、多くの子供たちの心に福音の種をまくと共に、生徒たちには奉仕の喜びを体験させた一石二鳥の教育活動であり、宣教活動であった。

幼稚園と保母養成科の開設に関連してゲーンズ校長が最も必要を感じたことは幼児教育専門の有能な教師を得ることであった。初期の甲賀、松浦両保母の努力により「英和」の幼稚園は模範幼稚園として認められ、入園希望者も増加し、年毎に盛んになっていった。

後に童話家として令名をうたわれた久留島武彦が、当時関西学院の学生で、他の学友たちと伝道の手伝いに広島に来ていて、ある日幼稚園を訪ね、粘土細工で遊んでいる園児との

問答から非常な感銘を受け、将来童話家になろうとの決心をかためるに至ったのも、丁度この頃であった。

幼稚園が発展すると益々必要が感じられたのはよい指導者である。ゲーンズ校長は本国伝道局はじめ友人知人たちに有能な専門家を送ってくれるようにと訴えつづけた。二、三の候補者があったが、いずれも病氣その他の故障が起きて、結局一人も得られなかった。ようやく七年目にその願いがかなえられることになった。親友ミス・パティ・ヒルの世話で、伝道局が四か年の契約をしてくれて、広島に来ることになったのはファンシー・マコーレイ (Mrs. Fancy Macaulay) であった。

ケンタッキー州の豊かな上流家庭で娘となったファンシーは、イギリスのマコーレイ卿の甥に当る一人の若い紳士と花やかなロマンスの花を咲かせた。だが、その結婚は失敗であった。新婚の夢に破れたこの気位の高い激しい気性の情熱家は、心に受けた深い痛手をいやすためにもと、遠い日本の仕事に飛び込んで、そこで総てを忘れたいと願ったのである。幸に彼女は幼児教育を専攻し、パティ・ヒルの下で二年間保育の経験も積んでいたのである。だが、信仰の裏付けも持たないむしろ世俗的なファンシーは、はるばる広島まで

来て、仲間となる宣教師たちと初対面をした時、全く場違いの所に來た自分に気付いた。互いに使う言葉までが違っているようにすら思えたのであった。こんな所でこんな人たちと一緒に働くのかと思うと「四年の刑を言い渡されて、刑務所へ入れられた囚人にでもなったような気がした」と彼女が後で述べているほどであった。だが、がっかりして旅館の一室に引きこもっている彼女のところへゲーンズ校長が訪ねて行った時、事態は少しずつ変わっていった。まずナニが部屋に入って帽子をぬいだ時、黒い髪を真中から分けて、ひとみの美しい端正なゲーンズ校長の温和な容姿に、ファンシーは直観的に好感をいだいた。いつものもの静かな態度で、ゲーンズ校長は今までのことをかいつまんで話をした。自分が日本へ来るようになったいきさつから、苦勞をして学校を再開して今日まで來たこと、そして胸に描きつづけている将来の夢まで打ち開けた末、

「貴女が來て下さったことは、長い間の私の祈りが答えられたことにほかなりません。幼子たちのためによい幼稚園を開くことは、私の最も大切な夢の一つでした」

と、喜びと信頼とを心から現わして言うのであった。

「貴女とこうしてお話が出来るとは、信じられないほど私にはうれしいのです」

じっとファンシーの目を見つめて語るゲーンズ校長の言葉は真情にあふれていた。しばらく話し合っているうちに、ファンシーは、はじめ自分が感じたことが恥ずかしく思えてくるのであった。

幼稚園でのマコーレーの素晴らしい活躍が、こうして始まることになったのである。

新しい遊戯、絵遊び、音楽、恩物と、今まで知られなかった教授法がつぎつぎと巧みに取り入れられた。中でも遊戯の中にリズムを取り入れ、スキップを紹介したことは全く新しい指導であった。彼女が考案して園児のみならず、保母養成科生にも保母たちにも着せた白いエプロンのような制服は、両肩にギャザーがついていて、丁度話にきく天使の羽根のようであった。それは当時としては誠に珍しい服装で、それだけでも評判になった。その白いエプロンを着た園児や保母が、ミセス・マコーレーの弾くオルガンに合わせ輪になってスキップをする可愛い情景は、またたく間に女学校の生徒たちの間にも人気を呼んだ。このスキップは市内はもとより、後には全国の幼稚園にまで広まるほど有名になった。模範的な「英和」の幼稚園ほど楽しい幼稚園はない、と、参観者が毎日のようにやって来た。

ひたむきに仕事に励む間にも、ファンシーは自分自身との戦いに苦しむことがたびたびであった——時には環境になじめず、時には心の不安からぬけ出そうとして。そのたびに彼女はゲーンズ校長のところへ来て悩みを打ちあけた。そんなファンシーをゲーンズ校長は辛棒強く、暖かく見守ってやった。どんなことでもだまって聞いてもらえるだけで、ファンシーは心が和むのであった。

ある日、ゲーンズ校長は午後の散歩にファンシーを誘った。

平素から健康に気をつけていた校長は、午後四時の散歩と夜九時の就寝とを、早くからの習慣として守っていたのである。ゲーンズ校長が、広島城跡の外堀に咲いているあやめの花を見て、その美しさに心を打たれたのも、こうした散歩の折りであった。その時彼女は、ケンタッキーの古里の家の庭にも、春になるとあやめが咲き出ていることを思い出した。どろ土の中から咲き出ながら、気品のある紫色をしたこの清らかな花の姿を彼女は美しいと思った。この時からゲーンズ校長はこの花が一層好きになって、「あやめの花のように美しく……」と生徒にもよく話すようになったのである。

この日、二人は学校の門を出ると、道を東にとって職町の静かな通りから栄橋を渡り、

大須賀町へ出た。その町から学校へ通っているある生徒の家の前にさしかかると、学校から帰っていたその生徒が、母親と一緒に表に出て来て、うれしそうに二人にあいさつした。顔見知りのその母親にゲーンズ校長はファンシーを紹介した。門口で遊んでいた近所の子供たちが物珍しげに寄り集って来たが、ファンシーの赤い髪にたまげて「ライオンのようじゃ」などとささやき合った。次の日曜日に日曜学校へ来るようにと子供たちにすすめていたナニは、一人のみすぼらしい女の子が大きな赤ん坊を背負っているのに目を止めた。赤ん坊の頭にはひどいおできができていた。ナニが女の子に、赤ん坊はいくつか、どこに住んでいるのか、などと尋ねているのを見て、生徒の母親は、日雇いに出ている女の子の父親のこと、病気で寝た切りの母親のことなどを話した。その家がすぐ裏だと聞いて、ナニは、「一寸訪ねてあげようではないか」とファンシーをうながした。裏通りに一歩踏み入れたファンシーは、そこにひどい家がごたごたと並んでいるのにびっくりした。臭いにおいがしていた。そんな貧しい、きたないところは始めて見たのである。ゲーンズ校長は平気でその家の内へ入って行った。薄暗いふた間ほどの部屋の奥に、病人はふせていた。思わぬ訪問者にびっくりして出て来た隣りのお上さんが、ナニに病人の容態を述べ、昼間

は誰れも世話をする者がいないので自分がみてやっているのだ、と説明した。

「うむ、そお……」と聞いていたゲインズ校長は病人の方へにっこりと軽く会釈して言った。

「おだいじに。このつぎ来るときは、何か滋養になる食べ物を持って来ましょう、どうぞおだいじに……」

「ありがとうございます。ほんまにのう、ご親切に……」

と、お上さんが病人にかわって、幾度も礼を言う声をあとにして、二人は表通りへ引き返した。

生徒と母親に別れを告げて帰途についた。肩を並べて歩きながら、ゲインズ校長は貧しい人たちの暮らしについていろいろとファンシーに語って聞かせ、

「明日はあの病人にスープをつくって持って行ってあげよう」と話すのであった。

栄橋までもどってくると、丁度夕日が沈もうとしていた。折からの上げ潮で川は豊かな水をたたえて兩岸の石垣をひたしていた。泉邸の森がその川の上に濃い陰をつくっている。西空は燃えるような夕焼けで、下流の京橋のかなたには遠く似島も見える。左手の街の屋根の上には比治山の木立の茂みがあり、その上空にあかね色に染った雲がうかんでいた。

二人はしばらく橋の上で足を止めて、美しいそのたそがれの景色に見入った。

「遠くホームを離れている私たちの心を慰めて下さるために、神さまはこのように美しい眺めをそなえて下さるのでしょう」とゲーンズ校長は言うのであった。

周囲の人たちの犠牲的な毎日の生活振りを見ているうちに、いつしか、ファンシー・マコーレイも自分だけが超然としていることが出来なくなっていた。ゲーンズ校長が学校のためや困っている生徒のために小遣いも全部当てていることを知った時、又ほかの宣教師たちが石炭代をささげて冬の寒さに耐えているのを知った時、彼女も又母国の家族や友人たちにクリスマスの贈物を買うために貯めていた小遣を全部ささげて、園児たちに飲ます肝油代に当てていた。

幼稚園の仕事をまかされて二か年が過ぎた時、ファンシーの最初の不真面目な軽薄な心はすっかり消えて、仲間の宣教師たちに対しても明らかな感嘆と尊敬の思いを抱くようになっていた。そればかりではない、一たびは生きがい失って破滅にひんした自分のような生がいでも、それを人々のために役立てようと努めるならば、思わぬ幸が再び与えられることを彼女は実感したのである。

「勲章夫人」

こうして自分を取りもどすことが出来たかつてのこの悲劇の主人公は、契約の期間を一年延ばしてまでゲーンズ校長をたすけた。文才のあるこのファンシー・マコーレーが、広島での見聞をまとめて、帰国後に出版した「勲章夫人」“The Lady of the Decoration”はアメリカでベストセラーとなった。それは日本の風物、人情などを広く紹介すると共に広島英和女学校の名をも一躍有名にしたのであった。

M・クック

保母師範科

ナニ・ビ・ゲーンズが学校の初期に幼稚園教育と保母養成に貢献したことは特筆に価する。この保母養成科には明治三十七年（一九〇四年）に保育学専門のマーガレット・クック（Miss Margaret Cook）が派遣されて来た。彼女はゲーンズ校長をたすけて内容を益々充実した。そのため、この科には優秀な生徒が集り、明治四十一年（一九〇八年）には発展して保母師範科となって保母の無試験検定を受ける資格を与えられた。ゲーンズ校長はこの保母師範科をこの上なく愛し、又学校がこの科を持っていることを心ひそかに誇りにすら思った。けれども後、時勢に応じ、広島には専門部を開設して家事科と英文科を置き、大阪に幼児教育者や婦人伝道師などクリスチャン・ワーカーズ養成のための専門学校を設立することになって、この師範科を大阪に移すことになった。ゲーンズ校長はこの決定に

心よく同意はしたが、一人娘を嫁^{よめ}がせる母親のような気持でこれを送り出したのである。

ランバス女
学院

こうしてこの師範科は大正十年（一九二一年）三月、保母師範科主任マーガレット・クックに率いられて大阪に移され、先に老ランバス夫人メリーによって神戸に創立されていたランバス記念伝道女学校と合併した。こうして新たにランバス女学院保育専修部が生まれたのである。このランバス女学院はその後発展して、現在西宮市の聖和女子大学となり、クリスチャン保育者並びに基督教教育主事養成のために誠に特異な使命を果たしつつある。

松浦
豊吉

尾藤徳義は再開された学校の初期に小学校のみならず女学校のためにもよい働きをしたが、大体の目鼻がついたのを見届けてから横浜へ去った。尾藤に代わったのは庄原に居た松浦豊吉であったが、ゲインズ校長の休暇帰米中に病死した。だから、ゲインズ校長が帰校した時、助け手の宣教師を得るのに骨折らねばならなかったと同じ様に、日本人の幹部教師をさがすのにも随分苦勞をしなければならなかった。

西村
静一郎

ようやく、誠に立派な人物が候補者として見つかったが、迎えるまでには容易なことではなかった。最初、西村静一郎は、広島英和女学校教頭として三度招かれ三度辞退してい

る。それもその筈、当時彼ほど人格学識共にすぐれた人物はさらには見られなかったのである。

西村静一郎は文久三年十月十四日、四国大州藩の旧家老の家に生まれた。若くして上京し、有名な福沢諭吉の慶応義塾で親しくその教えを受けていた。彼は数学と英語に秀で国文学と漢文学の造詣が深く、書をもよくした博学多識の士であった。望みさえすれば官公立学校の高い地位に高給で勤めることも容易であったのだ。だが、西村は老ランバス博士を知っていた。明治二十年、西村は古里四国に帰って宇和島で英語塾を開き、子弟の教育に当たっていた。後に「英和」の校主となった岡健太から老ランバスの人柄を聞くと、彼は熱心に奔走して博士を宇和島に招き、伝道集会を開いた。これが宇和島教会設立（明治二十年九月二十五日）の端緒となったのである。翌年八幡浜に移り、更に神戸に出て老ランバスから洗礼を受けると、キリスト教関係の仕事に生がいをささげたいと心を決めたのである。広島英和女学校の校舎が火災で焼失したことを聞いたのは、丁度老ランバスのところで翻訳の手伝いをしていた時であった。彼は老ランバス夫妻と共にこの学校のために祈り、アメリカの伝道局本部へ電報を打ったのであった。その上彼は老ランバス夫妻の偉大

な人格の感化を受け、この忠実な主のしもべたちの生活を見て、主のためにすべてを犠牲にすることの意味をも悟らされていたのである。ランバスのところにしばらくいた後に四国松山の教会関係の学校へ行ったのであるが、そこではある事情のために、彼は自分の教育理想を実現出来ないでいた。そんな時に、広島から招きが来たのである。古武士的気象を多分に持った西村は、年若い外国婦人の下で働くことを最初は潔よしと感じなかったようである。しかしゲーンズ校長の人柄をランバスからも聞いていたし、彼女が単なる知識の伝達以上にキリスト教による人格育成の理想の下に、日本女性のための学校づくりに献身していることを知ると、再三の招きをついに受けることになった。明治二十八年（一八九五年）の秋のことであつた。

着任してゲーンズ校長の包容力のあるすぐれた人格に親しく接し、又どのように苦心して学校の経営に当っているかを目の当たりに見た時、彼は、ここにこそ自分の働き場がある、と思うようになった。

ところが間もなく困ったことが起きた。古里の町長から、国へ帰って中学校（旧制）の校長になってくれ、と言って来たのである。西村は丁寧この招きを断わった。今となつ

てはゲーンズ校長を見棄てて立去ることは、とても忍びなかったのである。だが、故郷からの招きは再度来た。今度は父からの手紙も入っていて、「古里に帰って郷土のために尽すことが、西村家の長男としてのお前の務めではないか」と、半ば命令するような文面であった。「基督教信者としてのお前の信仰を認め、決してお前の自由を束縛するようなことはしない」との約束の言葉も書き添えてあった。西村は悩んだ。老い先短かい父に再度そむくことは彼には出来なかった。といって、明らかに彼を頼りにしている学校の現状を知りつつ立去ることも、彼の良心が許さなかった。彼はついに三日間の休みを願い出て、断食と祈りのうちに主の御旨を知ろうとした。学校も教会も彼のために祈った。それほど、ゲーンズ校長らは彼に望みをかけていたのである。三日の後に、西村がゲーンズ校長を訪ねて来て自分の決心を告げたのは、よく晴れた日曜日の朝のことであった。

「先生、ご心配をかけてすみませんでした。やっと決心がつきました」と述べる西村の顔は明るかった。

「学校にとどまって働かせて貰います。が、郷里の人々や父に、このままでそむくことは私にはとても出来ません」

「……………」

「一ど郷里に帰って、みんなに私の氣持をよく説明して断わり、みんなの好意に対しても礼を言ってきたと思います。出来れば、私の代りに誰か適当なほかの校長を捜す手助けをもして来たいと思います。誠にすみませんが、もう少しの間お暇を下さいませんか」

「よろしい、ミスタ・ニシムラ。行っていらっしやい。そして、お父さまや町長さんたちに私共のことをよく話をして来て下さい。祈っています」

こうして西村静一郎は学校にとどまり、ゲーンズ校長の最も良き補佐役となり、学校の体制を整え、これを堅実な歩みへと導くことに専念することになった。

ゲーンズ校長はこの人格識見共に優れた人物を得たことを深く喜び、彼をその「片腕」として全幅の信頼をかけ、やがては学校運営の実務を安心して託したのであった。幼稚園に、保母養成に、小学校、日曜学校に、訪問伝道にと、教育に伝道に、ナニ・ビ・ゲーンズが時をわかつたず広い活動が続けることが出来たのも、このよき補佐役を得られたからこそであった。

西村静一郎が、ゲーンズ校長の教育理想を学校体制の上に実現する手始めとして進言したことは、校名を変更することであった。彼が着任して間もなく気付いたことの一つは、在籍生の大部分が浮草勤めの官吏階級の娘たちが多く、土地の者が少ないことであった。「英和」という名前の響きには、文明開化のハイカラなおいがして、そんな娘たちの多い学校を一面よく現わしてはいるが、それだけではいけない、と彼は思った。学校がこの広島の土地のものにならないといけない、と彼は考えたのである。

ある日、西村教頭はゲーンズ校長のところに来て自分の意見を述べた。

「先生、学校の名前を変える時が来ているように思えるのですが、如何でしょうか」

突然、重大なことを言い出した西村の真意を、ゲーンズ校長は最初ははかりかねた。

「学校の名前を変える、ですか？ どうしてですか、ミスタ・ニシムラ？ わたしにはあなたの考えがよくわかりません。どうして学校の名前を変えなければなりませんか？」

「先生、この学校は、英語を教えることから始まったということです。ですから、「英和女学校」と言うのはこの学校に似つかわしい名前でした。けれども、学校は今が大きくなりました。幼稚園も小学校も持っています。英語に重点を置くことには変わりはありません。

せんが、ほかの学科、音楽も国語も家事裁縫も数学もみな大切な学科です。その上、保母養成科まで出来ました。このように大きくなった学校は、この広島の人たちのための学校でなければなりません。それは先生の御方針でもあると思います。このように考えますと、英和も決して悪くはありませんが、もっと広い意味を持たせて、いっそ、「広島女学校」と呼ぶ方が、この広島の町の学校として一層ふさわしいのではないでしょうか」

「ふむ、広島女学校」

「そうです、先生。広島女学校という方が、町の人たちにも一層学校に親しみを持たせると思うのですが、如何でしょうか」

「わかりました、ミスタ・ニシムラ。あなたのおっしゃることがあるいは正しいかもしれません。わたしも、この問題についてはもう一度よく考えてみましょう。神さまがきっとよい方をお示し下さるでしょう。ミスタ・ニシムラ、一緒に祈って下さい」

学校の名前を変えることは、ことに私学では重大なことであるが、西村教頭の明察と、ゲーンズ校長の明断によって、明治二十九年（一八九六年）三月から「広島女学校」と改められることになった。その後の学校の発展を思うとき、誠に時宜を得た改名であった。

西村教頭は又、町のある書籍店主とつとめて親しくなった。その娘は無論広島女学校の生徒となり、店主は町土着の有力な父兄の一人となって、後に校地の購入に大きな力となってくれた。

ゲーンズ校長は西村を校主に任命した。そして学校管理の実務だけでなく、その外の多くのことで、大きな助けを受けた。中でも外国人には理解し難い習慣やしきたりの意味、日本人的な物の考え方や問題解決の仕方などを学んだことはとても為になり、日本人をよりよく理解する上に大きな助けとなった。「相談」の大切さをも知らされた。「たとえば決定に一週間かかるようなことがあっても、先生方がみな充分納得し合意することが一番大切です」とこの教頭は繰り返した。即座に日本語でしゃべることは、ゲーンズ校長は決して得意ではなかった。従って「相談」はにが手の方であったが、彼女は持ち前の意志の力で、長時間の会議にも慣れるように努めた。そのうちに、会議中余り重要でないところでは「居眠りして通す」すべもおぼえた。しかし大切な点は決して見逃さなかった。ゲーンズ校長が帰校してからまだ二年もたっていないのに、学校は日増しに発展して、教室が足らなくなっていた。入学志望者は増すばかりで、残念にも断わらなければなら

いほどであった。どうしても土地と建物を手に入れなければならない。ゲーンズ校長は伝道局本部をはじめ教会の友人たちに、暇さえあれば手紙を書いて学校の現状を知らせ、必要を訴えつづけた。極めて实际的、常識的に物事を判断し処理する能力を持っていたゲーンズ校長は、こうして打つべき手を打ったのであるが、同時に、神に対する強い信頼をその行動の裏付けとしていた。

西村校主がある時、必要な資金を得るために、もう一度是非本部へ訴えてくれと言って来た時、「神さまは本部の主事より以上にわたくしどものことは知っていて下さいます」と答えて、むしろ共に祈ってくれと言うのであった。

祈りはゲーンズ校長にとっては最も大きな力の源であった。万事に不自由不便の多い異国で、切り詰めた経費による学校経営の責任を負っているゲーンズ校長には人知れぬ多くの苦勞があった。教育のための苦勞はむしろ喜びであったが、面倒な人事や経済的な問題などは、心をすりへらすほどの重荷となっておそいかかってくることもあった。そうした重責に堪えぬいた上に、更に将来を目差して前進しつづけたのは、ゲーンズ校長のすぐれた能力資質によるのであるが、その判断や行為の源動力となったものは祈りであった。

ゲーンズ校長は、人前での祈りはめったになかった。学校のチャペルで祈ったのもごくまれであった。けれども、扉を閉ざした自室で唯一人、あるいは親しい仲間と、ゲーンズ校長はよく祈った。教師たちが、校長の部屋をノックするとしばらくは応答がなく、やがて出て来た校長の顔の輝きにはっとするようなこともたびたびあった。過去のさまざまな苦しかった経験を通して、神に信頼を置くことが如何に大切で確実なことであるかを学んでいたのである。事実、そうして祈っていると不思議なことに、思いがけないところから援助の資金も与えられるのであった。

無論ゲーンズ校長は自分の手持の金が必要な時にはいつも真っ先に出していた。その事情を知っている若ランバス夫人ディジィは、ゲーンズ校長が自分の持ち金をいつも「最後の一銭まで」ささげてしまうのを、ある時には叱って来たほどであった。

成長盛りの子供が短くなった着物を窮屈げに着ているような状態で、不自由な中にもゲーンズ校長を中心に、西村教頭以下の教師たちは一つとなって教務に励んだ。

ゲーンズ校長を中心といっても、彼女は決して支配的権力的な中心ではなかった。重要な点は呑み込んでつかんでいたが、そのほかの点では出来る限り教師たちを信頼して仕事

をまかせ、自分はむしろ背後から支えとなり、援助者となって激励した。「先生方にまかせますから、どうか、日本女性のためのよい学校にして下さい」とゲーンズ校長はよく言った。平素から彼女の犠牲的献身振りに心打たれていた教師たちは、乏しい中にも学校の前途に希望を持ち、寝食を忘れるほどの働き甲斐を感じて励むのであった。それはゲーンズ校長が学校の標語として選んでいた聖句「我らは神と共に働く者なり」（コリント前三・九）の精神をそのまま日常の教育活動に現わしているような麗しい協力振りであった。家事の教師を採用する資金に窮した時、ゲーンズ校長は自分で調理を教えたことがあったが、真新しい塵取りを利用して彼女がつくり方を実演してみせたビスケットは、こんがりと焼けて、仲々の好評であった。図画の教師が得られなくなった時、彼女は講師を招いて教師たちのために絵の練習をさせた。そのうちに専任が見つけられたが、教師たちが協力して事に当ろうとした意気は誠にさかんであった。西洋風に鉛筆で描くばかりでなく、日本人には筆で描く方がずっと得意ではないかと、ゲーンズ校長はこの時指摘した。作法の時間を課程の中に組み入れたのも、日本女性のしとやかさ、礼儀正しさを尊び、それらを伸ばそうとしたゲーンズ校長の意見からであった。

教師たちの協力に支えられて、ゲーンズ校長は土地建物の不自由さの中にあっても、いら立つことなく、不平を言はず、手持のものを出来る限り利用して、辛棒強く資金の与えられる時の来るのを待った。

若ランバスは伝道局主事として、こうした状態のゲーンズ校長を海の彼方から常に励ましつづけた。不況のために、更に一年は待たねばならないことを告げた手紙で、

「土地と建物とを必要としておられる貴女に心から同情しています。どうかこのために特別に祈っていて下さい。やがて、きっと貴女の要求が充たされる道が開かれるでしょう。忙しい仕事の合間に、神と共にある静かな時を持つことを怠らないで下さい。二、三分でも部屋にとじこもって、神と交わる時を持つならば、ほかのどんなところから得られるよりも以上の平安と力とが与えられることでしょう。」と励まして来た。

この手紙を受け取って間もなく、喜ばしい便りがとどいた。セントルイスのR・M・スクラッグス(R.M. Scruggs)が広島女学校のために二、五〇〇弗をさげてくれたというのである。寢食を共にする寄宿舎生活がどれほど人格教育に大切であるかを知っている校長は、この好意の贈り物を感謝して、「スクラッグス・ホール」を建て、これを臨時の寄宿舎に当てた。しかし、幼稚園や保母養成科のための建物は、まだ狭いままであった。

これより先、流石のゲーンズ校長も一時病に倒れたことがある。明治三十年（一八九七年）のことである。当時唯一人の宣教師協力者・ジェイムズが同じく病氣のために広島を立去ったので、彼女は全く孤軍奮闘の毎日であったのだ。神は再び彼女の上に手を延べて休みを与え給うたようである。ゲーンズ校長は静かに休養して主のみ旨のあるところを熟考した。この病床の間にも、本国から若ランバス夫妻が仕事の責任の重圧にひしがれないように、思いわづらいをやめて、重荷を負って下さる主にまかせるように、と忠告し、慰め励ましてくれた。ゲーンズ校長はこの病中を通して一層神に頼る平静な心を得たようである。

快復して二、三日後に、ジョージア州アトランタ出身のリジイ・トマス (Miss Lizzie O. Thomas) が広島へ任命されたと言う朗報がとどいたが、病氣上りの校長にとっては何よりよい薬であった。在籍生徒数が既に三〇〇名を越えるほどになっていて、助け手はまだ必要であった。

翌年、思いがけず又朗報が来た。アンナ・ラニアス (Miss Anna Lanus) の任命であ

る。明治三十一年（一八九八年）九月二十七日、待望のラニ阿斯が神戸に到着した時、余はどうれしかったのか、ゲーンズ校長は折り悪しく足首を挫いて松葉杖つえを使っていたのに、わざわざ神戸まで出かけて出迎えている。ラニ阿斯は才氣にあふれていた上にピアノが上手であつたので、校長はことの外彼女を得たことを誇りにし、いろいろな機会にそのピアノの才能を人々に誇らしげに披露ひろうした。

文部省視学官持地六三郎が広島に来た際、広島女学校の噂うわさを聞き、突然学校を視みに来たのもこの頃のことであつた。西村校主の案内で校内を回つた時は既に放課後で、音楽科だけがラニアスの指導で合唱の練習をしていた。日本語もまだ充分話せないラニ阿斯が、熱心に又巧みに指導しているのを視みていた視学官は、終つてから、一曲の演奏を所望した。望まれるままにピアノに向つたラニアスの演奏に視学官は感じ入った。「このように立派な音楽教師を持っているのは御校だけの幸でなく又当地方の幸福である。広島女学校は是非音楽選科を設けて認可を受け、音楽教師の養成に当られてはどうか」と、激賞した。教会と合同で市公会堂で初めて開いた慈善音楽会においてもラニアスの演奏は素晴らしく、翌日の新聞が取り上げるほどの評判であつた。

しかし、おいしいことにはゲーンズ校長が自分の片腕と頼み、将来自分の後継者にしたいとまで目をかけていたこのラニアスは明治四十三年（一九一〇年）宣教師 S・A・スチュアートにあり、結婚して広島を去ってしまった。失望は大きかった。だが不思議にも、ゲーンズ校長が大正九年（一九二〇年）校長を辞して名誉校長になった際、二代目の校長として彼女の後を継ぐ事になったのは、この S・A・スチュアートと妻のアンナ・ラニアス・スチュアートであったのも偶然ではなかったといえよう。

学校は明治二十四年（一八九一年）あの火災のあった年に第一回卒業生四名を出してから前述したようなさまざまな出来事の中にも次第に発展していった。明治三十二年（一八九九年）寄宿舎新築の年には近接地一、四〇〇坪を購入することが出来た。明治三十四年には本科五年の外に予科二年を持ち、又三年の技芸専修科（裁縫専修科）に刺繡科ししゅうをも加えるほどになっていた。ゲーンズ校長はきまりの賜暇休暇の時期を二年も過ぎていたが帰国しようとはしなかった。とうとう若ランバスは伝道局主事として「これ以上長くいてはいけない。早く帰国して休養を取らなければいけない」と、再度校長に手紙を書かねばな

マウド・ボンネル

らなかった。だが、校長としては、誰れかが自分に代って留守を守ってくれることがきまらなければ、持場を離れるわけにはゆかない、と言って頑張った。マウド・ボンネル (Miss Maud Bonnel) がそのために任命されたと聞かされた時、彼女ははじめて帰国することに同意した。

二度目の帰国

アイダ・シヤナン

明治三十六年（一九〇三年）九月、二度目の賜暇休暇のために帰国の途についたナニの顔には、激務に励んで来た者とは思えぬ輝きがあった。なすべき仕事は、海の彼方の母国にも待っていたからである。本国に帰っている間に、ナニは相変らず、あちこちと、学校のための奔走をつづけた。そのために、後に保母師範科主任となって十七年間も勤めた前述のマーガレット・クックや、又三十年以上に及ぶ貢献をしたアイダ・シヤナン (Miss Ida L. Shannon) が広島に来ることになった。資金もあちから一五弗、こちらから四〇弗、又あるところからは一二九弗二七セントなどと、たとえその額は多くなくても、広島女学校のために、と続々寄せられてくるようになった。翌明治三十七年（一九〇四年）ギヤロウエ監督が来朝した時、彼はジャクソン夫人 (Mrs. E. E. Jackson) の好意により、新校舎に要する資金が得られたといううれしいニュースを持参してくれた。こうして、この

休暇中に、ナニが充分な休養も取らずに奔走したおかげで、願っていた資金はどうやらあつめることが出来た。

明治三十八年（一九〇五年）更に隣接の土地四〇〇坪余りを購入、九月には新校舎も落成した。ところが、二年後の明治四十年頃から本科の入学生が減少しはじめたのである。主な理由は、文部省が高等女学校令を改正してきびしい規準をつくり、それに合わないものは高等女学校と認めなくなったからである。

明治の初期にミッシェンスクールが我が国の女子教育界になした貢献は誠に大きいものがある。しかし、当時は日本語のよい教科書もなく、英米人の教師が中心であったため多くの学科も英語で教えられていた。こうして万事に西洋流の教育を受けた女性たちが、当時の一般家庭の生活には必ずしもよく適応出来たとは限らない。そうしたことに反動が来て、それが国粹思想の時期とも重なってやがて女子のミッシェンスクールは一般に振わなくなり、それが一般の女子教育不要論にまで発展して公立師範学校の女子部までが各地で閉鎖されるような時期があった。広島英和女学校が門を閉ざし、ナニが神戸に引き揚げねばならなかった頃のことである。そうした中で学校を再開したことだけでも、ナニが非凡の女

性であったことがわかるが、彼女のその後の苦勞がどんなものであったか、こうした事情を思い合わせるとき、それは想像以上のものであったであろう。時が経って、文部省もようやく女子教育の必要に目ざめて来たが、その頃はまだ女学校の数も少なかったもので、それまで苦難に耐えて来ていたミッションスクールは却って盛んとなったのである。その後、日露戦争で大勝の結果社会生活が進むにつれて、女性の社会進出も活発となり新しい時代の要求に答えるために各地に女学校が続々と生まれることになった。だが公立学校以外は概して程度も低く内容も粗末なものが多かった。そこで文部省では高等女学校令を改め、標準に合わないものは無資格の各種学校にしたのである。こうした中で多くのミッションスクールが文部省の認可を受けることをなおもためらった大きな理由は、宗教教育が干渉されることを心配したからである。教育と宗教との分離政策を取った政府は、明治三十二年八月、私立学校令の制定と同時に、文部省訓令第十二号を出して、官公立学校においてだけでなく「学科課程に関し法令の規定ある学校」においても宗教教育を禁じていたのである。こういうわけで多くのミッションスクールは危期を迎えることとなった。

中部日本宣教師協会は委員会をつくって対策をねることになり、ゲーンズ校長は委員の

一人に選ばれた。彼女は他の委員たちと共に問題をあらゆる角度から研究した。その結果、最善の道は文部省の認可を正式に受けることであるという決論に達した。案じられていた宗教教育も私立学校では法令に定められた学科課程を取らぬ限りは認められ、現に青山学院が認可を受けつつ支障なく宗教教育を続けていることもわかった。ミッシェンスクールが程度の高い正式の学校として社会に認められるためには、文部省の規定に従いその認可を受ける外にないと悟ったゲーンズ校長は認可申請に踏み切ったのである、官制のカリキュラムに従うことについて反対する意見もあったが、「結局、教育の主体は学科ではなく、学科を教える教師ではないでしょうか」と、彼女は主張した。

こうしてとるべき方策はついたものの、認可に必要な建物設備を更に充実することは並大抵のことではなかった。西村教頭をはじめとする教師たちの協力一致の努力があったとはいえ、学校の将来を見通して、さまざまな不利な条件の下にありつつも、困難を克服して認可をかち取るまでの努力をしたゲーンズ校長のうちには、開拓者であった先祖たちの不屈の闘魂がまだ衰えることなく残っていたのにちがいない。

努力はむくいられて明治四十三年（一九一〇年）本科卒業生は専門学校入学に関する文

部省の指定を受ける資格を与えられることとなった。

こうして、ゲーンズ校長にとっては、困難であった学校建設の開拓時代は終わることとなった。今後は文部省の定めた課程を忠実に実施すればよいこととなったのである。しかし、広島女学校は決して公立学校の単なる模倣であってはならない。明確な基督教的特色を強く保って、幼稚園から小学校、女学校までの一貫した人格教育の場でなければならぬ、と、ゲーンズ校長は常に強く主張するのであった。文部省の規準に従うことによって、ミッションスクールの時代は終わったのではないか、などという一部の悲観論者もいたが、ゲーンズ校長はむしろ反対に、今やその夜明けが来た、と確信するのであった。「ミッションスクールは、幼稚園、小学校のためのクリスチャン教師の養成が出来るではありませんか」と彼女は言った。「朝鮮や中国の留学生たちのために門戸を開放することも必要だし、朝鮮のクリスチャン教育者との提携も大切なことでしょう。そうした官公立学校では実施のむづかしい大切な働きがいくらでもあるではありませんか」とゲーンズ校長は言うのであった。事実、広島女学校では、明治四十三年頃には中国からの留学生を数名受け入れていたし、朝鮮からも年々留学生が来ていて、それはゲーンズ校長の在職中ずっと続いたので

ある。このように、早くから、学校を隣国との国際親善の実際教育の場としたことも彼女の持っていた教育理想の大きさを示す一つの実例であろう。

文部省指定校となった翌年の四月、ゲーンズ校長は学年始めに当って教師たちを集め、次のような所感を述べている。

「新任の先生方を迎えて喜びに堪えません。御一緒に今年度を楽しい有意義な年にしたいと望みます。本年は認可を受けてから最初の年です。私共は新しい責任を感じますが喜んでこれを果たしたいと思います。私共が自分たちの働きに確信を持ち、又学校を信じて最善の努力をするならば、自然とほかの人たちの信頼をも得るでしょう。私共の学校は市内のほかのどの学校にも劣ってはならず、どの学校よりも広く高い理想に立つものでなければなりません。学校の基礎は世界のすみずみにまで及ぶ愛でありました。異った国籍の人々と交わることは私共の視野を広げ、国際問題を一層よく理解する助けになるに相違ありません。

先生方は、最善を尽して生徒たちの教育に当たるといふ強い責任感を持っていたいただきたい。学校を支持してこれを盛んにすることは先生方お一人一人のつとめであります。

設備が最上でないので他校ほどよい指導が出来ない、と言う人があるかもしれませんが。

無論、必要なところから始めて、設備を最上のものにすることは私共のねらいであります。だが、設備にまさって重要なのは教師の人格と品性であります。世の中によりき貢献をした人物の生がいと調べますと、それらの人々の多くは、今日日本で受けられるような教育が受けられなかったことがわかります。けれども、彼らは誰か立派な人物の感化のおかげでより高いものへの幻を与えられたのでした。

アブラハム・リンカーンはその継母によって高く立派な理想を鼓吹されたのでありました。少年時代の彼は立派な設備の学校に行ったこともありません。フロレンス・ナイチンゲールのような体格の少女であれば今日の県立女学校にはとても入学出来ないでしょう。アメリカの大統領であったグラントは学校では鈍く、進歩のおそい生徒でした。グローバー・クリーブランド (Grover Cleveland) はのろく頭の悪い生徒で、算術のクラスについてゆけず、退学する寸前でした。彼の先生はある婦人でしたが、授業以外に余分に教えてやり、あきらめてしまわないで続けるように励まし、彼の心の中に困難に打ち勝つ勇氣と愛とを注ぎ込みました。こうしてこの先生は一人の偉大な政治家を世に送ったのでした。

毎日教室で生徒の前に立つ時、これらの生徒は、神が私共に託し給うて、指導と啓発とをゆだね給うた者であることを思いましょう。よく出来る生徒も出来ない生徒もおります。

が、一人一人はその家族にとってはかけがえのないいい娘であります。彼女らは又日本の国民であります。それ故、私共は常に最善を尽さねばなりません。（中略）

お互いは教師として、全精力を学校の仕事に注ぎ、一つ心となって、この年を最善のものとし、学校を日本一のものになろうと決心しようではありませんか。

教育の大使命を負うに価する教師となり、神によみせられる働き人となるように決心しようではありませんか。その時、私共は必ずや成功するにちがいない「
ません」



ゲーンズ校長と西村教頭

明治四十五年（一九一二年）、故郷から届いた一通の手紙が思いがけない悲報をゲーンズ校長にもたらした。妹のレイチエルが腰骨を挫く重傷を負ったというのである。

レイチエルはその時、教会婦人会のバザーのために、日本の布製品を壁に展示しようとして椅子の上にあがっていたのである。バザーの利益金は広島女学校にささげられることになっていて、布類はそのためにナニがわざわざ日本から送っていたのである。少しでも人目をひくように立派に飾ろうと、椅子の上にあがったレイチエルは、上の方にばかりつい気



明治43年3月本科及び保母師範科卒業生と教職員。前中央ゲーンズ校長、3列左端丹下千歳、4列左からK.シヤナン、ソータ、ラニアス、最後列左端から児玉弥三郎、1人おいて田尻種郎、高木、田辺琢爾、三宅半三郎、1人おいて菱沼小夏、戸野広ウマヨ、1人おいてM.クック、今村とき、羽仁キク。保母科卒業の中国留学生邵文貞外3名の顔も見える。

を取られた一瞬の出来事であった。

再び歩くことはむつかしいだろう、というその知らせを読んだ時、ナニは自分がその宣告を受けたかのような大きな衝撃と悲しみに、気も転倒する思いがした。すぐにも妹のそばへかけつけたかった。無論学校のことが気に掛からない訳ではない。初めて広島に来た時には、務めのために家族に背を向けたナニであった。

けれども、今度は事情がちがっていた。レイチェルはずっと独身を通していたのである。△自分が妹の面倒を見ないで、ほかの誰れにその責任をまかすことが出来よう、そう思うとゲーンズ校長は心がぎまった。だが、その結果によっては、自分の今後の生がいが変わってしまうようになるかも知れないことをも覚悟しなければならなかった。

大急ぎで帰国したナニは妹の看護と世話に専心して当った。看護の明け暮れに一年はたちまち過ぎてしまった。一方、発展途上にある広島女学校はゲーンズ校長を必要としていた。といって、今は不具者同様の妹を残して広島へ帰ることはとても出来なかった。悲報を受けた時と同じように、この時も、太平洋の隔たりがナニには恨めしく、もどかしく思えた。

とうとう、レイチェルはまだ全快していませんに、ナニについて一緒に日本に渡ることになった。これは若ランバスの発案で、その同情と援助とがなければ恐らくこのような道は開けなかったことであろう。はじめはナニも、そんなことはとても考えられない、とためらっていたが、祈りつつ考えぬいた末、伝道局のこの親切な計らいに感謝して従うことになったのである。

はじめ、レイチェルの回復はとても無理であろうと思われていた。が、ナニ・ビ・ゲーンズはたやすく望みを捨てる人ではなかった。日本に帰る前に、もう一ドルイビル行つてトラウィック博士(Dr. Trawick)に診察を受けた。その結果、かすかではあるが希望の光が見え出したので、更にシカゴに行つて、そこで有名な専門医マーフィー博士(Dr. Murphy)の手術を受けることになった。その手術が成功して、誠にうれしいことには、レイチェルはとうとう杖つえをついてなら歩けるところまで回復出来たのである。

かくして、大正四年(一九一五年)四月三日、二人がサンフランシスコを出帆した時、このつらい経験をとおして、一層堅く心が結ばれることになったといふ妹レイチェルと共に、再び日本への旅が出来ることを、ナニはどれほどうれしく思ったことであろう。

2 宣 教

思わぬ負傷のために姉と共に広島で暮らすことになったレイチェルは、自分に与えられた運命を甘んじて受けた。彼女は脚の不自由にも屈することなく、新しい環境のなかで、機会をとらえて、学校の内外で、むしろ雄々しく活動した。

レイチェルは、学校内で教えるより以上の時間を外部の青年たちのためにつかった。正規の宣教師ではない彼女には、却って自由に彼らの中へ入ってゆく機会が与えられた。そのため、市内の公立旧制中学校や高等師範学校の男学生たちは、彼女によって生きたアメリカ英語が学べることを喜んだ。レイチェルは更に、陸軍将校や県市の役人、銀行員などのためにも英語のクラスを開いたので、広い範囲によい感化を与えることになった。一般に、宣教師たちにとっては、初歩の英語を教えることは随分根気のいる退屈な仕事である場合が多いのだ。が、レイチェルは教えること自体に大きな興味を持っていたので、彼女の熱心さが自然と生徒たちの心にも通じて、熱心な生徒らが彼女のまわりに集ることにな

った。男子学校での唯一人の外国婦人教師であるうえに不自由な脚に対する同情もあつて彼らは一層彼女を親切にあつかった。レイチェルは頭もよくあつさりした性格でもあつたので、学生たちは、そのうちに、この気の置けない年配の婦人を自分たちのよい相談相手にした。彼らは人生のさまざまな問題まで彼女のところに持ち込んでくるようになった。

こうして、レイチェルは姉と共に家庭生活を営める喜びを味う外に、多くの日本の青年たちのために、図らずも「宣教師」の役割を果たすことになり、姉ナニとの質素な暮らしのうちにも、心豊かな朝夕をすごすことになったのである。

杖に頼つてたどたどしく歩くレイチェルの姿は、いつ見ても痛痛しくてナニはつらかったが、自分の運命に対しては一言の不平も言わずに、ひたすら学生たちを教えることに打ち込んでゐる妹のことを思うと、結局、すべてのことが相働いて益となつたのであろうかと、ナニはむしろ感謝の思いをいだくのであつた。

学校はゲーンズ校長の留守中も着実に発展をつづけていた。彼女が妹をつれて帰校した

前年の大正三年（一九一四年）には校地隣接の三十余坪が購入されたので、上流川町と鉄砲町にまたがる一区画全部が校地になっていた。帰校した秋には寄宿舎が増築されていたし、三年後の大正七年（一九一八年）には、通りを東に隔てた上流川町に六五〇余坪が確保されて、第二校地となった。これは二年後には更に三六〇坪、又四年後には一四〇坪が追加拡張されて、これが後に専門学校校地となったのである。在学生の数も大正八年には七〇〇名になっていた。

ナニ・ビ・ゲーンズが教育に注いだ熱意に劣らぬ関心を常に持ちつづけていたのは宣教に対してであった。

先に日本のミッションスクールを政府の基準に合ったものにする運動に参加したことによって、ゲーンズ校長は全国各地のキリスト教教育の指導者たちと知り合うことになった。キリスト教教育を将来有効に推し進めてゆくためには、学校が孤立してはいけなない、互いに横の連絡の出来る超教派的な一つの組織を持つ必要があると痛感した彼女は、これらの指導者との交わりを深める一方、YWCAこそこの目的にかなう組織であると悟った。

実はゲーンズ校長は既に明治三十九年（一九〇六年）に当時日本のYWCA運動のために尽力していたカナダのカロリン・マクドナルド（Miss Caroline McDonald）に地方支部をつくってくれるように、と要請していたのである。けれども当時だれも広島まで出かけて支部組織をつくってくれる人がいなかったのも、ゲーンズ校長はその後辛棒強く東京本部と連絡を取りつづけ、憲章の草案を手に入れると、とうとう自分でYWCAを組織した。そんな組織は学校を教会から分離さす危険がある、と批判する声もあったが、Y運動の良さと必要性を認めた彼女は、そんな批判などには気を止めなかった。

日本YWCA総幹事河井道（後の恵泉女学園創立者）との親しい交わりが始まったのもこのころからである。

ゲーンズ校長は忙しい河井道を広島に招き、二人で県下を巡回講演の旅をしたこともある。丁度アメリカで排日移民法が制定されたところであった。当時四万人もの広島県人がアメリカ本土やハワイに出かけており、そのうちの半数近くが加州にいるということであった。彼女は排日問題が起ったことを深く悲しみ、アメリカのクリスチャンの考えがどのようなものであるか、アメリカが物質的な富だけの国では決してなく、精神的な富を更に

大切にしている国であることなど、アメリカの正しい事情やキリスト教の精神を一人でも多くの人たちにわかってもらいたいと望んだのである。そのためには、河井こそ最適任の講演者であるとゲーンズ校長は確信した。河井は伊勢神宮の由緒ある神官の家に生まれたのだが、不思議な導きでクリスチャンとなり、そのために新渡戸稲造を知り、プリンマー女子大学に留学し、アメリカの高い精神生活を身をもって体験していた。そして最近、問題の加州の旅から帰ったばかりであつた。

ゲーンズ校長はこの講演旅行で、主として海田、廿日市、可部、三次などの町々を回り、多くの青年男女や町村民に接した。三次からは庄原へまでも足を延ばした。庄原は広島宣教の初期にランバス博士が伝道したことのあるゆかりの土地である。ナニはかつてほかの宣教師と共にこの土地を訪ねた時に出会った一人の老人のことを思い出した。「ランバス先生」に話を聞いたことを非常になつかしがつて、ナニらの来訪をよろこんでくれたこの老人のことを彼女は忘れることが出来なかった。それにつけても残念なことは、宣教師の手不足のために、その後誰もこの土地に福音をもたらす者がいなかったことである。

河井道とのこの巡回旅行の折りも、行く先ざきで必ずといってよいほど卒業生が会い

に来てくれた。既に結婚して主婦となり、母親となっている者もいたが、みな一様になつ
かしさに顔を輝かせて、再会を喜んでくれるのであった。中には、在学中にキリストの福
音を受け入れて信者になった者もいたが、卒業後は教会の交わりからもすっかり切り離さ
れた環境の中で暮らさなければならぬ彼女らであった。ゲーンズ校長はかねがね、卒業
生のために信仰上の助けを与えてやれないことを残念に思っていたのであるが、いま、そ
うした卒業生を目の当りにして、再会のよろこびと共に、心が痛んだ。

ゲーンズ校長は伝道局本部に対して、地方伝道のために腰をすえて献身する宣教師たち
を送ってくれるようにと、どれほど熱心に要請していたことであろう。けれども、そうし
た目的のためにはほとんどいってよいほど、人も金も送られなかったのである。県下の山
間や海辺の町や村々に、卒業後は福音の一言すら聞かれぬままの状態に置かれている多く
の卒業生たちが居ることを思うと、これらのか弱い小羊たちをそのままにして置くことは
大きな罪であるとする、ゲーンズ校長は感じるのであった。出来ることなら自分で出かけ
て行って、それらの卒業生たちを慰め励ましてやりたいとどれほど思ったことであろう。
けれども相手は大勢である上に交通の便は悪く、学校の仕事も手一杯の有様であった。

ナニ・ビ・ゲーンズが文書伝道を思いついたのは卒業生のためのこうした配慮に心をくだいた結果であった。このためにも彼女は自分の小遣いを注ぎ込んだ。こうして伝道用リーフレットや文書が卒業生に送られ、又時折りは学校のニュースや礼拝の説教を載せた刷物が配布されることになったのである。このことは後に教会で真剣に取り上げられることになった文書伝道法の先駆けであったと言える。

「アメリカから帰校して以来、毎年夏には卒業生を訪問するために田舎に出かけていました。……しかし人力車での旅行は費用と時間がかかりすぎます。だから、もし自動車が一台中あって、それに数人が乗り込み、伝道用の文書をも積込んで自由に田舎へ出かけてゆき、人々が集まる所で（人々はこのような自動車を見れば、どこでも集まって来ます）福音を語り、文書を配り、聖書を売り、そしてたびたび又訪れて、その人々とつながりをつけることが出来ればどんなによいことでしょう……」これは、当時母教会の監督になっていた若ランバス博士に書き送ったゲーンズ校長の手紙の一節であるが、福音に接したことのない田舎の人々に対する宣教は、長い間彼女の胸に抱かれていた一つの願いでもあった。

自動車による地方伝道―これも当時としては素晴らしい方法であった。が、どういうわ

けかほかの宣教師たちはだれもそれを実行しようとしなかったのだ。けれどもナニの熱意がとうとう実を結ぶ時が来た。大正九年（一九二〇年）ナニが名誉校長になって少し時間的な余裕が出来た時、彼女は早速ナシビルの本部に連絡を取ったのである。ナニの計画は幸にシ・アール・ポーター (Miss C. R. Porter) の共鳴を受けて、二、三か月後に自動車購入の資金が送られて来た。江藤という信者の運転士も見つかり、やがて一台の黒光りのするフォードがゲーンズ校長の夢を乗せて県下のあちこちに目ざましい伝道の働きをするようになったのである。

一日の授業を終えた後に、ゲーンズ校長は有志の教師たちとこのフォードに乗って、二、三時間の短い伝道旅行に出かけるのであった。一行は貧しい漁村へと出かけた。その人たちは生がい福音を聞く機会もなく、たとえ教会が近くにあって、自分で出かけてゆくような暇もない人々であった。そうした村の中に自動車が始まり、聞きなれない讚美歌の歌声が聞こえてくると、物珍しさに、人々はたちまち自動車を取りかこんで集まるのであった。その集まった群衆を見まわしながら胸を張って叫ぶのは、いつも金ボタンの上着をつけた運転士の江藤であった。

「皆さん、自動車はさまざまな用途に使われます。あるものは商用に、又あるものは娯楽に。けれども、いま皆さんの前に止まっているこの自動車は、そのどの用途のためでもありません。これは主イエス・キリストの福音を皆さんに伝えるという特別な使命のために、ここに来ているのであります……」

それに続いて二、三人が手短にわかりやすい話をすると、リーフレットが配られ、又希望者には安い版の聖書が売られるのであった。

こうしてナニ・ビ・ゲーンズは長い間の念願であった宣教活動を県下のあちこちに活発に展開していったのである。彼女はすぐれた教育者であったと同時に、又熱心な一人の宣教師であったのである。

ナニ・ビ・ゲーンズの中の宣教師魂が働きを始めると、それは広島県下にとどまっていることに満足していなかったようである。彼女が名誉校長になった年には遠く朝鮮にまで足を延ばしている。彼女はその以前にも満州を訪れていたが、後には再度満州に出かけ、又台湾や中国にまで出かけて行った。これらの訪問によつて、ゲーンズ校長は、これら東洋各地と日本との関係を自分の目で確かめたのである。当時、日本の東洋政策に対するアメ

リカの非難はしだいに激しくなりつつあった。母教会の会員の中にも、きびしい批判をする者がいたのである。

これらの旅によって、これら東洋の国々に起こりつつある重大な動きについても一つの明確な知識を持って帰校したゲーンズ校長は、善きにあれ悪しきにあれ、これらの国々の運命が日本の手の内にあることを知ることが出来た。必要なことは無責任な批判ではなくて、宣教師としての賢明な行動であり、キリストの使者としての献身的奉仕への努力であることを一層強く感じるのであった。

ナニ・ビ・ゲーンズが朝鮮、満州、中国各地の宣教師や友人たちへの働きかけに努力を続けたのは、彼女のこうした強い使命感からであった。彼女は彼らに対して日本のすぐれたよい面を強調することに努めたのである。これは母国の教会の人々に対しても同様であった。日本の悪い面だけを見て、事毎にその行動を非難する者が余りに多かったのである。

ナニは無論日本の悪い面にも充分に気付いていた。だが、日本国内の自由な、正しい力が一層強められるためには、良い面をも悪い面をも公平に見定めて、その上で、他国からの同情と理解と協力とが必要であることを彼女は強く感じていたのである。こうした考え



レィチェル・ゲーンズ

から、排日移民法が定められた時にも、彼女は、このような非キリスト教的措置が「重大な結果」をもたらす原因ともなり、日米間の平和と善意に暗い影をなげかけるものとして、アメリカ政府に対して激しい抗議をしたのであった。

第四部 冬

1 勝 利

——それから十年余りの歳月が流れていた——。

昭和七年

昭和七年（一九三二年）二月十日の夕暮、広島市内白島線の鉄砲町停留所にとまった電車から、一人の年配の外国婦人が降りた。電車が行きすぎるのを待って、その婦人は注意深く軌道を横切ると、鉄砲町の通りを東へ、ゆっくりと足を運んでいった。両肩をおおいはど幅広い衿付の長いコートの下からは、更に長くゆったりしたスカートが足首のあたりまでとどいていた。その下からわずかに見えるかがとの低い黒靴の足取りには、さすがに老人の用心深さが感じられたが、背筋はまだしゃんとして、姿勢のよいその体格は堂堂としていた。真中から分けられて、ひつつめにたばねられた頭髮はもう半白で、その澄んだまなざしは柔和そのものである。だが、高く通った鼻筋の下に一文字にひきしめられている口元、いく分張ったあご、まっすぐに向けられた顔つきの全体に、どこか犯しがたい威

敵が備わっていた。片腕に白いセルロイドの輪のついた手提袋きずをさげていたが、それは何の変てつもない質素な布袋であった。

ベンガラ塗りの窓格子のはまった古い家が軒を並べている鉄砲町の通りをこの老婦人がゆっくりと、角かどの八百屋の前まで来かけた時、丁度その店先に立っていた一人の小学生の男の子が目ざとく見て、小さく叫んだ。

「やあ、西洋人ぢゃ！」

すると、そばに居たもう一人の大きい方の男の子がそれを聞きとがめて、

「馬鹿！西洋人じゃて——　　ありやゲーンズ先生で！お前知らなんだんか？」

と、さも相手をさげすむかのようにたしなめた。

「ゲーンズ先生」と呼ばれたその老婦人——私立広島女学校名譽校長ミス・ナニ・ビ・ゲーンズは子供たちの方へ、ほほえみをこめたまなざしを向けられると、そのまま四つ辻よっつ辻をまっすぐに通りすぎて行かれた。

通りの左手には、赤れんがのへいでぐると周囲を取りかこまれた一区画があつて、そこが広島女学校であつた。ゲーンズ先生は自分の学校の南側のれんがべいに沿つてゆかれ

る。高等女学部の旧校舎と寄宿舎との間の庭に植えられている大きなばしょうの株はまだ冬枯れたまま、ささくれた朽ち葉をお化けのようにへいの上に見せている。それを先生は一寸見上げられたが、そのまま、上流川町筋を更に東に横切つて少しゆかれると、道路に面して北側にあるゲインズ・ホールの小さな門の中へと入っていかれた。

植込みにそつて敷石の通路を少しはいると玄関であつた。そこにはしゅろ竹の鉢が置いてあり、正面の壁にはキリストの大きな額が掛けてある。

ドアのあく音を聞きつけて、丁度居間でレイチェル・ゲインズと話し込んでいた小堀清子が出迎えに出てきた。

小堀清子は、学校の職員をしていた父の死後、横浜の叔母のもとへ行くはずであつたが、ゲインズ校長のすすめによってひとり広島にとどまつた。ゲインズ校長から受けた暖かい庇護に感じた清子は、広島西部教会付属幼稚園の保母を勤めながら、いまは年老いた恩師の世話に當つていたのである。特に、足の不自由なレイチェルはことの外彼女の親身も及ばぬ行届いた心遣いや世話に心から信頼していた。

ゲインズ先生が亡くなつてからずっと後のことになるが、日米の関係が日と共に險惡に

なり、そのため学校も受難期を迎えたことがある。「スパイ学校広島女学院を廃校にせよ！」などというビラが街にはられ、排斥演説会まで開かれる重苦しい時局になった時のことである。宣教師たちはやむを得ず本国へ引き揚げねばならなくなった。

「どんなことがあっても、自分は広島にとどまる」と言っていたレイチェルも、周囲の事情で仕方なく広島を去らねばならなくなった。足の悪いレイチェルの身を案じて、小堀清子はその時、アメリカまでレイチェルに付き添って行った——戦争が今にも始まろうとしていた昭和十六年（一九四一年）の春のことであった。果して、船がサンフランシスコに着いた時、一寸した手違いもあって、清子は一時抑留されねばならなかった。しばらくして、やっと自由の身になれたのは、その時同行していたゲーンズの年来の友人サムエル・ヒルバン博士（Dr. Samuel M. Hilburn）の尽力があったからであった。

その年の十二月八日、日米の間に戦端が開かれた。レイチェルは非常なショックを受けて発病したまま、一月十三日、不幸な戦争を悲しみながら加州バサデナで寂しく永眠した。小堀清子はレイチェルの遺志に従って、今度はその遺骨を持って広島に帰らねばならなかった。ニューヨーク出帆の最後の交換船にやっとの思いで乗ることが出来た。だが当時

の事情としては、敵国人となったレイチェルの遺骨などを持ち帰ることはとうてい許されないことであった。あきらめ切っていた清子は、出帆直前、船室の自分のベッドの上に白い小さな包みがのせられているのを見てびっくりした。恐らくヒルバン博士が清子の荷物の一つとして、あとから届けるように手配してくれたのにちがいない。アフリカを回っての戦時下の長い不安な船旅の間、清子は薄氷を踏む思いでひそかにそれを守りつづけた。横浜に着いた船から無事にレイチェルの遺骨を持ち出すことが出来たのは、その時同船していた一人の日本の外交官が示してくれた義侠的な同情のおかげであった。

こうしてレイチェルの遺骨は、その生前の望みどおり、比治山の墓地に姉のかたわらにねむることになったのである。詳しく述べると、これだけで別に一篇の物語になる秘話である。

玄関まで出迎えた小堀清子はゲーンズ先生からコートを受け取りながら言った。

「お帰りなさい。寒かったでしょう。どうでした？ 病人さんは………」

脊髄カリエスでもう長い間寝たままのEという青年のことを、ふとしたことから聞き知られたゲーンズ先生は、午後四時の散歩の折りなどを利用して、もうたびたび彼を見舞っ

ておられたのである。いつ快復するとも知れない孤独なこの青年の薄倖を哀れんで、先生はこの日、ラジオのセットを持って見舞われたのである。病人は先生の暖かい情に涙ぐんで喜んだのであった。

「とても喜びました。けれども大へん気の毒です。よい食べ物ありません―あしたまた、スープを持って行きますですな……」と先生は答えられてから、

「レイチェルはもう帰っていますか？ おキヨさん……」

とたづねながら、居間へ入ってゆかれた。

十畳ほどの居間には支那じゅうたんが敷かれ、中央に円い支那卓が置いてある。それらは北京在住の親友、金博士から贈られたものである。その円卓の上のシクラメンの鉢がわずかに華^{はな}やいだ色をこの部屋に漂わせている。

高等師範学校での授業から少し前に帰っていたレイチェルは、ストーブのそばの高い背付きの楽な椅子^{いす}に掛けたまま姉を迎えたが、待ちかねたように言った。

「ナニ、さきほどミスタ・ヒノハラが来て、モンブシヨのニンカがあった、と大よろこびでしたよ」

それを聞かれると、ゲーンズ先生の顔は見る見るうちに喜びに輝いた。

「おお……とうとう……」

そう言われただけで、あとはしばらく言葉も出なかった。

無理もない。学校のカレッジ部が文部省から認可を受けて、専門学校令による専門学校となったのである。その通知の来るのを首を長くして待ちかまえていた日野原善輔校長は、認可されたという電報を受け取ると、その足でゲーンズ・ホールに駆けつけて来たのは、つい先ほどのことであつた。

自分の生がいをかけて育てあげて来た広島女学校が、専門学校として、日本政府の文部省から正式に認められる日が来たのである。ゲーンズ先生の胸に言い表わしようもない喜びと感激の思いが潮のよう^{うしほ}に沸き出て来たのも当然のことであろう。レイチェルにはそんな姉の気持が胸にひびくようにわかつた。

「お祝いをしなければなりませんね。ナニ」

「無論ですとも、レイチェル。ミスタ・ヒノハラが何もかもよく準備してくださるでしょう。同窓生たちもどんなに喜ぶことでしょう。一層学校を誇りに思ってくれることでしょう」

う……ただ……」

「ただ……どうしたの、ナニ？」

「私はいま、ふと、ミスタ・ニシムラやミスタ・スチュアートのことを思い出したので。カレッヂがニンカされたのはこの方方のおかげです。この二人と一緒にこの喜びが共に出来ないことだけを私は残念に思うのです……」

「お二人とも本当に立派な人たちでしたね。……神さまが豊かにお恵みくださるでしょう。……ミスタ・スチュアートには手紙を書くでしょう？」

「ええ、今晚さっそくに書きましょう。ミセス・スチュアートもきっと一緒に喜んでくださることでしょう……」

「うむ……」とうなづいたレイチェルは、隣の部屋で食卓を整える音がし始めたのを聞きつけて、

「おキヨさんを手伝ってきます」

というと、杖をつきつき立っていった。

ゲーンズ先生は窓の方へ目を移された。植木にかこまれた芝生の庭のすみずみには、は

や早春の夕闇がおとづれようとしていた。だが暮れのこる空はひろびろと、木立の彼方にくっきりとさえわたっていた。

大正九年（一九二〇年）四月に開設された専門部は、十四年にはカレッジ部と改称されたが、それがこのたび専門学校に昇格することになったのである。

最初、大正八年に神戸で開かれた宣教部年会で、広島女学校の改組織と拡張案が教育部委員会から提案されて、保母師範科のランバス女学院への合併と共に、専門部の開設が推薦されたのであった。だが、その時、先に述べたようにゲーンズ先生は、保母師範科の転出には将来の発展を見越して同意されたのであるが、専門部の開設はまだその時期ではないと、むしろ反対の意見であった。

ところが、先生がこの年会から帰校されて間もなく、広島県市当局から思いがけない呼び掛けを受けられることになった。広島女学校で、英語・家事・音楽の教師養成のための専門部を開設しないか、と勧めて来たのである。こうした教科の教師養成には、ミッシェンスクールの方が公立学校よりも一層効果をあげられる立場にある、というのである。日

本のお役所からのこの呼び掛けは、この問題に対する先生の態度を一変することになった。日本の教育界に新しい日が明けつつあり、自分がかつにもそれに気付かずにしたことに、先生はがく然として目がさめる思いであった。自分の在職中に私立学校に対してこのような呼び掛けがされようとは、先生はその時まで夢にも思っておられなかったのである。日本が目ざましい進み方をしていて、情勢がすっかり変わりつつあることがはっきりわかったいま、これに対してさっそく、適切な対策を立てなければならない、と、先生は心をきめられた。

その結果、ゲーンズ校長は先の年会での自分の意見を率直に改めて、さっそくナシビルの伝道局本部に、思い切って百万弗の補助金を要請された。これにはさすがのランバス監督も面くらってしまった。

次に、このような規模による学校の改組拡張の仕事は、明らかに男手を要するものであることを見抜かれた先生は、最初自分が考えておられた計画をもあっさりと変更された。既に六十に近い先生は、学校管理の実務から近く退くことを心に置いて、既にその前年、伝道局本部とも連絡をとり、将来自分の後任者となるべき若い婦人宣教師の人選を進める

ように依頼しておられたのである。

だから、ランバス監督がその年の十二月に、思いがけなくも伝道局からの推薦案として、大正九年（一九二〇年）四月一日からS・A・スチュアート（Rev. S. A. Stewart）を広島女学校の校長に任じ、N・B・ゲーンズを名誉校長にしたい、という連絡を受けた時、これは一体どういうことなのかと益々面くらってしまった。

さっそく照会の結果、ゲーンズ校長がこの推薦案に全幅的に賛成された上でのことを確かめた監督は、大正九年一月二十三日付でこの任命を下したのであった。

このような経過でゲーンズ先生は名誉校長となられたのであるが、校長の本務から退かれたことは、その活動が少なくなったことでは決してなかった。クラスでの授業は手いっぱいに受持っておられたし、伝道のことは片時もその心から離れなかったのである。学校管理の仕事から解放されるとさっそくに、卒業生のためや、県下各地への活発な宣教活動を始められたばかりでなく、遠く朝鮮、満州、中国へまでその活動の足を延ばしてゆかれたことは既に述べたとおりである。

実際、時間的に自由がきく立場となられた先生は、人にもすすめ、自分からも積極的に

手がけられた仕事をつぎつぎとつくっていかれた。そのためには資金も少からず必要であったが、先生はこれらの仕事のために多額の私費を惜しげもなくささげられた。が、自分のためにはいつも極めて質素であられた。ある時、旅先の先生から下着類を送るようにと連絡を受けたお手伝いのおばさんが先生の衣類たんすを開けたところ、下着類の多くにつきが当てられていることを知って驚いてしまったほどであった。

先生は自分の後継者スチュアート校長には全幅の信頼を置かれ、すべてをまかせ、決して自分が出しゃばるようなことはされなかった。教師たちの中には、つい従来のおり学校のさまざまな問題を持って先生のところへ来る者もいたが、先生はその都度、彼らを新校長のところへ追いやられた。自分ならそうはしないが、と思われるような時でも、先生は口出しをされなかった。新校長には新校長なりのやり方のあることを信じておられたからである。

こうした先生の信頼はスチュアート校長夫妻の献身的な働きによって充分にむくいられた、といえる。スチュアート校長は宣教師として、明治の末ごろから、三田尻、防府、徳山の各地に伝道し、又朝鮮の元山でも宣教活動に当たっていたのだが、校長として着任した時に

は、先に述べたように、以前の教師アンナ・ラニアスがその妻となっていた。夫妻は、与えられた自分たちの新しい仕事に非常な熱意で取り組み、立派に学校の運営に当たったのである。大正十一年七月に休暇で帰国した時、ある宗教関係の学校からよい待遇で招きを受けたが、彼らは、自分たちの働き場は日本にある、と確信していたので、このよい誘いも断わった。

「広島女学校でひとたび鋤^{すき}に手をつけた以上、それを固守したかったのです……」
とスチュアートは後に述べているが、彼らも又、使命に生きた廉直の宣教師教育者たちであったのである。

スチュアート校長が着任して早速手をつけたことは、各部に部長を置くことであつた。従来はゲーンズ校長の下に西村校主が一切を切りまわしていたが、それは有能な西村にして始めて可能な大仕事であつた。だが、学校は今や一人の有能者が一切の管理に当るには余りに大きくなっていることに、賢明なスチュアートはすぐに気付いたのである。そこで、西村静一郎を専門部部长に、児玉弥三郎を普通部部长に任命し、小学部部长は引きつづき田中哲吉にまかせた。

西村がこうして専門部部长になった時、学生はわずかに十名に満たず、専用の校舎も無

論なかったのである。このような専門部を育てあげるために、西村部長はどれほど心を砕いたことであろう。一方、資金を得るために訴えの手紙を書き続けておられたゲーンズ先生の努力が少しずつ実のり始めていた。

ランツホ
ール竣工

スクラッ
グス・ホ
ール

大正十一年（一九二二年）一月にはまず、第二校地に専門部寄宿舎として、将来の発展を見越し、当時としては素晴らしく立派な三階建の「ランツホール」が完成した。これはランツ夫妻の好意による賜物で、夫人は先生のフロリダ時代の親友であった。その年の暮には又、専用の校舎として「スクラッグズ・ホール」が竣工した。セントルイスの篤志家 R・M・スクラッグズ（R. M. Scruggs）の好意のおかげであったことは先に述べた。学生も二十九名になっていた。翌十二年三月家事科第一回卒業生七名が出たが全員各地の女学校へ就職した。大正十三年（一九二四年）には理科室、裁縫室、割烹室、救護室もつくられた。

カレッヂ
部と改称

翌十四年八月には専門部はカレッヂ部と改称されたのであるが、それを更に将来は専門学校に昇格させよう、という目標が立てられたのである。しかしそのためには昇格に必要な供託金十万円をつくらねばならなかった。そこで、学校、同窓会（大正九年六月結成）父兄

後援会の三者が一体となって募金運動を始めることになった。

広島女学校教会が設立されて、カレッヂ部教授元吉潔がその牧師を兼ねるようになったのもこの年のことであった。

大きくなった学校には、それに相応しい経済的な裏付けによる安定さが必要なことは当然である。先に先生が莫大と思える補助金を伝道局に要請して監督らを面くらわせられたのも、先生がその実際の必要を見越しておられたからに外ならない。が、伝道局は従来から、かろうじて学校を支えて来ていたような実情であった。その経済事情は年々悪くなっていたのである。

こうしたことも理由の一つとなって、とうとう昭和二年（一九二七年）、学校の今後の維持は、伝道局婦人部が当ることになったのである。この年の在籍者数は幼稚園七〇名、小学校二二二名、高等女学部三五八名、カレッヂ部一二〇名で総計七八〇名となっていた。

その翌年、さっそくに最初の大きな贈物が与えられた。婦人部宣教五十周年に当たっていたので、その年の特別献金が広島女学校のためにささげられることになったのである。その結果、カレッヂ本館「ジュビリーホール」(Jubilee Hall)が三階建の偉容を第二校地に見

せることになった。この設備は昇格へのたしかに大きな一步前進であった。

だが、当時の十万円は大金であった。学校では、海の彼方からのこうした暖かい援助に励まされ、教師たちも一体となって奔走し、学生たちは休暇を利用して、音楽・演劇の会を各地に催し、基本金集めに活躍した。もしこの募金運動がもう少し早く、伝道百年記念の年に始められていたならば、とゲーンズ先生は残念に思われたが、今となっては仕方がない。総ては学校のためである——先生は自分の誇りをすてて、訴えの手紙を故国へ書き続けられた。そして、どうしても更に土地購入が必要になった時、とうとう、妹の老後のためにもと、苦心して準備しておられた一万弗をすらすさげようと提案されたのであった。

このようなことの合間にも、学校の前進をはばむのではないかと案じられるような出来事も起ったのである——西村部長もスチュアート校長もこの間に相ついで退職したのであった。

西村の退職

同盟休校

昭和三年、西村部長は一身上の都合によって、三十三年間の勤めから退くことになった。それが直接の原因ではなかったが、そうした変動の機会をよいことに一部の不平分子が動き出し、それがとうとう生徒の同盟休校の騒ぎにまで広がった。スチュアート校長は賢

辻村鑑

脇山司家
太

スチュア
ート校長
退職

明に事態を収めたので学校は間もなく平静にかえった。カレッジ部長としては新たに辻村鑑が就任し、又この時退職した高等女学部長児玉弥三郎の後任として脇山司家太が就任した。スチュアート校長は、持病の喘息が悪化して、止むなく昭和五年（一九三〇年）一月に退職して帰国しなければならなかった。

こんな事情で、ゲーンズ先生はもう一度校長のバトンを引きつがれねばならなかった。

先生は、いまはもう日本人校長の時代が来ている、と痛感された。

そこで広い範囲に周到な人選がなされた結果選ばれることになったのは、当時日本メソヂスト神戸中央教会牧師として令名のあった日野原善輔であった。

四月、先生は四十年にわたって手塩にかけて来られた学校を、この有能熱心な新校長の手に、安心してゆだねられたのであった。

日本人の初代校長となった日野原善輔は山口県萩の出身で、関西学院神学部で学び、後ノース・カロライナ州のデューク大学（Duke University）に留学した努力家であった。幻を描き、独創的で、実行力をも備え、又熱弁家でもあった。彼はゲーンズ先生から引き継ぐことになった基督教主義教育の新しい使命に感激して、全力を傾けて学校経営に

日野原
善輔

あたった。昭和七年、校名を広島女学院と改め、同時に盾型たての新しい校章を制定し、又後には広島市牛田町に三万余坪の校地を購入して将来の発展に備えたのも彼である。学校を古い型のミッシェンスクールから、近代的なキリスト教主義学校へと脱皮させるために、日夜心をくだいて経営に当たったのであった。

このように専門学校昇格までにはさまざまな起伏はあったが、多くの人々の祈りと協力によって学校は発展していったのだ。その姿を自分の目で見る事が出来るのは誠に仕合わせなことだ、とゲーンズ先生が思われたのも当然なことであろう。

実際、先生はその晩年をおだやかな仕合わせのうちに日々を過ごされた。

先生が自分のうちに深く抱いておられたその仕合わせは、自然とその容貌態度にもあらわれた。かつての先生は、親切ではあるが、そのきびしく正しい生活信条のために、生徒たちにはむしろ侍のようなきびしさと厳格さの印象を与える「こわい先生」であったのだ。だがいまは、円熟した「聖者のような先生」になっておられた。

聖者のような先生

このような変化を先生の上にあたえたのは、単に、幾山河けがの峻しい道をも無事に通り抜

けて来られた長い年月の歩みだけではなかった。嶮しい——と言っても、八四十年に余る
広島での歩みは、むしろ祝福の連続であった。Vと、先生には思えるのであった。この長い
年月の間には、たしかにきびしい試練といえる苦しい時も一再ならずあった。けれども今
となつては、それらはむしろ、△景色の明るさを一層引き立てるための、ほんの小さな黒
い影にすぎなかった。Vと先生には思えるのであった。

では、ゲーンズ先生の晩年の顔に和やかな光をそえることになつたものは何であつたら
うか。その一つは、多くの優れた同僚宣教師たちの協力が得られて学校が支えられてきた
ことであろう。先生が校長となられてから絶えず気を配られねばならなかつたことは、土
地建物の確保とよい助力者とを得ることであつた。いま、そのいずれもの必要が一応満た
され、ことに良い協力が与えられて来たことは先生にとっては確かに大きな満足であつ
た。「広島でミス・ナニ・ビ・ゲーンズの働きを助ける」ことは、当時婦人宣教師たちに
とつては一つの名誉とすら思われていたのである。従つて選ばれて来た宣教師たちはいず
れもそれぞれに優れた人物であつた。前述のステュアート夫人となつたアンナ・ラニアス。
又、マーガレット・クックをはじめ、シャナン姉妹。エディス・ソーター。エバ・ウイ

リアムズ。ジャネット・ミラー。キャサリン・トリシマン。ジェン・フルトン。エシル・ニューカム。アニス・シラー。キャサリン・ハッチャー。ジェン・マクドウエル。そして最近ではキャサリン・ジョンソン。ロイス・クーパー。メリー・フィンチなどが、いずれも故国の快適な生活を後にして、宣教と教育のために多くの不便に打ちかちつつ、ゲーンズ校長を助けて尊い働きをささげていたのである。

中でも、三十年にわたって先生を助けつづけているアイダ・シャナン、カサリン・シャナン両姉妹の働きはかけがえのないものであったが、ジャネット・ミラーが仲間にしたことも忘れられないことであった。

アメリカ南部の有名な牧師の娘であるジャネットは、生来善意の持主であったが、たまに旅行で日本に来ていた時、広島女学校のことを聞き、自分が役に立つならば、と助力を申し出たのであった。すぐれたバイオリン奏者であり、オーケストラ指揮者の腕を持つ彼女は、学校の音楽部に素晴らしい貢献をした。だがそれ以上に、後には広い範囲にわたって特異な尊い働きをした。彼女は、広島市内外の不幸な人たち―老人、盲人、貧窮者たちのために暖かいキリスト愛の実践をしたのである。ミラーは自費で福島町に土地を買い、

社会事業のセツルメントを開いた。彼女はそこでの働きによって医療の必要を痛感した。帰国後改めて眼科を勉強して再び東洋に帰り、しばらく中国上海で奉仕した彼女は、更に暗黒大陸といわれていたベルギー領コンゴの密林で医療活動に当ったのであった。彼女はゲーンズ先生に書き送った手紙の中で「貴女はわたしを新しく生きるようにして下さいました……」と述べているが、既述したマコーレー夫人同様、そのうるわしくもひたむきな奉仕の精神は、ゲーンズ先生のかたわらで働いているうちによびさまされた、やむにやまれぬキリスト愛から出たものであった、と言わねばなるまい。ほかの宣教師たちも、ゲーンズ先生からは無言の深い感化を受けていたことはいうまでもない。

長い年月にわたって女子教育に尽してこられたゲーンズ先生が、教育功勞者として公の表彰を受けられたのも当然である。その晴れの榮譽は三回に及んだ。

第一回は大正十年、西村静一郎と共に広島県から表彰された。晴れがましいことのきらない先生は、この時帝国教育会から贈られた金牌は、金ではない、という口実で事務所に預けられてしまった。次は大正十三年（一九二四年）、時の皇太子殿下御成婚を記念して皇

太后陛下から賜わった三重ねの銀盃一組だけは大切にされた。そして大正十五年、摂政宮殿下が広島に行啓された折、教育功勞者として特に拝謁を仰せつけられたのである。この時は先生よりもむしろ学校中がその光榮に感激して興奮した。だが肝心の先生はその折りに着られるのに相応しい礼服の持ち合わせがなく、折よく本国から来広したばかりのメリーベネット (Miss Mary Bennet) のを借りてようやく急場を切り抜けられた。この時拝領された御紋章入りのお菓子は「これは自分一人が私すべき榮譽ではない」と言われる先生の心をくんで、もち米の中に搗き込むと言う工夫の末に、全校の教職員生徒らに配ばられた。

表彰のことについてもう一つ記しておこう。後のことになるが昭和三十五年（一九六〇年）は、万延元年（一八六〇年）に徳川幕府の軍艦咸臨丸が日米修好通商条約書交換のための使節らを警護してはじめて太平洋を渡った時から、丁度百年目に当る。この記念すべき年に当り日米修好通商百年記念協会は、日米の交友親善に尽した一人としてミス・ナニ・ビ・ゲーンズを表彰した。この年が先生の生誕百年記念の年に当ることも、偶然とはいえ、不思議な一致であった。

皇室から再度の榮譽を与えられた先生を市民たちが知らぬはずはない。先生が電車の停

留所で待ち合わせておられるような時、「ゲーンズ先生じゃ!」とささやき合う市民たちはひとしく尊敬の目なごしを送った。彼らは順をゆずって先生を先に乗せ、車内でも席をゆずって先生に対する敬愛の気持を示した。

こうしたことにもまさって、いつも先生の心を静かな喜びで充たしたものが外にもあった——同窓生たちである。その中でも、将来の指導者ともなり得るほど有能な卒業生があったことである。

そのうちの一人は、昭和五年、ナシビルにある有名なジョージ・ピボデー大学 (George Peabody College for Teachers) で M・A・の称号を得て帰朝し、姉妹校のランバス女学院で教えている広瀬ハマコであった。県下の草深い田舎から選出されて来た彼女は外国人などとは見たこともなく、始めてゲーンズ先生の前に立った時には、男の先生かと思ひ違ひしたほどであった。だが、寄宿舎に入って学校生活を送りはじめると、誠に優秀な生徒であることをだれもが認めた。高女部二年生の時には福音を受け入れて受洗した。卒業と共に専門部英文科に進んだ彼女の将来に、ゲーンズ先生は大きな期待をかけられたのである。故国の従兄から送られた好意の奨学資金を彼女に与えられたのもそのためであった。

U、T、Y、S、などと、日本国内ばかりでなくヨーロッパやアメリカの各地でまで活躍しているすぐれた卒業生が既に出ていた。社会的な働きはしなくても、結婚してよい家庭をつくっている立派な卒業生たちは各地に多くいた。そうした卒業生から便りを受け、又時折りに彼女らの訪問を受けることは、先生にとっては何より大きな喜びであった。

昭和四年（一九二九年）に完成したゲーンズ・ホールも、そうした卒業生たちが恩師のためにささげた、せめてもの真心からの感謝の贈物であった。

先生は最初この話が出た時「私を愛するならば学校を愛して下さい」と言って断わっておられた。だが、出来上ったこの小じんまりした明るい二階建ての洋館が、自分たちの部屋のほかに同窓生たちの宿泊部屋や集会室、娛樂室まであって、それが卒業生や在校生たちも利用出来ることを知られると、これが学校の建物になるならと、非常に喜んで同窓生の好意を受けられたのであった。

専門学校認可の快報が届いた翌二月十一日は紀元節であった。式が終って午後、恒例の全校生徒音楽会が開かれ、高女部講堂は熱心な聴衆であふれた。

四時前に終って、先生が校庭の通路を校門のところまでこられた時、門衛の福田老人が小柄の身体をびよこんとかがめて先生にあいさつした。

「先生、おめでとうあります。カレッジの許可が来たそうにありますのう」

「うむ、うれしいことですね、福田さん」

「ほんまにのう……これで先生もご安心でありまひょう。時に先生、うどん券がはあみてましたて（もう無くなりました）」

「そうですか、ではあとでゲーンズ・ホールへ来て下さい。小堀さんにお金をたのんで置きます」と言って、先生はゆっくりとゲーンズ・ホールへ帰って行かれた。病人を見舞うためにスーパの器を取りに帰られたのである。

うどん券というのは失業者たちに与えるために先生が考え出された食券である。当時は不況で、「ルンペン」と呼ばれている浮浪者がたびたびゲーンズ・ホールへも無心に来た。金を与えると飲んでしまう者が多いので、先生は上流川通りのある食堂と特約してうどん券をつくり、その扱いを門衛の福田老人に託しておられたのである。

二月十三日は土曜日であった。ゲーンズ先生は午前中専門部予科の英語のクラスを教え

られた。書取りの時、机の上にかがみこんで、顔を紙の上にくっつけるようにして書いている生徒の様子を見て

「胸を張って！皆さん、姿勢が悪いですな。それ身体に悪いことですな」

と、いつものように注意された。

一週間後の二十日夕刻から、教職員互助会主催の昇格祝賀晩餐会が羽田別荘で開かれたがゲーンズ先生のお顔は見えなかった。どうされたのだろう、といぶかる一同に、「一寸風邪気味なので、強いて出て出られないこともないが、要心して欠席する」との先生の伝言が伝えられた。

昇格感謝式

広島女学院と改称

新校章

二月二十二日月曜日、この日は先生にとっても恐らく最もうれしい日であったにちがいない。午前九時から学院内だけの昇格感謝式が開かれた。学校が財団法人広島女学院と改称されたこと、新しい校章が制定されたこと、広島女学院専門学校が四月から開校されることなどが、正式に発表されたのである。

正午、同窓会主催の祝賀午餐会が専校三階の大食堂で開かれた。この日の天候は朝からどんよりした薄曇りで、二月の風はまだ冷たかったが、学院内は暖かい明るさにつつまれ

ていた。

午後二時から、再び高女部講堂で、来賓や父兄、同窓生など多数を迎えて祝賀式が開かれた。讚美歌、聖書朗読に続いて、君が代、勅語奉読があり、日野原院長が式辞を述べ、吉川富美、守谷きよみ両教諭のピアノ二重奏がはなやかなメロディを会場にひびかせた。それに続き、鳩山文相、千葉広島県知事、伊藤広島市長を始め来賓、父兄、同窓生、生徒代表などの祝辞が、長々と続いた。

講壇の両側は講堂の入口になっていて、教職員席はその一方の入口に近い講壇脇にあった。スチームによる暖房が既に三年前から始められていたので室内は暖かった。だが時々、入口の隙間からの冷たい風が一番前の席におられたゲーンズ先生のところまでも入って来たらしい。式の間そんなことに気付く者はいなかった。

音楽部主任ロイス・クーパーの伴奏で、セルゲイ・パルチコフがバイオリンの独奏をした。辻村部長の昇格運動経過報告の後に頌栄が歌われ祝禱があった。最後に日野原院長があいさつした。そのあいさつのなかで、院長はゲーンズ先生を一同に紹介した。

「……広島女学院の今日の隆盛と、今回与えられた特別な喜びは、すべてゲーンズ先生の

四十五年にわたる尊い御奉仕の賜ものであります。私はいま、我が広島女学院の名誉院長として、又我が学院のお母さまとして、ゲーンズ先生を改めて皆さんにご紹介出来ることをこの上ない喜び又光榮と存じます」

会衆一同のわれるような拍手のうちに、先生はゆっくりと演壇の前に進まれた。いつもの柔和な顔色はその時心なしかさえないようであったが、満足の思いはかくすことは出来なかった。

「皆さん、ありがとうございます。学校がこのようなになったのは、神さまのお恵みと沢山人たちの協力のおかげです。これからもこの学校が、神さまと人々によるこばれ、又役立つものになりつづけますよう、どうか皆さん、これからもおたすけ下さい——」

言葉はたどたどしく短かったが、それは不思議な力で会衆の胸にひびいた。

式が終つて、来賓や同窓生たちは、改めて先生のところへ来てお祝いの言葉を述べてあいさつした。

潮が引くように一同が講堂から出てしまった後も、ゲーンズ先生は唯一人、ベンチに残されたように坐っておられた。家事科担当の宮崎みよ教諭が気付いて声を掛けた。

「先生、どうなさったのですか？」

「宮崎さん、学校がこんなに立派になったことはうれしいです。けれども、ミスタ・ニシムラが今日ここにおられない、それが残念のことです……」

「本当ですね……」と、宮崎も心からうなづいた。

「みんなは私だけをほめます。学校が立派になったのはミスタ・ニシムラのヘルプがあったからです。それ、忘れてならないことですな、宮崎さん。よくおぼえていて、いつか、卒業生や生徒たちにも、きっと伝えて下さい……」

先生は手提袋からハンカチを取り出して、そっと目に当てられた。

「はい、先生、かしこまりました。きっと伝えましょう」

と答えたが、なぜ先生が自分にいいのこすように言われるのか、と、宮崎教諭はその時ふといぶかしく思った。

四時から幼稚園のホールでお茶の会が開かれた。これには、市内はもとより各地から集まった新旧の同窓生たちが出席した。在校中の回顧談や昇格基本金募金運動の苦心談などがつぎつぎと語られたが、すべてはいまはなつかしい思い出である。会場には明るい笑い声が

絶えなかった。

中央の席でこのにぎやかな人たちにかこまれて、ゲーンズ先生は無言のうちにも、しじゅう満足そうにしておられた。

一同が記念撮影にと幼稚園の前庭に出た時には、既に肌寒い夕暮が迫っていた。この時の写真が先生との最後の記念のものになろうとは、その場にいた者は誰一人として思ってもいないことであつたろう。

2 永 生

盛り沢山な祝賀式の行事も滞りなく終って、外はもう薄暗くなりかけていた。

ゲーンズ・ホールに帰られた先生は、さすがに少し疲れておられた。

「疲れたし——一寸寒気もする……」といって、暖かい飲み物をとられただけで、夕食もそこそこに先生は二階の寝室に引きこもられた。

それからしばらくして、レイチェルが隣りの小堀清子の部屋をノックして先生の発熱を告げた。熱は三十九度もあった。びっくりした小堀はあわてて三川町の伊達医院に電話し

た。

翌二十三日の朝も熱は続いた。沈痛な顔付きの伊達博士が「急性肺炎です……」と告げた時、レイチェルは非常なショックを受けた。

学校では思いがけない知らせに、教師も生徒も＼信じられない＼と言う顔付きをして驚いた。前日は一日中式に出ておられた先生である。だが、「肺炎」と言う病名を先生の年令に結びつけると、だれもが不安な気持がした。

翌二十四日もまだ高い熱が続いた。午前中、各校では教師の祈禱会とうが開かれてひたすら先生の快復が祈られた。その夜は伊達博士父子が泊り込んで、交替で病状を見守られた。博士は卒業生の夫君で、先生が特に信頼しておられた医師である。

二十五日の朝には熱がやっと三十七度まで下がったが、脈はくは一二〇となり、衰弱が目に見えて加わってきた。先生はうつらうつらとねむりつづけられた。時折目をさまされると、学校のこと、鷹匠町の託児所のことなどを言いつづけられた。この託児所は先生が貧困家庭のために開かれたもので、貧しさのために弁当も持って来られない子供たちもいたのである。先生は北京旅行の折りに中国人の医師から教わった豆乳の作り方を職員や母

親たちに教えるなどしてこの託児所の子供の栄養についてはいつも気を配っておられた。

「お疲れになりますからあまりお話をなさらないように……」と伊達博士が注意した。先生はうなづいて、又ねむりつづけられたが、しばらくして目をさまされると又しても、

「ミスタ・ニシムラのために何かしてあげなければなりません……」

といったり、時には中国や朝鮮のことなど、平素心にかけておられることを口にされた。

午後、日野原院長が見舞った時は、丁度先生は目をさましておられた。院長の顔を見てうなづかれた。しばらくして先生の口が動いた。先生が何を言い出されたのかと、日野原院長は緊張して顔を近づけた。

“We have touched the outside, ……”（私たちは外側にはふれました……）

“but, we have not touched the inside, yet.”（だが、内側には、まだ手をつけていません）それから一寸間を置いて、枕辺の聖書を読んで祈ってくれ、と言われた。院長はいわれるままに先生の大きな古い聖書を取り上げてばらと頁をくった。その時、小さなアメリカの国旗が聖書にはさまれているのが眼についた。日野原院長は福音書の中から聖句を読んで、病床の先生に主の癒^{いやし}と力強い支えとを祈り、又学校の歩みに主の導きを祈った。

ゲーンズ先生はかすかに「アーメン」と称えられた。

日野原院長はそれからすぐに辞去したが、いたいたしい先生の顔とあの小さな星条旗が目に浮び、弱々しい声ではあったが、はっきりと

「内側にはまだ手をつけていません……」

と言われた先生の言葉を繰り返し思いつづけた。

翌二月二十六日は金曜日であった。朝からひどく冷えこんで、時折り思い出したように粉雪が風に舞う寒い日であった。

一たん下がっていた熱は前夜から再びあがり、容態は悪化してきた。呼吸も困難となり、すぐに酸素吸入が始められたが、朝から昏睡状態がつづいていて昼近くには全く危篤状態となられた。レイチェルを始めアイダ・シャナン、ジョンソン、クーパー、フィンチが交替で枕辺に詰めたが、どうすることも出来ず、ただ息をつめて不安気に見守るばかりであった。

午後二時七分、それまで苦しそうにあえいでおられた先生の呼吸が、消え入るようになつた——ついに先生は七十二年の生がいそ、安らかに終えられたのである。

一日おいて、二月二十八日、日曜日の午後、思い出多い高女部講堂で先生の学院葬が営

まれた。講壇のまわりから窓辺まで美しい花でうづめられた。色とりどりの花の美しさもその日ばかりは深い悲しみをあらわしていた。数日前の喜びの日には多くの人々が明るく思いで集ったこの講堂に、その時以上に多くの人々が、その日はしめやかに、ひっそりと集まった。彼らはいま、花で飾られているその演壇に、あの日は元気で立ってあいさつされたゲーンズ校長の姿を思い浮べた。威厳にみちたあの柔和なお顔は、もう見られなくなったのかと思うと、一そうつのる敬慕の思いに胸をひたしつつ、人々は先生の靈柩きゆうに最後の別れを惜んだ。

突風のために大切な燈火をふいに吹き消されたかのように、広島女学院はひと時、暗い寂しさと頼りなさにつつまれた。けれども、その黄昏のような寂しさの中に、なお一条の強い光が絶えず学院に関係のある人々を支えつづけた。それは創立の始めからこの学園を導いてきた光であった。その光は、永遠の生命に生きられたゲーンズ先生のゆるぎない信仰につらなる、残された人々の信仰の力であった。

五月二十三日の午後、青葉につつまれた比治山の中腹、広島市の街を見下ろす丘の上で、ゲーンズ先生の納骨式が営まれた。

関西学院のサムエル・ヒルバン博士と日野原善輔院長が司式して、先生の遺骨は永久に広島の地にねむることになったのである。

はじめ適当な墓地が見当らず、そのため、お墓は神戸に、と一時はきまっていたのである。学院関係者や同窓生たちはこれを残念に思い、なんとしても広島の地に、と心をくだいた。市長をはじめ市の係員たちも先生の遺徳をたたえ、広島の人々のために墓地がないはずがない、と好意的に協力してくれた。ことに市学務課長中邑元は、日野原院長と共に夜暗くなるまでライトをつけて墓地さがしに尽力してくれた。その結果、ようやく、比治山の中腹に墓地が見つかったのである。

その年の九月二十六日、ゲーンズ先生の墓碑除幕式が、その比治山の墓地で行なわれた。石材として最上の「あじ石」でつくられた講壇型の見事な墓碑が同窓生たちによってさげられたのである。

その墓碑には、開かれた大形聖書の両面に、先生の選ばれた学院の標語「我らは神と共に働く者なり」が、左側に英文で、右側に漢文で彫られ、正面には校花あやめを圖案化した以前の校章の下に唯一字「ゲーンズ」と英語で刻まれている。

墓碑の前に立てられている碑銘には英語で

「ナニ・ビ・ゲーンズ 一八六〇年四月二十三日 アメリカ合衆国ケンタッキー州に生まれ 一八八七年来朝 一九三二年二月二十六日 広島に没す」

とある。

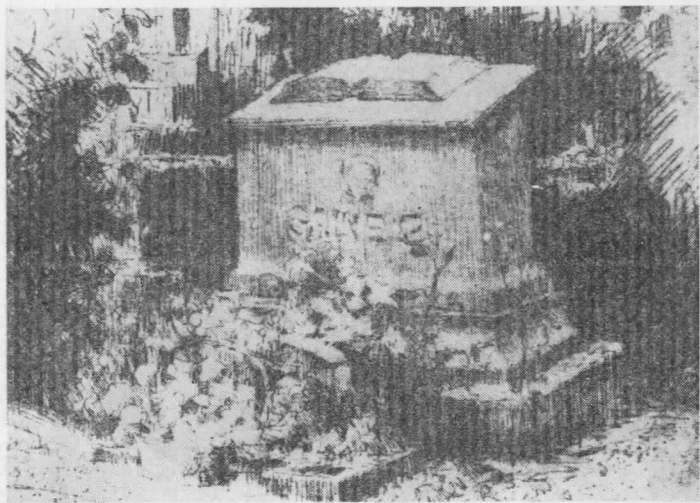
ゲーンズ先生を敬慕する人々が、四季折り折りにここを訪ねて、この墓碑の前にたたずむ時、頭上に枝を張るアカシヤのこずえをわたる風の中に、いまもなお先生の声をきく思いがする。

「私を愛するなら、学校を愛して下さい、ですな……」

と、そのなつかしい声は語りかけるのである――。



晩年の面影



比治山にあるゲーンズ先生の墓碑

あとがき

ゲーンズ先生の伝記を書くように、と命じられてから、多忙のうちに、早や一年近くもたってしまった。そしてはからずも、先生の第三十四回の命日を迎えるころ、まがりなりにもこのようにまとめることが出来た。

先生の伝記としては、関西学院大学教授サムエル・ヒルバン博士の英文による名著「GAINES SENSEI」がある。正確な資料に基づいた立派な著書である。この物語を書くに当って、同博士は同書の翻訳と自由な利用とを、広島女学院長広瀬ハマコ先生を通じて、心よくおゆるし下さった。全訳すると非常に長いものになるので、適当に取捨してこの物語の骨子にさせていただいた。そのままを翻訳してつかわせたところも多い。年代、事項は正確を期したが、出来るだけ平易に、読みやすいようにとつとめて、物語り風にまとめたのである。いずれにしても、同書によらなければこの物語は生まれ出ることは出来なかったであろう。ヒルバン博士の御好意に深く感謝する次第である。

そのほか、広島女学院創立五十周年記念誌、広島女学院新聞、聖和八十年史、南美宣教

五十年史などに執筆されている先輩諸先生方の記事をも用いさせていただいた。広瀬院長をはじめ多くの方々のお話からもよい示唆を与えられ、資料をいただいた。

ゲーンズ先生についてのこれらの記事を読めば読むほど、また話を聞けば聞くほど、先生の偉大さが感じられた。三十数年の昔、先生から直接受けた深い印象が、私自身の心にもまだあざやかに残っている。だが、この物語ではとてもその片鱗をすら現わすことが出来なかった。また、多くの「話」を割愛しなければならなかったこともあわせて、誠に残念に思う。ただこれが一つの手がかりともなって、将来さらによい伝記が生まれることになれば幸である。

先生の姓は、「ゲーンズ」と呼びならわされていたようである。だが、英語の発音は〔geinz〕であるから、むしろ「ゲーンズ」の方が正しい発音に近いように思う。外来語の中には、「ニユース」のように「ズ」が「ス」に固定されてしまっているものもあるが、固有名詞である姓は、出来るだけ正しい発音に近くかな書きすべきであると思ったので、あえて「ゲーンズ」としたことをおことわりしておく。カバー表紙の背に入れた校章は先生の時代のものであるので選んだ。

本文の中で敬称をはぶいたこと、また、文のはこびや表現の未熟さなどで読みづらいことなど、不備なところも多々あることと思うが、なにとぞお許し願いたい。

最後になったが、序文をいただいた広瀬院長、面倒な校正を引き受けてくださった佐藤光子先生、先生の好まれたあやめのカットを画いて下さった岡田竹男先生、そのほかいろいろとおたすけ下さった多くの方々に深く感謝する。

昭和四十一年九月

小 田 切 快 三

年譜概略

年号	西暦	年令	ゲーンズ並びに学校の事項	参 考 事 項
万延元	一八六〇	誕生	四月二十三日米国ケンタッキー州ユニオン郡に生る。その年同郡ウェブスタ郡に移り住む。	米国南メソヂスト教会日本の伝道を計画。 アブラハム・リンカーン大統領に選出される。 遣米使節渡米。咸臨丸太平洋を渡る。 南北戦争始まる。日本伝道の計画中止される。
文久元	一八六一	一		砂本貞吉生まる。奴隸解放令出る。 ヘボン横浜に家塾を開く。 十月十四日西村静一郎生まる。
三	一八六三	三		新島襄国禁を犯し上海より渡米。 南北戦争終る。リンカーン暗殺される。
元治元	一八六四	四	十一月四日妹レイチェル誕生。	米大陸横断鉄道開通。
慶応元	一八六五	五		学制頒布。横浜に最初の新教教会組織される。
明治二	一八六九	九		切支丹禁止令解かれる。
五	一八七二	一二		米国メソヂスト監督教会マクレイ関東地区に宣教を始める。
六	一八七三	一三		
七	一八七四	一四	フランクリン・フィーマル・カレッヂ入学	廃刀令出る。海老名弾正ら熊本バンド結成。東京女子師範学校附属幼稚園開設。
九	一八七六	一六		
一〇	一八七七	一七	W・R・ランバス夫妻中国伝道のことを伝	

二一	一八七八	一八	え聞き感動する。 フランクリン女子大学在学中回心。この年卒業。病臥。九月ユニオン郡公立学校教師となる。	内村鑑三ら札幌バンド結成。 沢山保羅梅花女学校創設。
二二	一八七九	一九		教育令制定。
二三	一八八〇	二〇		砂本貞吉函館より渡米。
二四	一八八一	二一		五月七日、砂本貞吉桑港にて回心受洗。十二月青山学院創立。
二五	一八八二	二二	母キヤサリン死去。フロリダ州リーズバークにて公立学校教師となる。	五月六日、米国南メソヂスト監督教会再度日本宣教を決議する。 ギール福岡女学校を開く。
一八	一八八五	二五		九月、J・Wランバス夫妻、W・Rランバス夫妻、デュークス神戸に日本宣教部を開設する。砂本貞吉帰朝。老ランバス広島初訪問。広島伝道開始。十一月バルモア学院の前身「読書室」開設。
一九	一八八六	二六	フロリダ・カンファレンス大学に就任する。砂本貞吉西太工町に私塾を開く。私塾を細工町に移す。	五月八日、砂本貞吉母八重ら十二名受洗。 広島美以教会組織される。 鹿鳴館仮装舞踏会開かれる。
二〇	一八八七	二七	四月、砂本の私塾、杉江タツの家塾、木原適処の女子部合同して細工町に広島英和女学校開設、砂本校主となる。九月一日、サンフランシスコ出帆日本に向う。九月二十三日、横浜着。十月十二日、広島着。翌十三日初登校する。	
二二	一八八八	二八	広島英和女学校上流町に移る。	西村静一郎神戸にてJ・W・ランバスより受洗。ランバス夫人神戸婦人伝道学校を創設する。B・W・ウオタス広島巡回区担当宣教師となる。

明治二二	一八八九	二九	四月から八月まで広島英和女学校閉鎖される。ゲインズ神戸に引揚げる。十月、ゲインズ広島英和女学校を開き校長となる。普通科四年の上に本科二年を置く。上流川町に校地購入される。
二三	一八九〇	三〇	メリーバイス、ローラ・ストライダ来任。七月、上流川町に校舎建設。予備科二年、普通科四年、高等普通科二年と改める。尾藤徳義幹事としてゲインズ校長を補佐する。
二四	一八九一	三一	一月、教育勅語謄本下付される。六月、第一回卒業生四名を出す。九月幼稚園開設、古賀ふじ主任となる。台風のため園舎倒壊。十月出火校舎全焼。一週間後仮教室を上柳町に設けて開校する。
二五	一八九二	三二	二月、幼稚園認可。再開園。九月、上流川町に校舎竣工。母親クラス開設。生徒の家庭を巡回訪問。市内の各所に出張日曜学校開設。
二六	一八九三	三三	四月、附属小学校設置認可。六月、賜暇休暇にて帰米す。ガニア・ハラント留守中代理校長。予備科を三年とす。幹事を廃す。
二七	一八九四	三四	八月二十一日タコマ港出帆日本に向う。九月、A・D・ブライアンを伴い帰校する。
二八	一八九五	三五	ジェイムス来任。九月、西村静一郎を教頭に招く。保母養成科を始める。安永夫妻小學校に来任。
			二月、大日本帝国憲法発布。四月広島市制開始。八月、砂本貞吉海外伝道のため広島を去る。九月二十八日 W・Rランバス関西学院を創設する。
			四月、字品港竣工。五月、広島美以教会紙屋町に会堂建設。九月、市内にコレラ患者六一六名出る。十月、教育勅語発布。
			一月、内村鑑三不敬事件起る。 W・Rランバス帰米する。
			三月、西村静一郎八幡浜に夜学校を開く。四月二十八日 J・W・ランバス博士神戸にて死去。山陽鉄道神戸・糸崎間開通。
			六月、山陽鉄道広島まで開通。W・R・ランバス南メソヂスト教会総主事となる。八月、日清戦争始まる。ウオターズ夫妻帰米。W・A・ウイルソン後任宣教師として来広。十月、広島市内に始めて電灯つく。

二九	一八九六	三六	広島女学校と改称する。高等普通科を高等科と改称。文科、理科、教育科を置く。裁縫専修科を設ける。単級の小学校を四学級とする。	フライアン婦米。
三〇	一八九七	三七	保母養成科第一回卒業生四名を出す。病臥する。トマス来任。	牛田村神田に市の上水道水源池が出来る。
三一	一八九八	三八	予備科を四年とする。裁縫専修科に読書、算術、習字を課す。九月 アンナ・ラニア来任。	八月私立学校令出る。同月文部省訓令第一号により官公立学校に於ける宗教教育禁止される。九月、神戸婦人伝道学校がランバス記念伝道女学校と改称される。
三二	一八九九	三九	寄宿舎成る。近接地一、四〇〇坪購入。裁縫専修科卒業生四名を出す。	南メソヂスト教会日本宣教部年会広島にて開かる。
三三	一九〇〇	四〇	フアンシイ・マコーレー幼稚園に來任。四月、予科を二年に本科を五年とする。裁縫専修科を技芸専修科と改称、刺繍科を加えて三年とする。	一月、広島県立広島女学校設立される。三月、広島高等師範学校設立される。
三四	一九〇一	四一	寄宿生らの聖日礼拝を広島美以教会より女学校講堂で行うことにする。西村静一郎礼拝主事を兼ねる。	我が国最初のバス横川・可部間に開通。
三五	一九〇二	四二	九月、賜暇休暇により帰米する。マウド・ボンネル代理として來任。	二月、日露戦争始まる。
三六	一九〇三	四三	マーガレット・クック幼稚園に來任。	J・W・ランバス夫人蘇州にて永眠。
三七	一九〇四	四四	九月、アイダ・シャナン來任。	サンフランシスコ大震災。
三八	一九〇五	四五	一月、上流川町校地隣接地四〇〇坪購入。八月、財団法人となる。 九月、校舎新築落成。	砂本貞吉呉に教会開設。

							大正
九	八	七	六	五	四	三	二
一九二〇	一九一九	一九一八	一九一七	一九一六	一九一五	一九一四	一九一三
六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三
<p>三月、職町に三六〇坪購入第二校地拡張。 四月、ゲインズ名譽校長となりS.A.S.チュ アイト校長となる。専門部を開設、師範科 をこれに入れる。西村静一郎専門部長とな る。本科実科は普通部と改称、児玉弥三郎 普通部長となる。附属小学校部長を田中哲 吉とする。六月、同会窓組織される。</p>							<p>場町に開く。七月三十一日、明治天皇崩御 の奉悼式、九月十三日、御大喪儀選擇式を 行う。</p> <p>フルトン幼稚園主任。鷹匠町に託児所を開 く。二月、創立二十五周年祝賀式を開く。</p> <p>隣接地三十余坪購入。上流川町及鉄砲町に またがる一かくの地全部校地となる。</p> <p>四月三日、妹レイチェルを伴いサンフラン シスコ出帆日本に向う。九月、寄宿舎増 築、十一月十日、大正天皇御即位御大礼奉 祝式をあげ、記念植樹する。</p> <p>高等科を廃し、師範科を置く。技芸専修科 を実科と改称する。</p> <p>マクドウェル幼稚園に就任。</p> <p>二月、上流川町に六五〇余坪を購入し第二 校地とする。</p> <p>十一月、神戸にて開催の南メソヂスト教会 宣教部年會にて広島女学校保母師範科と ランバス記念伝道女学校の合併決議、専門 部開設決議される。</p>
<p>第一次世界大戦終る。 米國、メソヂスト教会伝道開始百年記念の 年。</p>							<p>四月・七、八日、米國日曜学校視察団来広。 広島女学校講堂にて日曜学校生徒大会を開 く。</p> <p>一月廿六・廿七日、広島女学校、教会聯合 慈善音楽会を市公会堂にて開く。第一次世 界大戦始まる。</p> <p>十一月 大正天皇即位式。</p> <p>アイダ・シャナン、ランバス記念伝道女学 校校長代理就任（一か年）</p> <p>ロシヤ革命起る。</p>

大正一〇	一九二一	六一
一一	一九二二	六二
一二	一九二三	六三
一三	一九二四	六四
一四	一九二五	六五
一五	一九二六	六六

三月、師範科ランバス女学院保育専修部に合併。クック、ハッチャー、師範科三名大阪ランバス女学院に移る。五月、ゲインズ名譽校長、西村静一郎専門部長は教育功労者として広島県より表彰される。	一月、第二校地に専門部寄宿舎ランツホール竣工。四月、普通部を高等女学部と改称する。師範科を廃す。六月、上流川町に四〇坪購入。第二校地拡張。十二月、専門部本館スクラッグスホール竣工。	三月、高等女学部の実科を廃す。四月、特待生制度をつくる。五月、広島女学校賛同会（父兄有志の後援会）組織。九月、関東大震災のため在校生、同窓会はその救恤事業に活動する。十月、専門部洗濯教室落成。	ゲインズ名譽校長、皇太子殿下御成婚に当り教育功労者として皇太后陛下より銀盃一組を受ける。四月、専門部家事科第一部、第二部の別を廃す。英文科に予科を置く。六月、専門部理化実験室、裁縫室落成、幼稚園舎階上に会議室とピアノ練習室とを設ける。	四月、田中小学部長退職、神谷重遠後任となる。六月、賛同会の寄付により専門部門。八月、専門部をカレッジと改称する。九月、広島女学校教会設立。カレッジの授元吉澤牧師となる。十二月、カレッジの専門学校昇格に要する基本金募金運動を開始する。	二月、小学校手工教室落成。五月、皇太子殿下の行啓に当りゲインズ名譽校長は教育
---	--	--	---	--	--

三月、ランバス女学院開設される。九月二十六日、W・R・ランバス監督横浜にて死去。（六七才）	九月、関東大震災。十二月、広島（旧制）高等学校設立される。	皇太子殿下御成婚。広島西部教会観音町に会堂建設。アメリカの排日移民法実施さる。	砂本貞吉下関教会を辞す。バルモア学院の女子部独立してバルモア女子学院設立される。
---	-------------------------------	---	--

昭和二	三	四	五
一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇
六七	六八	六九	七〇
<p>功労者として拝謁を賜う。十月、創立四十周年記念祝賀式をあぐ。十二月二十五日、大正天皇崩御、二十六日奉悼式をあげる。</p> <p>一月、本校の経営は、米国南メソヂスト教会伝道局婦人の補助を受けることとなる。二月七日、大正天皇御大喪遥拝式。ハロルド・パーマー氏を招き英語教授法研究会を開く。八月、リトミック運動法及舞踊遊戯講習会を開く。十一月、伝道局婦人部長ケリス女史来校。</p> <p>七月、カレッヂ部長西村静一郎退職（在職三十三年）十一月、天皇陛下御即位大礼奉祝式をあげ、ゲインズ名誉校長教育功労者として広島県より表彰される。</p> <p>二月、辻村鑑カレッヂ部長就任。三月、高等女学部長児玉弥三郎退職。四月、脇山司家太後任部長となる。附属幼稚園を国泰寺町に移す。六月、同窓会寄付のゲインズホール竣工。賛同会改組広島女学校父兄会組織される。八月、高等女学部長舎暖房装置成る。</p> <p>一月、S・A・スチュアート校長退職。ゲインズ校長事務取扱となり、二月、高等女学部長高等科入学に關し修業年限五年の高等女学校と同等以上の学力あるものと指定される。四月、日野原善輔、日本メソヂスト広島女学校教会を廃し、日本メソヂストカレッヂ中央教会に合同する。七月、カレッヂ英文科卒業生に對し中等教員英語科無試験検定の特典が与えられる。ゲインズ</p>	<p>四月広島県立女子専門学校設立される。</p>	<p>四月広島文理科大学開学。 フレザー英語学校生徒を中心として日本メソヂスト広島南部教会国泰寺町に設立される。関西学院西宮市に移る。</p>	<p>十二月 広島教会上流川町に新会堂落成。</p>

昭和	六	七
一九三一	一九三二	七二
七二	七二	七二
<p>ズ名誉校長、妹レイチェル養老年金を学校に寄付し、幟町に四六〇余坪購入、第三校地とする。</p> <p>二月、財団法人広島女学院と改称。新校章を制定、カレッジは専門学校令による専門学校に昇格。二月二十四日、昇格祝賀式をあげる。二月二十六日、急性肺炎のため永眠。五月二十八日、学院葬。五月二十三日、遺骨を比治山墓地に葬る。九月二十六日、墓碑竣工。</p> <p>九月、満洲事変起る。</p>		

使用参考文献

- 1 Samuel M. Hilburn, Gaines Sensei, 1936
- 1 S. H. Wainright, The Methodist Mission in Japan, 1935
- 1 W. W. Pinson, Walter Russell Lambuth, 1925
- 1 創立五十周年記念誌、広島女学院、昭和十一年
- 1 広島女学院新聞第一号、広島女学院、昭和七年六月
- 1 南美宣教五十年史、中村金次編、昭和十一年
- 1 聖和八十年史、聖和女子短期大学、昭和三十六年
- 1 新修広島市史、広島市役所、昭和三十六年

ゲーンズ先生物語

(非売品)

昭和四十一年九月十五日 印刷
昭和四十一年十月一日 発行

編 者

小 田 切 快 三

発 行 者

学校法人

広 島 女 学 院

広島市牛田町七二〇

広島市大洲町七丁目

印刷者

中本総合印刷株式会社